

つなごう、  
我が郷土の歴史と文化



古賀郷土史研究会二十周年記念誌

古賀郷土史研究会

「栞」(しおり)



意味は案内・手引き

諺「木をけずりけずりして道しるべとした」

目次

ごあいさつ 二十周年記念誌発行にあたって . . . . . 1

古賀郷土史研究会の歴史 . . . . . 3  
17

古賀郷土史研究会の会員による自由な寄稿文集

天降神社が鎮座した古野古墳群 . . . . .	山下 善行	19
筑前竹槍一揆と古賀での事件 . . . . .	森 泰一	22
働き世代の温故知新探求・通年講座（誌上企画提案） ↳ 郷土史研究会 20周年企画、土曜の朝か夜講座の開設↳ . . . . .	吉住 長敏	25
定礼制度について . . . . .	有吉 敏高	26
薦野増時と秀吉公 . . . . .	加来 正熙	28
古代「西海道の駅家「席打駅」は古賀市の何処？ . . . . .	大須賀理恵子	32
古賀郷土史研究会に入会して . . . . .	曲 たつ恵	33
清滝仕掛水（清滝水路・清滝溝）について . . . . .	有吉 敏高	34
古賀市、福津市の少式氏エピソード . . . . .	永留 邦臣	36
鹿部山周辺の魅力 . . . . .	吉住 長敏	38

郷土の戦国武将 薦野氏・米多比氏の特集

米多比氏が二派に分裂する、大友系と大内系に分かれて争う	飯島勇一郎	45
天降神社の釣り鐘 大願主は女傑	土師 武	48
幕末の名家老 立花増熊 〓余禄 筑前人の立花嫌い 〓	植田 謙一	51
村山一族の先祖と米多比氏の関係	村山美帰子	55
牛方馬方騒動と米多比鎮久の御預け	飯島勇一郎	60
戦国古賀の名将 軍師薦野増時の生涯	土師 武	63
花押で読み解く 左近大夫(増時) 文書を検証する 〓余話 薦野・米多比の宅所襲われる 〓	植田 謙一	69
鉄砲戦の先駆け 大友・毛利の立花山合戦	土師 武	74
二天一流の兵法家、立花峯均	飯島勇一郎	79

戦国時代の古文書は楽しい

薦野増時の自筆文書 城納米の報告	85
米多比文書(大友義鑑所領安堵状) 「米多比の地二十五町」を還附される	86
米多比善治文書 「ねたミふく女」道雪が米多比弾介の娘福女に送った書状	87
米多比五郎次郎宛の大友宗麟書状 米多比鎮久の祖父、父が戦死する	88
薦野文書 「潤野原合戦」増時宛て道雪・統虎の連署状	89

編集後記・会員紹介

## いあいさつ

### 二十周年記念誌発行にあたって

私ども、古賀郷土史研究会は令和四年に二十周年を迎えることになりました。この記念すべき節目の年にあたり、二十周年記念誌を制作しようと会員一同で決めました。どうせ作るなら後世に残るような記念誌にしたいとの一同の思いです。

今から二十年ほど前から歴史や遺跡に注目が集まるようになり、古賀市においても郷土の歴史や文化についての関心が高まってきました。当時は郷土の歴史や文化・地名由来など全く知られていませんでした。これは古賀市にこれらを研究する会が存在しないことが理由と思われていました。

当時の古賀市歴史資料館の石井忠館長から古賀の郷土に関する考古、歴史、地名、動植物などあらゆる分野から、郷土を掘り起こし、郷土史研究に興味・関心のある人たちと共に組織を作ったかどうかと提案がなされたのが最初のスタートと聞いています。当時の郷土に詳しい長崎初男氏・石井忠氏を中心に数名の人たちが集まり、古賀郷土史研究会を立ち上げたのが始まりで、「古賀の歴史と文化」の研究会として正式に発足しました。当時の人たちはほとんどの人が鬼籍に入っていますが、その後、今日に至っております。

古賀郷土史研究会は郷土の考古、歴史関係はもとより、地名、石碑、文化など、幅広い分野を自分たちの課題として掘り起こしながら日々調べています。今回の記念誌については、郷土の想いを込めて会員の自由な寄稿文を載せています。また郷土には、薦野増時、米多比鎮久の二人の武将がいますが、来年が薦野増時の生誕四百年になるということで、薦野氏・米多比氏の特集を組み、今までにない切り口で薦野氏・米多比氏の活躍を伝えていこうと思っております。この記念誌が後世の人たちに参考の一端になれば嬉しいです。

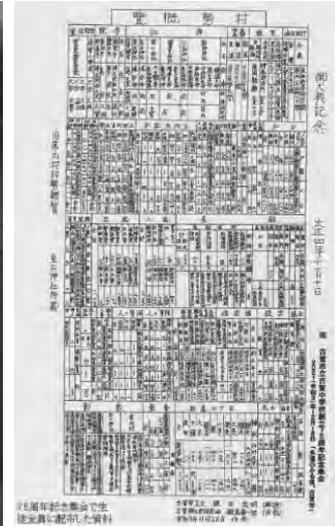
最後になりますが、古賀郷土史研究会が二十周年を迎えることができたのも、今まで多くの方々の存在と応援があったからだと感謝しています。これからも地域の歴史・文化の発信に努めていきたいと思っています。

どうか今後とも宜しくお願いいたします。

古賀郷土史研究会

会長 飯島勇一郎

## 活動の様子



席内村の「村勢概覧」

### 皇石神社（鹿部）拝殿内の大扁額の解読に挑戦

令和3年11月9日、古賀郷土史研究会と古賀市教育委員会文化課が共同で、文字が劣化し読み取りが難しい状態になっている畳1枚ほどもある扁額の解読に挑みました。解読の結果、この扁額は大正4年の大正天皇の御大典記念として席内村の「村勢概覧」を奉納したもので、当時の席内村の村勢がびっしり書いてありました。



### 古賀郷土史研究会の勉強会

毎月第1土曜日、13時30分から16時まで、リーパスプラザこが交流館103号室で勉強会をしています。会員の人たちが調べた地元の話や歴史の話、その他いろんな話の発表に冗談を交えながら意見交換をしています。

## 古賀郷土史研究会の歴史

### 古賀郷土史研究会発足までの経緯

平成12年(2000)10月に至り、歴史・遺跡に注目が集まるようになり、古賀市においても郷土の歴史・文化について関心が高まってきました。当時、古賀市歴史資料館長であった石井忠氏から古賀の郷土に関する考古、歴史関係、地名、動植物などあらゆる分野から、自分たちで課題を掘り起こし、郷土史研究に興味・関心のある人たちと共に組織を作ってはどうかという提案がなされました。これが最初のスタートでした。

### 古賀郷土史研究会の発足の準備

平成13年(2001)1月27日に長崎初男氏、石井忠館長など、他に数名の人たちが賛同して集まり「古賀郷土史研究会設立準備会」が発足し準備を始めました。しかしどうして運営していいのか分からず、当時の宗像歴史研究会の事務局(宗像市民生課)の尾山清氏を招いて話を聞き、規約や組織について指導を頂きながら郷土史研究会の運営と組織作りを学びました。また、長洋一氏を招いて「粕屋の古代」の講演をして頂きました。

### 古賀郷土史研究会発足にあたって

平成14年(2002)9月21日14時から、最初の「古賀郷土史研究会」の発会式をサンフレアこがの2階、視聴覚室で開催しました。

趣旨としては、発掘によって明らかになった事実もありますが、歴史や民俗に至ってはほとんどが明らかにされていない状態で、まして地域の地名由来や個人が収蔵している文書など、全く知られていなかった状況は、古賀の郷土史を研究する会が存在しないことが理由と思われたので、これらを明らかにし、古賀の歴史・文化を研究しようとするものでした。

そこで古賀郷土史研究会を作り、趣旨に賛同していただける方々によって、今後の会の発展を期したいと意志がまとまりました。

## 古賀郷土史研究会の最初の開催

平成14年(2002)9月21日に古賀郷土研究会として、「古賀の歴史と文化」の研究会として長崎初男氏を代表に、幹事に安武敏夫氏・渋田喬氏、庶務・会計に村山美婦子氏を専任し正式に開催しました。当時の参加者は長崎氏、石井氏、安武氏、渋田氏、村山氏、植田氏、松木氏、詫間氏、舘氏、平尾氏、安永氏、竹下氏、田中氏、藤野氏、林氏、安川氏、小山氏の人たちで始まりました。

この開催にあたり、今後の活動として、①古賀に関する資料を記録・保存していく。②例会を毎月開催する。③古文書関係の資料調査し保存する。④研究発表の場として、一般公開(歴史講座)などの開催を行うなど、当面のスケジュールや年会費3000円を決定して開催は終了しました。

## 古賀郷土研究会の会規(規約)が決まりました

名称 古賀郷土研究会

目的 古賀の郷土に関わる全般に研究調査を行い、古賀の文化の解明の役割を担う。

事業 原則として毎月第一土曜日14時から例会を行う。

講演会・研究会の開催 機関紙の発行を行う。

会費 15年度から年間3000円とする。

役員 当分の間、次の役員を置く

代表Ⅱ長崎初男 幹事Ⅱ安武敏夫、渋田 喬、庶務・会計Ⅱ村山美婦子

事務局 平成15年度まで歴史資料館に置く。

以上の会則が決定され、今後の活動の指針が出来き、一同決意を新たにしました。

## 古賀郷土研究会(古賀の歴史・文化・自然の研究会)のコメント

近年、古賀市の考古・古代の発掘成果は目を見張るものがあります。永浦古墳の甲冑のみごとくに驚嘆し、鹿部田渕遺跡の大型柱列群には「粕屋屯倉」を想起し、馬渡・束ヶ浦遺跡から大量の青銅器群は弥生のクニの存在をうかがわせるものがあります。しかしそれ以後の歴史や民俗に至っては、残念ながら大きな流れは分かっています。地域や地名、個人に蔵された文書など、ほとんど闇につ

まれています。僅か2〜300年前の事が実は分かっているようで、はつきりしないのが実情です。その理由の1つには古賀に郷土史を研究する会が存在せず、個々の研究に委ねられていることが考えられます。

この度、郷土史研究会を作り知識や研究を持ち寄り、共に文書を読み地名を掘り起こし、皆で考え解き明かすことができなにか考えていこうと思います。

(平成14年9月21日、古賀の歴史・文化・自然の研究会立ち上げ委員会より)

この研究会の設立に当たっては、初代会長故長崎初男氏、並びに前歴史資料館長・安武敏夫氏、旧文化財調査委員の方々など多年にわたる悲願であり、現歴史資料館長石井忠氏の熱意と尽力で現実にこぎ着けたことを付記しておきますとのコメントがありました。

#### 歴代の古賀郷土史研究会会長

平成14年(2002)	初代会長就任	長崎 初男	(会員16名)
平成16年(2004)	2代会長就任	渋谷 喬	(会員12名)
平成23年(2011)	3代会長就任	植田 謙一	(会員10名)
平成29年(2017)	4代会長就任	飯島勇一郎	(会員15名)

#### 各年度の事業内容

##### 平成14年(2002)、最初の古賀郷土研究会の開催

- 10月26日、長崎初男会長講話「古賀市谷山の八幡宮は仁部氏の創始」
- 11月16日、第2回漂着物学会講演会参加、道田豊氏「漂着物を運ぶ海流」
- 12月7日、森下靖史氏「庄遺跡発掘調査報告」
- 1月18日、藤野義一会員「古墳彷徨」
- 3月1日、木村辰也氏「地域の風呂、あれこれ」

平成15年(2003)、会員は24名に増え大人数に

4月5日、松木正男会員発表「千人参りについて」

5月2日・6月7日、渋田喬会員発表「作品・史料に見る古賀の原風景」

7月5日、安川義則会員「谷山の盆綱引きについて」

8月10日、橋口達也氏講演に参加「考古学から見た古賀」

10月23日、バスハイク(岩戸山古墳・石人山古墳) 38名が参加

12月6日、三浦明彦氏講演に参加「古賀の戦国時代について」

2月7日、荒金卓也氏講演に参加「糟屋と古代史」

これまで専門家・研究者を招いての講演は8回ほど実施し、会員の発表は延べ8回ありました。外部からの人を招いての講演から少しずつ会員の研究発表を増やしても良いのではないかという考えから、16年度は各グループに分かれ、それぞれのテーマにそって研究し、最後に発表しようと確認しました。

平成16年度(2004)、長崎初男会長の死去により、渋田喬氏が2代会長に就任

5月26・27日、沖の島見学(1泊2日、計2万円必要) 女性は参加できない

6月5日、平野清信氏(清瀧寺住職) 講話

7月6日、渋田喬会長講話「お伊勢参りについて」

8月20日、豊北町探訪「土井ヶ浜弥生パーク、角島自然館」

9月4日、各グループ研究の中間発表

10月2日、藤本義一会員、研究発表

2月5日・3月5日、各グループ研究の最終発表

平成17年度(2005)

4月2日、総会と懇親会(薬王寺温泉 鬼王荘)

7月17日、福津市を歩く（花見浜）諏訪神社）

8月・9月、郷土研究会誌編集委員の人選 編集委員会を計画

11月25日、九州国立博物館見学

2月3日、いのちのたび博物館見学（大恐竜展）

### 平成18年度（2006）

「古賀の歴史と文化」の研究発表の冊子を発行

### 平成20年度（2008）

古賀市内の史跡調査（4月、5月、10月）

7月・8月・2月、各月ガイドブック検討

（本年度完成に向けて）

11月1日史跡見学（長崎街道・木屋瀬宿・飯塚宿）

### 平成21年度（2009）

古賀市内の寺社巡検5回（5月・6月・11月・12月・2月）

古文書（薦野家譜輪読）3回（7月・8月・9月）

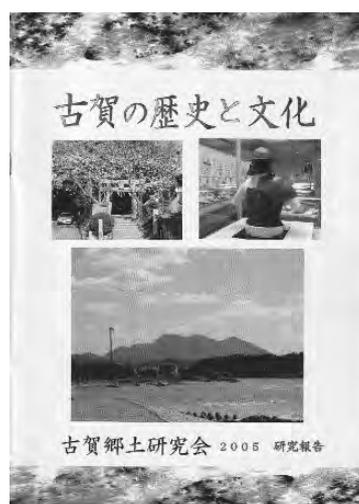
10月3日、史跡見学（中津城・合元寺・中津市街）

### 平成22年度（2010）

糟屋郡内資料館めぐり4回（5月新宮町・6月篠栗町・1月須恵町・2月宇美町）

9月4日、植田会員発表「古文書（伊勢参宮道中記）」

10月14日、史跡巡り（長府・山口方面）



平成23年度(2011) 渋田喬氏に替わり、3代会長に植田謙一氏が就任

古文書を読む6回(6月・7月・8月・9月・12月・2月)

7月、植田会員、「顕彰碑・記念碑探訪」の冊子を制作。

10月1日、宗像方面探訪(みあれ祭・宗像大社)

3月3日、フィールドワーク朝倉(平塚川添遺跡・朝倉橋広庭宮跡)

平成24年度(2012)、第1回公開講座を開催

4月7日、総会

古文書を読む7回(5月・6月・7月・8月・9月・10月・12月)

11月1日、フィールドワーク(糸島方面)

2月2日、フィールドワーク(古賀市内史跡巡り)

2月5日、第1回公開講座「昼どきゼミナール」

平成25年度(2013)

古文書研究(裏粕屋上触卯平文書) 3回(5月・6月・7月)

古文書研究(横大路由来記) 2回(9月・11月)

10月19日、フィールドワーク「遠賀川流域の古墳見学」

12月7日、安武会員発表「筵内村の酒造り」

2月1日、第2回公開講座

平成26年度(2014)

古文書(卯平文書) 4回(4月・5月・6月・8月)

- 7月5日、飯島会員発表「地名、矢落・ハル・バル・大門」
- 9月6日、有吉会員発表「女将さんたちの旅日記」
- 10月4日、フィールドワーク豊前方面（御所谷神籠石・豊前国分寺）

平成27年度（2015）

- 4月4日、総会
- 5月16日、古文書勉強会
- 6月6日、飯島会員発表「薦野氏の真実」
- 7月4日、安武会員発表「古文書の基礎知識」
- 8月1日、館 会員発表「熊野神社の祭神」
- 9月5日、フィールドワーク春日・那珂川方面（奴国の丘）
- 12月5日、有吉会員発表「朝鮮通信使をたどって」
- 2月7日、第3回公開講座

平成28年度（2016）

- 4月2日、第4回公開講座
- 5月7日、総会
- 6月18日、加来会員発表「漢詩（石堂丸）」
- 7月2日、土師会員発表「天降宮鐘銘」
- 8月6日、飯島会員発表「戦国時代における薦野氏・米多比氏」
- 9月3日、々々 「続、戦国時代の薦野氏・米多比氏」
- 10月1日、フィールドワーク熊本県山鹿方面（山鹿鞠智城・玉名装飾古墳館）
- 11月5日、有吉会員発表「朝鮮通信使」

12月3日、植田会員発表「古文書・上触大庄屋卯平文書」  
2月4日、第5回公開講座

平成29年度(2017) 植田謙一氏に替わり、4代会長に飯島勇一郎氏が就任

4月1日、総会  
5月13日、土師会員発表「毛利輝元の書状(大阪冬の陣の陣中からの手紙)」  
6月3日、飯島会員発表「地名由来(ヒンドウ・馬渡、古賀市の名称)」  
7月1日、植田会員発表「古文書勉強会」  
8月5日、加来会員発表「薦野増時と秀吉が岩石城攻めを見学した場所」  
9月2日、飯島会員発表「地名由来(花見・葉王寺・千鳥)」  
10月21日、フィールドワーク宗像・鞍手巡り(小金原合戦跡・六嶽神社)  
11月4日、植田会員発表「古文書勉強会」  
12月2日、有吉会員発表「宗像記追考―小金原合戦」  
2月3日、飯島会員発表「地名由来(席内・筵内・湯釜)」  
3月3日、第6回公開講座  
3月3日、古賀郷土史研究会通信(創刊号)発行

平成30年度(2018)

4月7日、総会  
5月9日、飯島会員発表「二流の米多比氏」  
6月2日、7月7日、植田会員発表「安倍庄屋文書の解説」  
7月20日、古賀郷土史研究会通信(2号)発行  
8月5日、永留会員発表「糟屋の古墳の話・古賀のむかし話」

- 9月1日、土師会員発表「通行手形と須恵眼科医」
- 10月6日、有吉会員発表「福岡浦の廻船問屋」
- 11月3日、フィールドワーク（糸島史跡巡り―平原遺跡・吉武高木遺跡）
- 11月30日、古賀郷土史研究会通信（第3号）発行
- 2月2日、加来会員発表「豊前の宇都宮一族のはなし」
- 3月2日、第7回公開講座（交流館多目的ホール）
- 3月15日、古賀郷土史研究会通信（第4号）発行

平成31年度（2019）「令和元年」

- 5月8日、舘 会員発表「古賀市の神功皇后伝説」
- 6月1日、永留会員発表「右横ずれ断層と左横ずれ断層」
- 7月6日、吉住会員発表「温故、古賀の道駅へ」
- 7月15日、古賀郷土史研究会通信（第5号）発行
- 8月3日、古賀文化財学芸員、甲斐孝司氏の講座「船原古墳について」
- 9月5日、曲 会員発表「古文書とは」、飯島会員発表「韓国三年山城を訪ねて」
- 10月5日、フィールドワーク太宰府方面（太宰府蔵司・岩屋城跡・紹運の墓）
- 11月2日、森 会員発表「古賀市周辺の寺院の分布」
- 11月15日、古賀郷土史研究会通信（第6号）発行
- 12月7日、加来会員発表「栗山大膳の書状」
- 2月1日、有吉会員発表「津屋崎地方の鉄道について」
- 3月7日、第8回公開講座（コロナ禍で中止）
- 3月1日、古賀郷土史研究会通信（第7号）発行

## 令和2年度(2020)

- 4月、総会(コロナの緊急事態で休会)
- 5月・6月、(コロナの緊急事態で休会)
- 7月4日、永留会員発表「立花山城の歴史」
- 7月15日、古賀郷土史研究会通信(第8号)発行
- 8月1日、古賀文化財学芸員、井 英明氏の講座「古賀市の古代官道」
- 9月5日、村山会員発表「村山家先祖のはなし」
- 10月3日、加来会員発表「高橋鑑種の生涯」
- 11月7日、飯島会員発表「宗像才鶴と肥後宗像家」
- 11月15日、古賀郷土史研究会通信(第9号)発行
- 12月5日、今任会員発表「安曇族と志賀海神社」
- 2月6日、有吉会員発表「熊野神社・農耕絵馬の話」
- 3月13日、第8回公開講座(交流館多目的ホール)
- 3月15日、古賀郷土史研究会通信(第10号)発行

## 令和3年度(2021)

- 4月3日、総会
- 5月8日、植田会員発表「福岡藩の通貨Ⅱ 匁銭(もんめせん)」
- 6月5日、コロナ禍のため休会
- 7月3日、永留会員発表「武藤少弐氏について」
- 8月7日、コロナの緊急事態で休会
- 9月4日、コロナの緊急事態で休会
- 10月2日、吉住会員発表「鹿部山周辺の古代と今」、森会員「中世の寺社勢力」

- 11月6日、今任会員発表「加藤司書」  
12月4日、山下会員発表「古野古墳群について」  
2月5日、有吉会員発表「国民保険発祥の地、福岡」  
3月5日、第9回公開講座（交流館多目的ホール）

今は長崎初男氏、石井忠氏、村山武氏、洪田喬氏、松木正男氏など「古賀の歴史と文化」を愛された多くの人たちが鬼籍に入ってしまった。改めて先人の想いを、これからも伝えていきたいと思っています。

### 古賀郷土史研究会の活動の報告

#### 公開講座

平成24年（2012）に初めて公開講座を開催するようになりました。公開講座は会員の2名が郷土の歴史や時代の出来事などを講演するもので大変好評でした。特に会員が発表するということで、専門家でない親しみと身近さを感じとって頂けたようです。第1回公開講座の時は入場者が100名を超す大盛況でした。



- 第1回 「昼どきゼミナール」(平成24年2月5日) 歴史資料館中会議室  
 講師、有吉敏高「伊勢参宮日記」、飯島勇一郎「消えゆく地名・歴史は生きている」、  
 植田謙一「郷土の記念碑・顕彰碑」、松田信一郎「郷土の古地図を読む」
- 第2回 公開講座(平成26年2月2日) 歴史資料館中会議室  
 講師、植田謙一「薬王寺村軸帳の世界」、飯島勇一郎「筵内、薬王寺の地名由来」
- 第3回 公開講座(平成27年2月7日) 歴史資料館中会議室  
 講師、植田謙一「牛方馬方騒動」、詫間正人「村上武吉に届かなかった宗麟書状」
- 第4回 公開講座(平成28年4月2日) 歴史資料館中会議室  
 講師、石瀧豊美「古文書を語り継ぐ」、植田謙一「新原村庄屋文書が山口で発見」
- 第5回 公開講座(平成29年2月4日) 歴史資料館中会議室  
 講師、植田謙一「薦野家譜を読む、小金原の戦い」「江戸時代の三下り半を読む」
- 第6回 公開講座(平成30年3月3日) リーパスプラザ多目的ホール  
 講師、土師 武「黒田三左衛門の手紙」、安武博史「筵内村の村人の苗字」
- 第7回 公開講座(平成31年3月2日) リーパスプラザ多目的ホール  
 講師、永留邦臣「宮地嶽古墳の巨石の故郷」、飯島勇一郎「古賀、天神の地名」
- 第8回 公開講座(令和2年3月7日) コロナ禍のため中止
- 第8回 公開講座(令和3年3月13日) リーパスプラザ多目的ホール  
 講師、吉住長敏「百年老舗・ニビシ醤油」、土師 武「立花山城の名将・戸次道雪」
- 第9回 公開講座(令和4年3月5日) リーパスプラザ多目的ホール  
 講師、村山美婦子「米多比・考」、加来正熙「豊前宇都宮氏の盛衰」

## フィールドワーク（史跡巡り）

フィールドワークは平成16年（2004）から市外の史跡を見学し、歴史と文化を勉強しようということで始まりました。1年に一度の史跡巡りで一番楽しいひと時でした。

平成16年（2004）	8月20日	「土井ヶ浜弥生パーク、角島自然館」
平成17年（2005）	2月3日	「いのちのたび博物館見学（大恐竜展）」
平成20年（2008）	11月1日	「長崎街道、木屋瀬宿、飯塚宿」
平成21年（2009）	10月3日	「中津城、合元寺、中津市街」
平成22年（2010）	10月14日	「長府、山口方面、忌宮、毛利庭園」
平成23年（2011）	10月1日	「宗像方面、みあれ祭見学、宗像大社」
平成24年（2012）	11月1日	「糸島方面」
平成25年（2013）	10月19日	「遠賀川流域の古墳見学（6ヶ所）」
平成26年（2014）	10月4日	「豊前方面、御所ヶ谷神籠石、豊前国分寺」
平成27年（2015）	9月6日	「春日・那珂川方面、奴国の丘」
平成28年（2016）	10月1日	「熊本県山鹿方面、鞠智城、玉名装飾古墳館」
平成29年（2017）	10月21日	「宗像・鞍手方面、小金原合戦跡、六嶽神社」
平成30年（2018）	11月3日	「糸島方面、平原遺跡、吉武高木遺跡」
令和元年（2019）	10月5日	「太宰府方面、岩屋城跡、太宰府蔵司見学」
令和2年（2020）	10月6日	コロナ禍のため中止（名護屋城跡、唐津城予定）
令和3年（2021）	10月6日	コロナ禍のため中止（前年と同じ予定）
令和4年（2022）	10月1日	「名護屋城、菜畑遺跡、旧高取邸」



岩屋城跡（令和元年）



吉武高木遺跡（平成30年）

## 古賀郷土史研究会通信の発行

古賀郷土史研究会通信は年間に3回（3月・7月・11月）出しています。内容は会員の研究・調査を知ってもらうために発行しています。平成30年3月に第1号を出して以来、今年の4月で14号になりました。通信は図書館・古賀駅・交流館など12ヶ所で配布しています。

- 第1号（平成30年3月）「花見の地名・古文書は楽しい・秀吉は何処で岩石城攻めを見たか」
- 第2号（平成30年7月）「考えた事・古文書は楽しい・江戸時代の古賀の人々の日常」
- 第3号（平成30年11月）「天神の地名・米多比の地25町還付・宮地嶽古墳の故郷」
- 第4号（平成31年3月）「今在家の地名・福岡藩の捨て子事情・薦野増時実筆の書状」
- 第5号（令和元年7月）「暦と元号を考える・神功皇后伝説・大海原の中学校史」
- 第6号（令和元年11月）「米多比の地名・古文書は楽しい・福岡藩勤王党加藤司書」
- 第7号（令和2年3月）「青柳の地名・上西郷の弾薬庫・謎の石碑発見（向川橋）」
- 第8号（令和2年7月）「庄の地名・まぼろしの青柳駅・庶民の友パスポート体制」
- 第9号（令和2年11月）「新原の地名・薬王寺二郎・古文書は楽しい」
- 第10号（令和3年3月）「小竹の地名・平野國臣・立花宗茂20年ぶりの奇跡の復帰」
- 第11号（令和3年7月）「小山田の地名・よろい墓と米多比氏の古墓・福津の絵馬」
- 第12号（令和3年11月）「薦野の由来・米多比氏ゆかりの五輪塔・古賀神社の御神体」
- 第13号（令和4年3月）「谷山の地名・糟屋北部千人参り・河津氏と亀山城址」
- 第14号（令和4年7月）「花見松原の花見山・宗勝寺訪問記・昭和28年の河川改修碑」

古賀郷土史研究会通信

古賀の郷土(一)の地名由来

郷土は大田系(山)と東山(山)の間にあり、大田川の谷間あたりに居住地がありました。また、古賀は本姓に由来して「古賀水前(古賀)」と、津田西郷流(津田)と「津田」を冠して「津田古賀」とも呼ばれていました。

一 古賀の地名由来(津田)と「古賀」は水前(古賀)と「津田」を冠して「津田古賀」とも呼ばれていました。

現在に至るまで「古賀」と呼ばれていますが、古賀(古賀)の古賀(古賀)には「古賀」の事をいいます。古賀(古賀)には「古賀」の事をいいます。古賀(古賀)には「古賀」の事をいいます。

「古賀」は「古賀」とも呼ばれていますが、古賀(古賀)の古賀(古賀)には「古賀」の事をいいます。古賀(古賀)には「古賀」の事をいいます。古賀(古賀)には「古賀」の事をいいます。

「古賀」は「古賀」とも呼ばれていますが、古賀(古賀)の古賀(古賀)には「古賀」の事をいいます。古賀(古賀)には「古賀」の事をいいます。古賀(古賀)には「古賀」の事をいいます。

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

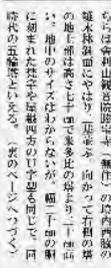
津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔



津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔



津田古賀の五輪塔



津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

津田古賀の五輪塔

## 古賀郷土史研究会の会員による自由な寄稿文集

私たち古賀郷土史研究会では、古賀郷土の歴史・文化の調査研究などを行っています。今年二十周年記念にあたり、節目の年として、何か後世に残るものを残そうとの思いで、日頃の研究や、調査の中で調べた事、感じた事、思った事をなどを、郷土史研究会の会員がそれぞれ自由な発想で、寄稿文として掲載することになりました。天降神社が鎮座していた古野古墳群、青柳宿での竹槍一揆、定礼制度、秀吉の岩石城攻め、清滝仕掛水、少弐氏の話、鹿部山周辺の話など面白い話を記載しています。皆さんに読んでいただければ有難いです。

## 天降神社が鎮座した古野古墳群

### 山下善行

昔、古野山は白ヶ嶽の西麓の丘陵で鬱蒼たる樹林に覆われ、神々しい神域であった。その起源はわからないが、古野山には、初期の天降神社が鎮座していた。由緒には1305（嘉元3）年に火難にあい古野（現在の小野公園付近）から今の社地に遷されたと伝えられる。

古野山には古代より古墳群の存在が知られていた。九州自動車道路の建設時この土を掘削し利用するため、1977（昭和52）年、福岡県教育委員会と筑波大学により緊急に古墳の合同発掘調査が実施されることになった。

その調査により古墳を24基確認。大部分が破壊を受け、遺物も失われたものが多かったが、それでも僅かに残されていた遺物から築造時期は古墳終末期のものと確認された。14号墳からは、手捏ね土製品、輔羽の片、鉄滓が出土。（古賀町誌）



古野古墳全体図



古野古墳全景色

#### 1、調査期間

##### 古野古墳群 I

昭和49年10月9日～

昭和49年12月7日

##### 古野古墳群 II

昭和50年3月14日～

昭和50年3月31日

##### 古野古墳群 III

昭和50年4月2日～

昭和50年6月30日

#### 2、古墳の配列

計3次の調査では、24カ所を対象としたが、尾根筋にある一部を除く大部分は南側斜面に位置している。しかも、中央・東・西の三つのまとまりがあり、このまとまり―支郡内部にもまた数単位があることが明らかとなった。

本群の構成は、

中央支郡

A 単位―第3、4、5、6、7号墳

B 単位―第16、17、18、22号墳

C 単位―第19、20、21号墳

東支郡

D 単位―第 8、9、10 号墳

(筑波大調査)

E 単位―第 12、13、14、15、23 号墳

西支郡

F 単位―第 2 号墳

G 単位―第 11、24 号墳 (筑波大調査)

となる。

これらの大部分は、果樹園造成のため原形が著しく損なわれており、墳丘盛土をとどめていたのは、第 3、4、8、13 号墳等の数例に限られ、石室もまた玄室<sup>せんだう</sup>上半、羨道部は、大破しており玄室の一部が辛うじて遺存する程度に過ぎなかった。以下、調査の結果を報告するが、本群の構成に従い、中央↓東↓西支郡の順でこれを行いたい。

### 調査の経過 (掲載本よりそのまま写記)

古賀工事区関係 (道路公団福岡工事事務所担当) の遺跡調査は昭和 47 年～50 年

度にまたがり、49 年度からは現地に調査事務所を設置し、常時 3～4 名の職員 (技師) を配置して行われた。48 年当時、古賀鳥栖間の開通を目指す公団と施工業者の工程に合わせる形で調査着手順が決定されており、目まぐるしく調査地点を移動せざるを得ない状況であった。

この時期の古賀工区関係についての経緯は九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 IV に詳述しているので、それに拠りたい。49 年度以降では、古賀く筑豊西

I.C 間に所在する遺跡の調査を行ったが、小 I.C の新設に伴い川原庵山 5 号墳の調査の必要が唐突に生じ、また、新たに古賀町薦野地区に採土場を設けたいとする公団側の意向が示され、昭和 49 年秋にはいったん現地調査を了え報告書の刊行準備を進めたいとする当課のスケジュールと大きく齟齬することとなった。49 年度には、東接する鞍手郡若宮町、宮田町においても、筑豊東く西 I.C 間 (直方工事事務所担当) の調査が着手され、同区間での地点の追加が相次ぎ、調査体制の増強が

ない限り調査期間の大巾延長が既に必死の情勢であった。これに加えて、既調査遺跡についての図面・出土遺物の整理が未着手状態に近く、報告書の刊行が遅延を重ねており、現場・室内両作業共に難問が累積し、しかもこうした異常が日常化した状態から脱出するために年間調査日数を 150 日に抑えようと文化担当職員で申し合わせたばかりであり、対策に苦慮する日々が続いた。

古賀工事関係で特に問題になったのは、土取場に所在する 24 基から成る古野古墳群についてであった。当初遺構の分布は希薄と見られたが、念のためのトレンチ調査を行ったところ円墳の所在 (第 3 号墳) が知られ、その後の分布調査で 20 基を超えることが確実となった。加えて、用買交渉も進んでおり、他にこれを求めると同様に文化財が所在することが予想され、調査せざるを得ない状態であったが、上述の我々内部の問題と同時に直方工事事務所からの増援要望もあり公団側

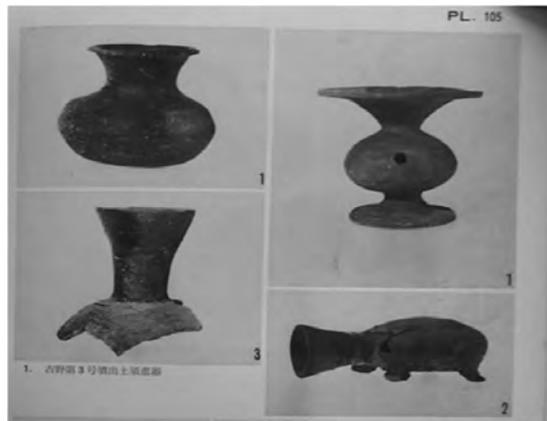
に工程の見直しを再三にわたって要望した。協議を重ねた結果、古野古墳群については、年内に最高所にある1〜6号墳を調査することによって50年3月分までの採土量を確保し、50年3月に筑波大学調査団（团长増田精一教授）が5基を、4月以降に残りを調査するという、まさに切り売りの処置をとることとなった。

かくして、昭和50年6月30日をもって古賀発掘調査事務所を閉鎖・撤収し、同工事関係の調査は完了した。引き続き7月3日には、鞍手郡鞍手町に事務所を新設し、・・・以上、古野山の部分を抜き書きした。尚この冊子書類は文化課の井氏の厚意により拝見させていただいた資料です。

工事終了後古野山は、土砂の置き場にも使用されたが、山の姿は完全になくなり現在は小野公園として整備され、市民のスポーツ公園として利用されている。



(円墳) 第3号墳腰石据付状態



三号墳出土須恵器



薦野の天降神社

薦野地区にある天降神社の由来は嘉元3年（1305）に火難ありて古野より今の社地へ移したと伝えてあります。おそらく古野古墳群の一角に鎮座していたと考えられます。古野12号墳から鉄滓やふいご羽口が出土しているので、製鉄の跡と考えられています。

## 筑前竹槍一揆と古賀での事件

森 泰一

### 筑前竹槍一揆の概要

明治時代のはじめ、新政府は、欧米にならって、社会体制の急激な変革（廃藩置県・地租改正・徴兵令・被差別民の解放令・太陽暦採用など）を、矢継ぎ早に打ち出しました。しかし民衆は、この有無を言わせぬ急激な近代化に対応できず、民衆の間には、新政府の近代化政策に対する強烈な不安と不満が充満していました。そんな最中の明治六年（1873）に、筑前は大旱魃に見舞われ、各地で農民による雨乞いの行事が行われました。（この年は、古賀の千鳥が池でも池干しの雨乞いが行われました。）

そんな中で、富商と呼ばれる富裕層には、旱魃に乗じて米相場で儲けるために、のろしや旗振りで、山頂伝いに米相場の伝達を行う「目取り」という行為を行う者がおり、旱魃と米の高騰に苦しむ農民達の反感を買っていました。この目取りへの抗議がきっかけで、嘉麻郡猪膝村（田川市南部）の富商（米相場師の元締め）と旱魃に苦しむ近隣農民達との間に生じた争議が発端となり、6月16日に嘉麻郡で一揆（猪膝の打ちこわし）が発生しました。

この一揆は、瞬く間に筑前一円に広がり、参加者10万人（当時の福岡県の人口約44万人）ともいわれ、福岡県庁焼き討ちにまで発展し、十日間余りにも及ぶ大一揆になりました。参加し

た農民が手にした主要な武器が、竹槍や鎌であったため、筑前竹槍一揆と呼ばれるようになりました。猪膝村で発生した一揆は、多くの村々を巻き込んで、参加人数を増やしながら広がりました。一揆の進路は、大きく四つのグループに分けることができ、そのうちの三つは、以下のように、東、南、西の三方から、福岡城内にあった福岡県庁を目指して進みました。各グループ間に連携は無かったようです。

#### ①（東からの一揆勢）…

猪膝↓飯塚（一部は宮田、犬鳴）↓長者原↓吉塚↓福岡

←赤間↓畦町↓青柳↓箱崎

#### ②（南からの一揆勢）…上座郡、下座郡、夜須郡、御笠郡から

北上

#### ③（西からの一揆勢）…早良郡、志摩郡、怡土郡から東進

#### ④（早良郡内の一揆勢）…早良郡内で活動

①の糟屋郡からの一揆勢が、福岡城に到達し、福岡県庁の破壊を行いました（6月21日）。この一揆勢の一部が通過した古賀の青柳では、大蔵省関係者の遭難、県庁から東京への使者の自害という二つの大事件が発生しました。一揆は、6月23日には、平静に向かい、政府の鎮圧軍が到着した25日には、各一揆勢は、散り散りになって帰郷し、一揆は収束しました。

## 竹槍一揆の背景

偶発的な争議から、自然発生的に始まったこの一揆には、統一的な要求書や嘆願書は見つかっていません。しかし、一揆への不参加の説得に当たった士族や一揆の目撃者の記録などから、旧藩復活、徴兵令廃止、部落解放令廃止、旧暦復活など、新政府の急速な近代化政策の廃止と旧体制への復帰の要求が、多く掲げられていたことが分かっています。

また、旧庄屋・大庄屋など新政府の村役人層の家や富商の家の打ちこわしだけではなく、この一揆に特有な事象として、被

差別部落の2000戸以

上の家屋の焼き討ちが発生しています。これは、新政府の部落解放令を受けて、被差別部落民が、平民としての権利を主張し始めたことへの反発として発生したもので、社会の基盤として長く続いてきた、身分制度の変革への強い不満が爆発したものであると思われま

す。このことから、民衆の新政府の政策への強烈



現在の青柳宿跡

(託乗寺前から、下ノ町茶屋跡地の方向を望む)

な不満が、この大一揆の背景にあったことがわかります。

一揆への参加者が、当時の県人口約44万人の四分の一近くの10万人にまで膨れ上がった要因の一つに、江戸時代からの村共同体の存在があると考えられます。自村への焼き討ち等の被害を防ぐために、村単位で一揆参加を決め、個人の意思とは関係なく、村ぐるみで一揆に参加した事例も多かったと思われる。

## 筑前竹槍一揆に巻き込まれた、青柳村の事件

### (1) 大蔵省の官吏3人の遭難

福岡へ向かっていた大蔵省検査権助中村義心らの一行3人は、6月20日に青柳に到着しました。青柳宿の主連中から、新政府関係者は一揆の標的になり、命の危険があると知らされました。青柳宿に留まることは、一行にとっても宿にとっても危険であるとのことでしたので、一行は、箱崎への本道を行かず、間道を通って奈多浦へ抜けて、船で博多へ行くことにしました。

しかし、一行は、奈多浦で、船頭を見つけられず、紹介された木賃宿に泊まろうとしていたときに、新政府の官吏らしい者たちが奈多浦にいると聞きつけて、一揆勢が迫ってきました。そこで、一行は、夜道を再び青柳まで逃げ帰り、やっとのことで託乗寺にたどり着きました。住職は一行をねんごろに迎えました。一行を匿うと寺が焼かれると門徒が反対しましたので、一行は、死をも覚悟して本道に行くことにしました。

一行は、21日未明に、本道を博多に向けて出発しましたが、三代で捕らえられ、多々良川方面まで連行された後に、殺害されてしまいました。

## (2) 県職員堀川敏夫の自決

県職員堀川敏夫は、県庁焼き討ち後の仮県庁設置の顛末報告書を持って、東京へと向かっており、6月23日の未明に、青柳宿の下ノ町茶屋を訪れました。ここで、青柳宿の有力者たちとの言葉の行き違いから、堀川は怒って、畦町に向けて出発しました。しかし、途中の川原村で一揆勢に遭遇して争いになり、青柳宿にとつて返し、一揆の中を長泉寺の門前まで逃げ延び、寺に逃げ込もうとしました。しかし、入ることができず、一揆勢に取り囲まれてしまい、もはやこれまですと観念して自決をしました。堀川の遺品からは、辞世の和歌が見つかり、死を覚悟しての上京の途中でした。この時、堀川はまだ24歳の若さでした。

(古賀町誌より)



現在の旧唐津街道の風景

(長泉寺付近から、小竹方面を望む)

## 一揆の処罰

一揆による被災状況は、毀損または焼失した家屋が4590軒、死傷者70人で、電信柱などの公共施設が大きな被害を受けました。一揆の収束後、参加者約10万人のうち、約6万4千人が処罰を受けました。斬罪3

人、絞罪1人、懲役刑92人で、それ以外は、杖(杖で打つ)・鞭(鞭で打つ)や罰金などの刑を受けました。前述のように、村単位で一揆に参加した場合も多いので、罰金刑の費用も個人ではなく、村全体で負担した場合も多く、久保村や古賀村でも、そのような処理が行われていたようです。

## 参考資料

- 石瀧豊美著「筑前竹槍一揆研究ノート」(2012年発行)
- 古賀町誌(1985年発行)
- 志免町ホームページの筑前竹槍一揆の記事
- 筑紫野市ホームページの筑前竹槍一揆の記事



筑前竹槍一揆の想像図 (インターネットより)

働き世代の温故知新探究・通年講座（誌上企画提案）

『郷土史研究会 20周年企画、土曜の朝か夜講座の開設』

吉住長敏

20周年記念誌寄稿文は題材自由ということでこの際、思い切った提案型の内容にさせていただきました。この会が更に前向きに発展することを願う気持ちからです。

私からの誌上提案は「2023年度 古賀郷土史会 働き世代の温故知新探究・通年講座」企画です。2012年の公開講座がご縁で入会しました。来年度もこれまで同様の会の運営継続（毎月第1土曜日）に加えて、ぜひ挑戦したいのです。その心は、働き世代に対して大いに郷土愛を醸成する機会の一助にでもなれば、の思いです。私自身が、かねて長崎初男氏らが講師となった夜の歴史講座に参加したことが今の郷土史興味につながっているからです。いわば先人からの「恩送り事業」として本会の主催で楽しい内容を準備、実現できないものかと考えました。以下、開催企画の留意点、勝手な暫定メニューです。なにとぞ皆様のご意見等をお待ちしております。

- 年間講座メニューを予め一斉に紹介することで参加動機につなぎたい。
- 郷土史を知りたい働き世代に配慮した開催時刻を土曜日の夜、もしくは午前中を設定する。
- その都度一人一回参加費300円で運営。本会の会計処理と別会計とする。
- 希望者は配布資料準備の都合で開催日3日前迄に要予約。
- 資料のみは原則200円以内（分量、カラー等で変動あり）。
- 講義会場はリーパスプラザこが交流館内、予約不可の場合は別会場。
- 18時開場。18時30分開会、20時閉会（話し70分…他（ゲスト…サプライズ）20分）

（私案）2023年度 古賀市温故知新探究通年講座 [略：温故知新講座]  
第3土曜夜 18時30分～20時終了（午前中も視野に）

開催期日		講義テーマ（仮）	
2023年4月	29日	古賀グリーンパーク森づくりに託した夢	
	5	27	鹿部田渕遺跡、「糟屋の屯倉」 確実か？
	6	24	最大水がめ古賀ダム建設と現代の水事情
	7	29	防災知識の勘所、古賀市の地質と地形の深層
	8	26	黒田藩犬鳴製錬所の砂鉄運搬秘話考察
	9	23	意外と知られていない三社を統合した古賀神社の成り立ち
	10	28	宗像郡社だった青柳五所八幡宮の秘宝
	11	25	新たな発見、席内村概覧板書にみる大正期の郷土
	12	23	櫛田神社も雨乞いした千鳥が池の諸伝説
2024年1月	21	古代から今に至る古賀市の白砂青松の年輪と魅力	
	2	18	地域医療の拠点、福岡東医療センターの沿革
	3	18	古賀市のお宝・国史跡船原古墳の最前線

- 講師はその道の精通講師に予め相談する。公表時期までに未定な場合、交渉中で記載。
- 2023年1月中に開催内容を固めて2月以降、一般周知募集を開始する。
- この件の会場確保、事務処理等は提案・協力者の責任で対応する。

## 定札制度について

有吉敏高

今日、日本は医学の発展や医療保険の普及により、世界一の長寿国になりました。

その医療保険のうち国民健康保険制度は、江戸時代の終わり頃から福岡（福津市）で始まったとされる定札（常札）を手本として誕生したと云われています。

2016年の統計によると、平均寿命は、男性は81歳、女性は87歳だそうです。

また、健康寿命は、男性72歳、女性は75歳だそうです。いずれにしても女性が長生きしそうです。

### 医者にかかれぬ農村の人々

1930年（昭和5年）ごろに世界中を襲った不景気は、日本にも都会では会社や銀行が倒産し失業者が増えていきました。

農村では米や他の農作物の値段が下がったうえ、凶作にも見舞われたため収入が減り、借金に苦しむ農家がほとんどでした。病気になることも医者にかかれず、都市と比べても平均寿命も短く、多くの病気がはびこっていました。特に結核は栄養不足の農民の間にも非常な勢いで広がり、不治の病と言われていました。

### 農村にも医療保険をと内務省社会局が検討をはじめ

医者に診てもらおう費用をみんなで出し合う互助制度は宗像地方などで江戸時代に生まれた「定札」制度がありました。この時代、医師免許はなく、医師を志す者は儒学を修め医者に弟子入りして漢方修行に励んだそうです。「医は仁術」と孔子の思想の「患者のお礼が少なくても不平を言うべきではない。ある程度の犠牲は甘受せよ」との教えは広くいきわたっていました。

1935年（昭和10年）内務省社会局から診療所を持つ宗像郡神興村手光に調査に来て、調査官は神興村手光の区長や診療所（神興共立医院）の安永柱定札医から詳しい話を聞き、ここでは医療互助組合の事を定札（常札）と言っており、村のほとんどの家が加入し、各家から玄米を集め、それを診療所の医者差し出せば、一年間は無料で治療を受けることが出来るという仕組みでした。

平均は、1世帯1俵半（約90kg）で、豊かな人は最高4〜5俵（約240〜250kg）、貧しい人は最低5〜6升（約7.5〜9kg）で村人は不満もいわずよく助け合っていました。

内務省は農村にも医療保険



福津市にある定札公園

を定着させるべきモデルケースとして全国に12ヶ所に医療互助組合を作り、1938年（昭和13年）7月、世界で初めてといわれる国民医療保険制度がスタートしました。その後、国民健康保険事業は、1948年（昭和23年）の法律改正により、組合から市町村運営となりました。

### 牛馬にも定礼があった

現代の農業は機械化されていますが、江戸時代、明治時代、昭和の中頃までは、牛馬が重要な役割を果たしていました。

牛馬が病気をした時、獣医と牛馬の持ち主が助け合う「定礼」がうまれました。1903年（明治36年）、宗像郡獣医師会が作った「牛馬定礼法」には、牛1頭につき玄米5升（約7.5kg）、馬1頭につき玄米6升（約9kg）を出すよう書かれています。

### 古賀にも定礼医はいました

舍利蔵村では江戸後期の天保年間（1830～1844年）に始まり、定礼では古いといわれています。当時舍利蔵村は無医村だったので、村



▲牛が運ぶ定礼米  
牛たちは背中の重荷のためあえぎ、ヨダレをたらし隊列もみだれました。  
そのためムチで打たれ「モーモー」と、悲鳴をあげながら坂道を登りました。

舍利蔵村から薦野村に定礼を運ぶ

「やさしい福岡町の歴史」より

から一番近い糟屋郡薦野村（古賀市）の医者而定礼医としていました。村から薦野村に行くには大変な悪路で、2俵の定礼米を背負った牛が郡境の険しい坂道を何度も往復して米を医者に届けたそうです。

薦野村には定礼医の記録はないようですが、1890年（明治23年）頃に小野村薦野で開業医をしていた井上医院の井上圓蔵がいました。おそらく舍利蔵村の人たちが定礼医としていたと考えられます。その後宗像郡南郷村曲（現宗像市）の天野市治が井上家の養子となり医院を継承しています。井上市治は村民の福祉・健康増進のため生涯を捧げています。



薦野にある井上市治の墓

## 薦野増時と秀吉公

加来正熙

秀吉軍勢が岩石城を総攻撃したのは天正15年4月1日のこと。その様子を郷土の戦国武将薦野増時も秀吉公の傍で見物したという。

ところで、いったいどの地点から見たのか、これについては諸説ある。見物した地点は一点のはずなのに、筆者の知る範囲だけでも4つの文献にそれぞれ違った地名で記載されている。

ここら辺を整理して、当然、それらの中でもっとも妥当性のある地点はどこか、さらにまた、こうしたことば（地名）の混乱が生じさせた要因は何か、など、筆者なりの一つの推論を立てて論考してみたい。



油須原地区から見た岩石山

## ① 河村哲夫「戸城山」説

「岩石城は岩石山（標高446<sup>㍎</sup>）の頂上に築かれた城で、岩石という名の通り全山花崗岩でできた峻厳な山である。岩石城には秋月の重臣隈江越中、芥田六兵衛以下三千人の兵が立て籠もっていた。

秀吉は先陣を争う武将たちの中から先陣として蒲生氏郷（1556〜1595）二陣として前田利長（1562〜1614）以下三千人を抜擢し、午前四時から総攻撃を開始した。北陸勢五千人の猛攻の前に、豊前一とも言われた岩石城がその日の夕刻にはあっけなく落城した。

秀吉は北方<sup>4.5</sup>の戸城山（田川郡赤村内田標高317<sup>㍎</sup>）から戦いの様子を眺めていたが十日ほどかかると思われた岩石城がわずか一日で攻略できたので、宗茂の代理として派遣された薦野三河（薦野増時）に「そちは九州ではたびたび城攻めをしておろうが、蒲生の家中の者どものめざましい働きを見たであろう。関東の武士はこのような者たちばかりだ」と、大いに自慢した」

（日本人物誌13 河村哲夫著『立花宗茂』88ページ）

つまり、この著者は、見物地点を戸城山から見物したとしている。ただ、この地点から岩石城までの距離が4.5<sup>キ</sup>というの  
が、見物地点としては、ちよつと遠すぎる気もするが、方角や  
地理的条件を考えても充分に説得力があり、一応妥当な説かと思  
われる。

## ② 薦野家譜「杉原」説

『薦野家譜』は、わが郷土古賀の歴史を、とりわけ戦国武将  
「薦野増時」についても詳しく記された貴重な古文書である。  
もちろん、岩石城総攻撃見物の場面では、つぎのごとき一文が  
ある。

「此時、秀吉公の御本陣ははるかに引き退りて

**杉原**と云ふ野山に備へて城攻めを見物し給ふ」

(巻四、天正15年4月1日の項)



この杉原説はかなり怪しい。見物したのは「杉原」という地  
点だというのが、結論から言つて、その地点は今のいつたい  
どこなのか、現在のところ不明としか言いようがない。ちなみ  
に、この部分は直接に『薦野家譜』の古写本を読んで、それに  
拠つた。古写本では、「杉」という一字は、「杉」の異体字「杓」  
なる漢字で表記されている。だから、「杉原」と読むしかない。  
しかし、これには私は、単純に崩し字筆写上の誤謬があるの  
ではないかという疑念を抱いている。ただ、その点の論考は後  
回し、まずは4つの説すべての候補地の提示を先に行い、終わ  
つた段階で、総合的な見地から検討を加えたい。

## ③ 竹本弘文「伊田原」説

「天正一五年三月、小倉城に入った秀吉は馬岳に一泊し、四月朔  
日**伊田原**の陣から、岩石城攻めを見物した。」 (竹本弘文記)

郷土出版社2006年発行 図説『田川・京築の歴史』 80ページ

「伊田原」という名、その名称の出典が何なのかは承知してな  
いが、仮に、それを現在の田川郡「伊田」地区だと解釈すると、  
一見その地名からしてふさわしく見えるが、ここから岩石城ま

での距離は、①の「戸城山」説よりさらに遠い地点ということになる。城攻めの見物地点として、はたしてどうだろうか。

#### ④ 吉永正春「柞原山」説

ゆすばる

「…この時、蒲生氏郷の家臣関小伴は一番乗りの功名を立てた。秀吉は柞原山（現田川郡赤村油須原）よりこれを眺めていた」（吉永正春）

（葦書房1776年発行）『筑前戦国史』331ページ

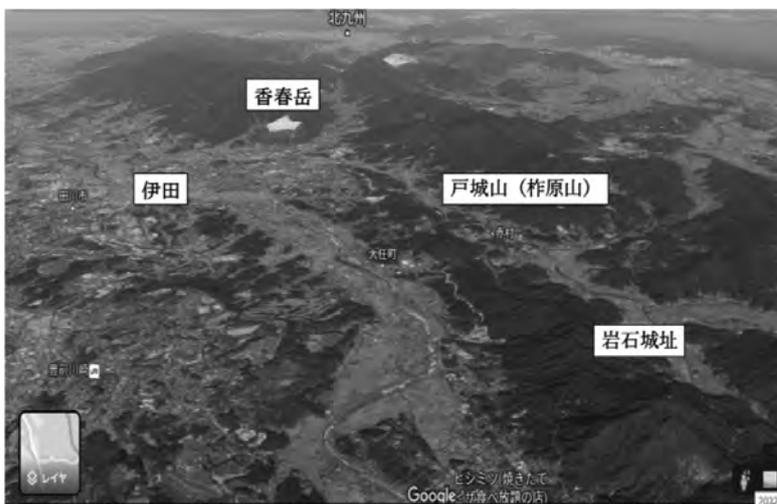
「柞原」集落は、現在「油須原」という字を当て、「戸城山」の麓にある。つまり「柞原山」とは現在の「戸城山」のことであろう。ということは、④の「柞原（油須原）山」説は、①の「戸城山」説と、じつは同じ内容であったのだ。

以上、四つの説を比較検討して、その秀吉や薦野増時らの岩石城総攻撃見物地点として一応の結論を出すのであれば、やはり、地理的にも距離的にも、①④の「戸城山」（別名柞原山）説が有力な候補地、理に適っていると見るべきではなからうか。

こうした考察を重ねる中で、まことに、とりとめもない疑問ではあるが、ふっと別の素朴な疑問が心に浮かんだ。蛇足ながら、

それをあえて紹介し、ともに考察する材料にさせていただきたい。それは、今回のように、見物地点は一地点のはずなのにその候補地は4カ所もある、そもそも、こうした混乱は、どうして生じたのだろうか、という疑問…。併せて、それに対する自分なりの推論もあえて提言してみよう。…答えは存外単純なもの…。もしかして、古文書写本の際の、読み損じ、書き損じの可能性は考えられないであろうか。

「薦野家譜」の中の「杉原」説は、不明として一応候補地からはずしたが、思うに、「柞原」の「柞」の字は、「杉」の異体字「杫」の字と類似している。だから、本来「柞原」と書くべきところを、この土地に不案内の者が書写の段階で間違っ、ついうっかり



「杉」と書いてしまった。その「枚」の字は、さらにまた「板」の字ともよく似ている。その「板」の字は、のちに同音の「伊田」の字に置き換わって、つまり、それが「杉原」、「伊田原」などの地名に定着してしまった、と……。

## コラム

### 「岩石山と岩石城」

岩石山は添田町の中心から東にそびえる高標446mの花崗岩からなっている山です。

岩石城築城以前は英彦山修験道の秋峰入りの山でした。岩石城は平清盛が大宰大弐であった頃に大庭景親に築かせたと伝わる城で、築城以来、菊池氏、大友氏、大内氏、秋月氏と帰属の変遷を繰り返しながら存続した城です。

天正元年（1573）に秋月家臣の熊井久重が守っていて、九州一の名城と云われていました。天正15年（1587）に豊臣秀吉は島津氏・九州平定軍を九州に上陸させ、島津と結んだ秋月氏の支城であった岩石城を最初の攻撃とした。4月1日午前4時に開始された攻防は前田利長、蒲生氏郷の率いる秀吉軍は午後4時には落城させています。

その後は小倉城の付城として存続していたが、元和元年（1615）に「一国一城令」で廃城になりました。



岩石城の本丸跡

## 古代西海道さいかいどうの駅家うまや「席打駅」は古賀市の何処？

大須賀理恵子

標題するテーマについては、今迄の勉強会や資料等で漠然とは理解していた。

先月、粕屋町歴史資料館主催、歴史講座で、「北部九州に復元される『古代の道』」を傾聴し、古代官道への興味が俄に湧き、駅家うまや「席打駅」がとても気になってきた。図書館で数冊の本を借り、ネットでも詳しく調べる事ができる。その場所は、未だに不確かではあるが現在の大字青柳の字踊りケ浦、字八反田、字才崎周辺とある。八反田からは古瓦が出土し、踊りケ浦には廃寺もある事から、この近辺とみる意見が主流である事を知った。

席打駅には15頭の「駅馬えきば」がいたとも記されている。早速、

おとうやま

現地に向かい、その地に立った。目の前に尾東山が有り、その下に青柳川が静かに流れている。4月下旬であったが、肌心地良い風が吹いていた。青柳川のすぐ傍に架かる橋の名は「馬渡橋ひんど」。古代の旅人や、手紙や物資を運ぶ使者が、馬に乗ってこの橋を渡る姿が想像できる「駅家うまや」で旅人が一休息し、馬は元気な馬にバトンされ、次の「駅家」へと向かう。踊りケ浦という地名から、旅人は宴も催されていたのではないかと想像される。

「席打駅」がある西海道さいかいどうは、中央の都（奈良・京都）から、西の都大宰府間の移動に利用されていた主要官道の一つである。

大宰府の長官として、奈良から赴任してきた大伴旅人（665年〜731年）や天才とも呼ばれる「右大臣 吉備真備（695年〜775年）」もここを往来したのだろうか？

大宰府へ左遷された菅原道真（845年〜903年）も通ったのだろうか。尾東山はその頃の「席打駅」を見守ってきたのだろうか、その世界にすっぽり入り込み、想像は尽きない。そして現在の「馬渡橋」は、篠林流通センター近くに在り、大中小のトラックがひっきり無しに行き交い、1300年前の古代の世界から現実に取り戻される。今も昔も流通の要だったのかと思われる。

古代の「駅伝制」は、国家権力の解体とともに10世紀終わりには衰退していき、宿を中心とする街道が発展していった。

現在古賀市でも毎年開催される「市民駅伝」。古代官道の「駅伝制」を勉強する中で、定められた道から道へタスキを渡し、長距離を完走する駅伝のルーツは1300年前の「駅伝制」からきた事を知った。「駅伝」という言葉自体は「日本書紀」にも記載されているほど、古いものである事も初めて知った。

古賀市には7世紀前半の前方後円墳、船原古墳埋納坑からは立派な馬具一式が発掘されている。

まだまだこれから歴史への探求を私なりに楽しんでいきたいと思っ



引用画像：北部九州に復元される古代の道表紙

## 古賀郷土史研究会に入会して

### 曲たつ恵

私は数年前に、市報に「古文書の勉強をしませんか？」と載っているのを見て興味がわき、その年に開催された第5回公開講座に参加しました。

講座の中で、「江戸時代の三下り半（離縁状）を読む」という古文書の解説と説明がありました。勿論、私はひと文字も古文書は読めません。ですが、流れるような文字が解読され意味が分かると、その時代の背景が想像できてとても面白く思いました。

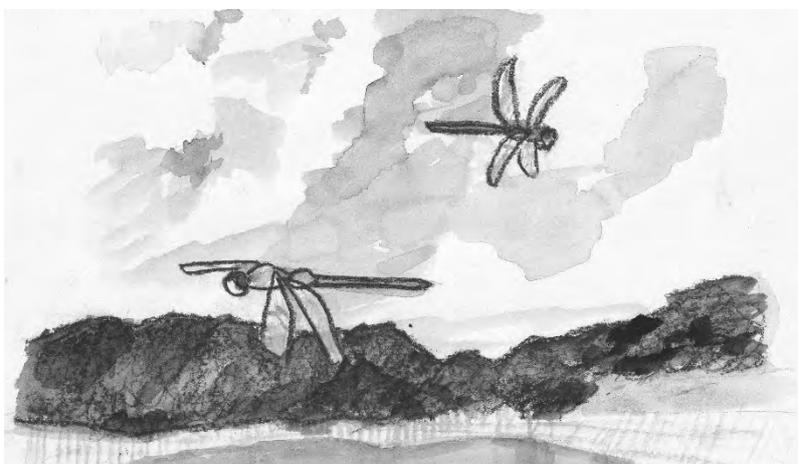
入会してからは、古文書以外にも地名の由来や古墳の発掘調査の工程、江戸時代の貨幣経済の発展、鹿部山周辺の古代と今、立花闇千代など古賀市や近隣市町村の郷土史を諸先輩方にご教授いただきながら、勉強する楽しみが増え、また第二の故郷である古賀市に郷土愛が深まりました。古文書の解説には、今以て悪戦苦闘していますが、入会当初に比べると少しずつ成長していると思っています。

私はこの数年の諸先輩方の例会発表から、郷土史を学ぶ事は、古代史や歴史の史料を復元し、その他の関係史料と比較、体系化することで、真実に近づける。あるいは仮説または推定を立て、歩いて現場を確認する事が重要だと学びました。

理系60代のおばあちゃんですが、何歳からでも学べます。この20周年記念誌をきっかけに、古賀郷土史研究会に入会したいと思われたら幸いに存じます。

最後に歴史は繰り返すとよく言われます。歴史を知ること未来を知ることにつながるということです。幾度も疫病に襲われても人々は克服してきました。戦争も繰り返しました。戦争も繰り返して起きていますが、侵略された国もする国も民間人が一番の被害者です。

新型コロナの収束と現在起きている戦争が早く終戦する事を願います。



薬王寺水辺公園

## 清滝仕掛水（清滝水路・清滝溝）について

有吉敏高

極仕法書上帳（きめしほうかきあげちよう）に、清滝水路の事について「明和9年（1772）辰ノ5月下西郷村新堤水仕掛ケ蔣野村方溝筋、蔣野・舍利蔵・内殿・筵内・上西郷、五ヶ村永末申談之」と書かれている。

旧福岡町では北から今川、三四郎川、西郷川、刈目川から玄界灘に流れている。下西郷村（福岡駅付近）は、西郷川の下流にあり、水不足で早魃の被害を受けていた。この様な状況で、表・裏糟屋と宗像の郡奉行であった富永甚右衛門指導の元、下西郷村庄屋井原権六は、糟屋郡薦野村庄屋清五郎に願い出て水を分けて貰った。

清滝水路は、清滝↓大行寺（事）原↓旦ノ原（二郡四村井戸一つ）↓久山丘陵↓黒墨台地東西に延びる尾根伝いに水路5kmを掘ったものである。明和9年（1772）から90年後、上西郷村庄屋篠崎光恭（半八）が、藩に願い出て下西郷に迷惑をかける約束で、清滝水路を使わせてもらうことになり、文久年（1862）12月に大森下池を完成させた。

宝暦年間より明和年間（1751～1772）及び天明年間（1781～1789）の間、天候不順が続く（特に日照り続

きが多かった）天候不順や文化・文政の町人文化が始まる前の時代で貨幣経済が生活末端まで行き渡り、どの藩も出費に苦しめられていたが、福岡藩は朝鮮通信使の招待、長崎警固の費用などの増加で藩財政を一段と苦しんでいたのが年貢増収のため、この難工事をも取り組まざるを得なかった。

① 井原権六（享保13年（1728）～天明2年（1782））  
下西郷村は、西郷川の下流にあり、日照りが続くと水不足になり、稲が育たず農民は大変困っていたが、庄屋井原権六もその苦しみを良くわかっていた。

明和9年（1772）に水不足が起き、上西郷村に溜池（柳井池）を作り、水を分けてもらった。米の収穫量は清滝水路で取水開始（1772）前後の明和5年（1768）965石で、寛政元年（1789）は1.6倍の1549石になった。

② 郡奉行富永甚右衛門、



柳井池

表・裏糟屋・宗像の三郡の奉行（在任明和5年～天明5年17年間）による清滝水路等の農民の労役提供や年貢の取り立ては非常に厳しいものであった。箱崎村の大庄屋仙蔵は、高免（年貢賦課率が高い）の村が多いと異議を申し出た事で、郡の牢舎入りを命ぜられた。その後庄屋を辞め出家遁世している。

本木村大庄屋、中村伝五郎「年代記録」にも甚右衛門は怨嗟（えんさ）の的であった。その反面、宗像郡では色定法師の「一人一筆一切経」の編集や保管などに尽力し、文化面でも功績を残している。

③ 篠崎光恭（半八）〔寛政12年（1800）～明治20年（1887）〕

篠崎光恭は嘉永2年（1849）に上西郷の庄屋になった。雨の少ない年は作物の出来が悪く農民は困っていたので、光恭は藩に願い出て上西郷村に溜池（大森下池）を造り、水を引いたが、下西郷村に迷惑をかけない約束で、同じ水路を使わしてもらえることになった。

安政6年（1859）に工事に取りかかり文久2年（1862）に完成した。工事には4万2288人の農民達と多くの費用がかかった。彼は村人から慕われ、明治20年（1887）に88歳で亡くなった。

### 雨乞い余話（千鳥池の雨乞いの記録）

昔から人々は旱魃による水に対する想いは強く、当時の人々は溜池を築き、雨乞い神事を行ってきました。特に雨乞いのため「堀流し」を行った記録があります。

天明5年、「三郡（両糟屋・宗像）にて千鳥ヶ池を掘り流し、夫三千人、役人中出勤いたす。所々に踊り興業、相撲など心にあぶ雨乞い致し候ところ、ようやく六月二十四日、にわか雨これあり、少し潤う」と記録されています。（福岡県史）

嘉永5年、大旱魃で裏糟屋郡中から出夫し「宗像ヨリモ千五百人」が出て、千鳥ヶ池を「堀出し」ています。「堀出し」は土手を崩して水の神・龍神を怒らせ、雨を降らせようとするものです。その効果があつたのか、7月と8月に暴風雨があり、かえって災害にあつたと記録されています。（福岡町史）

嘉永6年、この年も大旱魃で千鳥ヶ池で祈願が行われ、修験者らが法華経の祈祷中、福岡の山伏が溺死したと記録されています。（福岡町史）

昭和53年、昭和14年に次ぐ水不足で、櫛田神社から神職を招いて虎の頭骨を使って雨乞いをした。その効果か、大粒の雨が落ちてきたと記録があります。（広報こが）

（虎の力を借りて雨を降らそうと考えたのでしょうか）

## 古賀市、福津市の少弐氏エピソード

### 永留邦臣

渡辺文吉氏は「武藤少弐興亡史」の序文で「少弐氏一族こそ、中世における三前（筑前、豊前、肥前）二島（壱岐、対馬）の主人公であり、探題、菊池氏、大内氏、大友氏等は客人である。膝下には向背ままならぬ国人衆（秋月氏、原田氏、宗像氏、龍造寺氏等）を沢山抱えている。それらといかに対応していったか。四百年近い歴史の重みはあまりに厚く、そして忘却のベールに包まれている」と述べている。

確かに少弐氏の活躍は文献（例えば少弐家譜）としても、旧蹟（例えば菩提寺、神社）としてもほとんど残っていない。

僅かに残る古賀市、福津市の二つのエピソードを紹介する。

### 古賀氏の祖と少弐氏（古賀市関連）

元寇の役で現地司令官として、蒙古軍と直接闘った「少弐景資」は当時、那珂川町の「岩門城」に在城した。景資は元寇の役の恩賞などをめぐる「霜月騒動」に関連した「岩門合戦」で兄の経資と闘い敗死している。その「景資」の子孫が「古賀氏」の祖であるとされる「土師武」先輩（古賀郷土史研究会顧問）の論考を紹介する。

土師先輩の知人の「古賀氏家系図」によると「少弐景治・古賀太郎兵衛尉、暦応元戊寅年（1338）正月、筑前古賀浦の

地頭職補せらる。是は去る元弘三年（1333）五月、鎮西探題・北条英時誅伐の功に依るなり。爰に於いて同地に居住、初めて古賀氏を名乗る。法名道甫」と記載されている。「少弐景治は先述した景資の孫にあたる。景資には豊前六郎景能という遺児があり、その長男が景治である」この家系図から「鎌倉時代には古賀浦の地名と港の存在が裏付けられる。古賀浦は花鶴川河口と思われる」「古賀氏は少弐氏の一族で、地名をとって名字としており、その後、佐賀、筑後に子孫が広がる少弐氏系古賀氏の発祥のルーツの地である」（以上 土師先輩の論考より）

尚古賀の地名由来について「筑前の古地名・小字」（池田善



那珂川市にある岩門城址



岩門城址の麓の伝少弐景資の墓

朗)によると、語源は欠(コ)ガ(ス)、原義は砂丘が花鶴川によつて削られ崩落したところ。ユガの語源に佳字の古賀を当てたとある。同じく花鶴(川)は、語源は「崩(ク)エ端(ハ)曲(ツル)」原義は崩(ク)え地の傍を曲流する川。クエハツル↓クワツルに佳字の花鶴を当てた。川は大きくS字カーブを描いて砂丘を欠(コ)ガし玄界灘に注ぐとある。

### 福津市津丸の少弐家のお墓

南北朝時代の少弐氏は南朝方の菊池氏、探題の今川氏との闘いが続き次第に劣勢になっていく。更に南北朝の統一後(明德三年1392)大内氏が博多の支配を目指して筑前、豊前に進出し少弐氏を圧倒する。少弐氏は肥前に逃れるも、ついに永禄二年(1559)15代「冬尚」の代に滅亡する。15代当主の中でそのお墓が判るのはわずか5代という寂しさである。そんな中で、小弐家のお墓があるのを先述の「武藤少弐興亡史」(渡辺文吉)で知り、訪問・見学した。

現在の少弐家の当主の少弐良暢氏が建立された新しい墓の一角に五基の古い墓石が並んでいる。明治期が三基、江戸期が二基である。江戸期の二基は玄武岩に法名が刻んであるが、ほとんど読めなかった。僅かに向かつて左側の墓石に「少弐」の文字が確認できた程度であった。(尚、少弐家の新しいお墓の墓誌名は神道である)「武藤少弐興亡史」によると、向かつて右側は「宝永七(1710)年辛丑年/故権大僧都法印玲良禅門/八

月十五日。左側は延宝五(1677)年/故権津師少弐禅定門霊位/六月四日」と記載されている。さらに少弐良暢氏によると、古い時代の墓石が裏藪に多数散在していたのを近代になって寄せ集めて整理したため、大部分が失われた。また「先祖の由緒は祖父の代に預けおいたお寺(長龍寺||宗像郡神興村村山田)が退転したため滅失してしまった。(以上 武藤少弐興亡史より)

尚、快く案内をして頂いた松尾さんに感謝申しあげます。



福津市津丸にある少弐家の墓



福津市津丸にある少弐家の墓(左)

## 鹿部山周辺の魅力

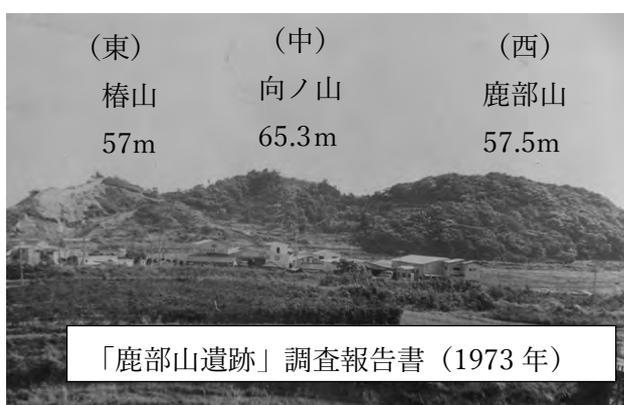
吉住長敏

### 1. 街部で唯一の山

鹿部山は古賀市の市街地で唯一残る山らしい山である。古賀市全域4,207haの面積のうち、古賀市都市計画マスタープランで「まち」（市街化区域）と位置づける面積817ha（全面積の約19%）のエリアで山林が残る場所は稀で以下の7カ所。しかし「山」が付くのは鹿部山にしか過ぎない。①鹿部山62・4m、②海津木裏51・9m、③泉林寺近く34・6m、④若八幡境内34・4m、⑤特別支援学校31・9m、⑥千鳥ヶ池憩いの丘20・9m、⑦綿津見神社18・2m。

「鹿部山遺跡調査報告書」によると左から椿山57m、向の山65・3m、鹿部山57・5mの標高で典型的な三上山だった。最新の古賀市基本図（2020年）には62・4mとある。

玄界灘の中央部に浮かぶ神秘の沖ノ島と関連遺産群。2017年に世界遺産に指定される以



(東)	(中)	(西)
椿山	向ノ山	鹿部山
57m	65.3m	57.5m

前、天気の良い日には鹿部山の展望台から沖の島が望めると『広報こが』（2006年6月号）に、いち早く明かしたのは石井忠（元古賀市歴史資料館長）。2016年『文化福津』に「戦時中の沖ノ島」を寄せられていた。

### 2. 細型銅剣銅戈の謎

同報告書には皇石神社の銅剣・銅戈の発見が記されている。「明治31（1898）西峰の西斜面中腹にある皇石神社（大石が御神体）境内の甕棺墓から細型銅剣と細型銅戈が各一口発掘された」当時の事情は、明治44年11月の考古学雑誌第2巻第3号の雑録に掲げられた古谷清氏の「鹿部と須玖」に詳しく、この皇石宮という神社の社殿拡張のため、社殿後方の小丘を削ったとき、その断面に露出した合わせ口の甕棺墓から発見されたものようである。（森貞次郎）

明治期の銅剣・銅戈の同時発見の経緯解明を探るため古谷清「鹿部と須玖」の論稿を九州歴史資料館で22年7月10日に全文を入手した。古谷は「皇石神官の橘香木実からの聞き取りで□□□□（注1）という子供が隠し持ちしていたが赤痢で死亡。神霊に致すところだと遺族が同社に返納した疑を挿む」。経緯は八木奘三郎（1866〜1942）の『考古精説』から引用したとあり、銅剣の1本は八木が持ち帰った事などが記されている。

次いで国立国会図書館デジタルコレクションから八木奘三郎

の鹿部山銅剣発掘調査報告を見つけた。八木の合わせ素焼甕からの出土の新事実とは東京人類学会雑誌173号に掲載した等であった。

ここで古賀市歴史資料館に展示される皇石神社の銅剣は「幻の銅剣」とある模造。発見されたものなぞ「幻」なのか公の刊行物から年代順に検証する。

**A** (1973) 鹿部山遺跡調査報告書 発行・古賀町文化財研究会

銅剣の所在に関する記述は一切ない。しかし、実物の細型銅剣を一度は知り得たからこそ型式を特定表現できた解説文と第146図ではないだろうか。特にその銅剣は細型銅剣の形式推移上、朝鮮東大院里出土のものと同県富士出土のものとの中間にある形式のもので森貞次郎氏の編年によればBⅡ型式に属する茎に紐類を巻いた痕跡をもつものとしても有名である。A(7頁)第146図(251頁)に高橋健自『銅鉾銅剣の研究』より“細型銅剣”が掲載。画像添付は略す。

**B** (1985) 古賀町誌826頁銅剣は東京大学に保管されているが、銅戈は神宝として神社に保存されている。」

**C** (1999) 古賀市れきしのアルバム 鹿部皇石宮出土銅戈「銅剣は東京大学人類学研究室に保管されていました。残念なことに現在行先不明となっています。」

ところでB編集時点で東京大学保管を明らかにしながらC局面では突然その所在は「残念ながら」…と不明理由を不問としたのは何故か。その経緯が詳らかにされてしかるべきかと思う。神宝に値する銅剣の所在究明について氏子側の対応ぶりを2021年5月1日に皇石神社氏子の2氏に尋ねた。

しかし、東大と称する某氏に渡したという伝承で書き物もない。氏子で福岡教育大学教授(当時)中野忠が東京大学の関係筋に幾度か出向かれたがその手がかりはつかめずに今日に至っているとの説明を受けた。

古賀市指定文化財第8号の皇石神社出土の細型銅戈は1898(明治31)年の発見にしては1世紀以上も隔てた2007(平成19)年の指定とは正直、腑に落ちない。長さ27・8cm(注)、幅7.2cm、厚さ1.3cm、重さは390・03gある。保存状態もよく現在は、

古賀市歴史資料館に常設展示されている。銅戈の装着例図を示した「れきしのアルバム(2001・3・1)」及び指定理由を合わせ次の通り「鹿部型銅戈」と考察されよう。



古賀市歴史資料館に展示されている細型銅戈と銅剣(模型)

○戈は古代中国の武器で相手をひっかけるのが主目的。同品は重厚な造りで、朝鮮半島出土品に類似し舶載品の可能性が否めない。

○全国で約30本弱ある銅戈で皇石神社の細型銅戈は最も古く完成品5本の内に入る実用品とみられる。

○当時は極めて高価な副葬品で被葬者は地位が高く周辺の王墓であった。

(注1) 同書には実名が記されている。※本稿で記載した氏名は敬称を省略させていただいた。

### 3. 鹿部観音堂

『筑前国続風土記附録』の鹿部村、皇石大明神社の記述「境内に若八幡石碑なり。地藏堂有。」は皇石神社氏子が護持する聖観音立像がある鹿部観音堂を指すことは確実。

古賀町建物図鑑(1967年)からも現在地に重なる位置に卍記号が確認でき、山頂方向への破線は皇石神社への傾斜の緩い参道があったとみられる。観音堂は老朽化と福岡県西方沖地震被害で建て替え2007(平成19)年7月に新築された。

この聖観音立像は九州歴史資料館の2014年度「福岡の神仏の世界」特別展で展示された。図録に「稀有の古像」「肉身の部分の強調は著しく、やや面長の面貌は頬を丸々と充実させ、胸は丸く厚く盛り上がっており、大腿部の張りもしっかりして

いる。やや背を反らせた姿勢や、肉付きのよい背中などと併せ、平安時代前期の作例の特徴を見せている」さらに「鞍手町の長谷寺の十一面観音立像を起点、核とする一群のものに連なる作例だと見受けられることは注目する」「志賀島の莊嚴寺の聖観音立像に通じる(中略)平安時代の仏像や鹿部山周辺を考えるとゆく上で、きわめて重要な意義をもった大切な存在である」等と解説されている。2から九州歴史資料館の井形進氏は海神との関係を考えてみる必要性を指摘された。



(井形進「鹿部観音の聖観音立像」2015。  
木造。像高 96.5 cm、平安時代9~10世紀)

### 4. 東京国立博物館所蔵の壺

鹿部山遺跡との関連があるかどうか今後の解明が待たれる「壺」が東京国立博物館に所蔵される。2018(平成30)年12月7日「日本の考古特別展」に行った。展示物(画像)は

「福岡県古賀市鹿部出土 弥生時代（後期）1～3世紀」とあった。古賀市の長谷川清孝教育長は、この展示について2019（平成31）年1月23日の古賀市議会議場で「大陸との交流と稲作の始まり、農耕社会の土器の企画内容に沿った弥生土器」、  
「東京国立博物館が昭和31（1956）年1月に個人から他の土器類などと一緒に購入したと伺っている」と経緯を説明。その時期は大水害復興後、2村1町が合併、赤字再建団体に陥り文化財保護が黙殺された頃であった？

今年5月14日、私は東京国立博物館宛に、この壺の形状、発掘場所、鹿部山古墳との関係等について詳細情報の提供を求め手紙を差し出した。すぐに「過去2、3回展示した。しかし入手当時の記録がない。申し訳ない」回答があった。皇石神社の神殿が以前はむき出しで絵馬も1点紛失しているらしく、細型銅剣に然り、謎が立ちはだかる。その後も「鹿部と壺」の何らかの手がかりを求めて更に追跡した。

その結果、鹿部山地区画整理事業の埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ（2008年12月）の庵ノ園遺跡（調査面積約750㎡）に壺胴部に関する出土記録があった。弥生時代中期～後期古墳時代から中世までの遺構・遺物から2間×2間の1号掘立柱建物からの出土土器である。あくまでも「鹿部の壺」参考事例程度に留める。



## 5. 鹿部山経筒

次に経筒が発見された位置は周辺遺跡分布図の通り、現在の花鶴丘3丁目の専用歩道上になる。住宅公団開発が始まる前年1971（昭和46）年2月21日、鹿部山「中の峰」（向い山）の頂部に埋納されていたのを長崎駒男が山芋掘りの途中発見した。

その詳細は鹿部山遺跡（1973）の第6章に詳しい。その経筒（直径10cm）、厚さ1.5mm高さ22・6cm特色は造営時期（永久元年・1113年）、施主、願主、「筑前國席内院 父々夫峰」などの銘文が錐状の道具で刺突する手法は初見だという。

他に青磁合子、青白磁皿、木製玉1、ガラス玉4が出土した。古賀町文化財調査員の長崎初男は経筒を「なぜ、鹿部山に埋納したか」（1999・9・15）で、磐井の乱平定後、朝廷は糟屋の屯倉を物部氏の一族の華都留（花鶴）で根拠地において管理させた春米（つきしね）女王を供養したものではないかと推論している。



鹿部山経筒と石製外容器

## 6. 鹿部土地区画整理事業

鹿部山周辺の古の姿は土地区画整理事業で大変ぼうした。現在の「ししぶ駅」から国道3号までは市街化調整区域だった。市街化区域に編入されて以後、大型住宅団地開発計画が一気に進化した。その36万3千㎡全域が鹿部地区、鹿部山遺跡群に含まれたが紆余曲折あつて1999（平成11）年8月6日から2000（平成12）年3月15日の調査期間だった。

文化財発掘調査の報告書IVには「様々な制約から全域調査できず。花鶴浦の位置すら確認できず、遺跡の全体像や性格を明らかにすることは困難」だったと悔しさをにじませた。とはいえ限定されながら「官衙的大型建物群の鹿部田淵遺跡は糟屋屯倉の対象から外れることはない」と確信をのぞかせている。

IV調査報告書ができたのは2007（平成19）年。古賀市が古墳時代を通じて政治的・経済的空白地と言いがたいが、（その時点で）市内の古墳には前方後円墳が確認されていないことから断定を避けたようだ。

ところがその6年後の2013（平成25）年春、空白地帯の古賀市に復元全長45・5m以上



鹿部田淵遺跡1次報告(2007)周辺の主要遺

の前方後円墳の船原古墳が確認されたのだ。官衙的大型建物群の鹿部田淵遺跡の造営時期は6世紀中頃を上限に7世紀初頭。国史跡となった船原古墳埋納坑7世紀初頭の時代背景とほぼ一致に至った今日、専門家による被葬者の権力像等に熱い解明の目が向けられているようだ。

### 更なる学術調査必要

皇石神社周辺の甕棺墓地一帯の西峰は神聖な地として造成区域に含まれず残された。かねてから3氏から今後の学術調査の必要性を言及されている。

### ○荒木隆前教育長

2010・11・3みあけ史跡公園の開園挨拶「鹿部山にも貴重な遺物が眠っているとわれ、大規模な学術調査の必要性が専門家から指摘されています」

### ○森貞次郎 鹿部山遺跡報告書1973年

「この神社裏の小高い平坦地はおそらく、いまなお甕棺墓地の密集地域として存在して残存しているのではないかと思う。」

### ○長崎初男

1999・9・15「甕棺群は境内中に無数／甕棺のどれも銅器が収められた／甕棺はここが北限、宗像にはない／全国的にも類のない由緒ある霊地／吉野ヶ里よりも多い」

古賀町文化財研究会は調査報告書で「福岡と宗像の間に位置

しているこの地域は両地域の影響を絶えず受けながら接点として重要な役割を果たしているのであった。横には地理的に縦には歴史的にこれらと密接な関係をもっている…」と結ばれた。その行間からは今後の古賀市のこの地域の更なる学術調査こそが郷土発展の糸口となるという先人の熱い思いが伝わる。

## 7. あとがき

5月例会で飯島勇一郎会長から会の20年誌に鹿部山のことを掲載したいと思いかけず声がかかった。そんな訳で2021(令和3)年10月の本会例会で私のパワーポイント発表「鹿部山周辺の古代探訪と今」を再編集し予定外の寄稿となった。最後に鹿部山の「魅力」を端的に記して結びとしたい。

2021年6月13日脱稿

### 鹿部山の魅力

- ① 屈指の古代史大舞台
- ② 開発から一部が残った
- ③ お宝がまだあるのは濃厚
- ④ 市街地で一の低山
- ⑤ 船原と一体で外から人を呼び込める観光資源

### 鹿部山開発の軌跡



工事が始まって樹木が伐採され、ブルドーザーが這いまわり、低くなった鹿部山かげから立花山が見えるようになった。昭和48年(1973)、花鶴3丁目付近

鹿部三山の東の峯、中の峯は崩され跡形もなく、西の峯だけが残りました。この場所に花鶴丘団地が広がっています。平成22年(2010)、当時の写真



## 郷土の戦国武将 薦野氏・米多比氏の特集

### 薦野増時、米多比鎮久の活躍

郷土には鎌倉末期から室町時代頃に薦野氏、米多比氏が居住していたと思われます。両氏は丹治姓一族という同族意識をもって常に行動を共にしていたようで、戦国時代には豊後の大友氏の筑前経営の拠点である立花山城の立花氏の与力となっていました。当時、薦野・米多比地区は、大内氏（山口県）の直轄領地である西郷地区との境目のために大友・大内両氏の勢力が拮抗する地域となっていました。そのため大友氏の先兵として常に緊張の中にあつたようです。そんな中、薦野増時、米多比鎮久という郷土に二人の戦国武将が登場します。立花山城に城督として戸次（立花）道雪が着任すると、二人は与力として仕え、各地に転戦し軍功をあげていきます。その後、二人は道雪の娘閨千代姫の婿養子になった立花宗茂（後の柳川藩主）の重臣として仕えていきます。

## 米多比氏が二派に分裂する

### 大友系と大内系に分かれて争う

#### 飯島勇一郎

応安三年（一三七〇）、九州探題に今川了俊が着任すると、大内氏は今川了俊を援護するかたちで南朝の制圧に協力していきます。しかし応永二年（一三九五）に今川了俊が解任されると、大内氏は筑前支配に乗り出していきます。その後、大内氏の筑前支配は続いています。その後、応仁の乱（一四六七）が起こると大内氏は参戦するため九州を引き上げ上京していきましました。この頃、豊後の大友氏は筑前に進出し糟屋郡を拠点に勢力を広げていきます。当時の席内院（古賀一帯）は少弐氏の支配下で、米多比氏、薦野氏は少弐氏に従っていたと考えられます。

### 「薦野・米多比両氏は宗像氏に従う」

応永五年（一三九八）に八田・惠通寺の戦いが起きていますが、当時、米多比・薦野両氏は少弐氏に与力していたよ

うです。この戦いは九州探題渋川満頼・大内義弘と少弐貞頼の戦いで、この合戦で大内氏が勝利し、宗像氏経は大内氏に与力しています。そのため大内義弘は恩賞として、応永五年七月に宗像氏経に糟屋郡の米多比・薦野・薬王寺の地と西郷地区を与えています。そのため、応永十二年（一四〇五）十二月八日に米多比氏・薦野氏・薬王寺氏の三氏は連判で宗像氏経に属する旨の誓文書を提出して、宗像氏に従うことを誓っています。

「宗像神社文書」によると、応永十三年（一四〇六）八月一日に米多比茂時、薦野貞家、薬王寺資時の三氏は同所の山警固について誓文書を宗像氏経に出し、二十三日に宗像氏経は契状を送ったことが記録されています。しかし宗像氏の所領拡大と共に三氏の関係も消滅したと考えられます。宗像氏と誓文状を提出して関係を結んだ三氏でしたが、宗像氏との関係も薄くなり、宗像氏に属したのも一時的なものであったと考えられます。以

後三氏と宗像との関係を示す史料はない。また同じ応永十三年には、宗像の土穴・須恵・稲本の三ヶ所は鎌倉以来、少弐一族の武藤氏の所領であったが宗像氏経の所領になっています。大内氏が筑前を引上げ京に行くと、大友氏が筑前に進出し筑前を領有していきます。この頃に米多比・薦野両氏は大友氏に従ったようです。しかし薬王寺氏は元寇の時に活躍した一族でしたが、その後の記録はなく、別の土地に移っていったのか、滅亡したのか記録がなく不明となっています。

### 「大内氏の筑前進出」

文明十年（一四七八）、応仁の乱が終ると、大内氏は再び筑前に侵攻してきます。やがて少弐氏・大友氏の連合軍と大内氏との間で争いが始まります。大内氏が糟屋郡へ侵攻してくると院内（古賀一帯）の郷士たちは大内氏に従おうとします。当時、院内は大友氏の支配領域と思われる、薦野氏、米多比氏は大友氏に属していたと考えられます。そこへ大内氏が侵攻し、

米多比氏、薦野氏を味方に付けようとしてきます。大友氏にとつてそれは許されない行為だったのでしよう。大友義鑑は享祿四年（一五三一）に米多比氏に対し「米多比の土地二五町」を闕所処分したのです。つまり米多比村の土地を取り上げたのです。薦野氏も同じく五町を闕所処分されています。この闕所処分は米多比・薦野両氏だけでなく院内一帯で行われています。その後も大内氏の侵攻は止まらず院内一帯は大友氏、大内氏の領域が混在していたようで、当時、米多比氏・薦野氏は闕所処分された事で大内氏の支配下にあつたと考えられます。

翌天文元年（一五三二）九月に大友氏は大内氏の直轄地である西郷の河津隆業の宅所を攻撃しています。この戦いで河津隆業は敗死しています。そのため西郷を攻撃された大内義隆は重臣の陶興房を筑前に送り、翌年には大友氏の城、立花城を攻撃し落城させています。「宗像神社文書」には「大内勢が院内境目に陣替え

し、続いて立花麓まで出兵した」と記録しています。院内での一連の戦いは、大内・大友両氏の支配が拮抗する境目と認識されていたことが考えられます。

天文二年（一五三三）には大友氏の所領であつた立花城一帯は大内氏の領域となり、薦野・米多比地区は大内氏の支配下になつていたようです。そのため、米多比・薦野両氏は大友氏に闕所処分されたが、大内氏の支配下で、そのまま米多比村、薦野村に居住していたと考えられます。しかし米多比一族の中では、米多比家兼と米多比元実（次郎左衛門尉）が大内氏に従うか、大友氏に従うかで意見が分かれていました。

#### 「大友氏と大内氏が和睦」

大内氏と大友氏の争いが激しくなるにつれ、天文三年（一五三四）將軍足利義晴は大友義鑑に大内義隆との和睦を命じます。当然大内氏にも和睦の提案がされたと思われます。そうした中、天文五年

（一五三六）五月に大内義隆は念願の大宰大弐に任じられています。大内義隆は以前から大宰大弐の官職を將軍に切望していたが許可されずにいました。おそらく大内義隆は大宰大弐官職と引き換えに大友氏との和睦を承諾したと考えられます。大友氏と同盟していた少弐資元が大内氏の陶興房から攻められ多久城で自害していることから、少弐氏との関係も無くなったことから、大友氏も大内氏との和睦に進んでいたと考えられます。

記録では天文七年三月に大内・大友両氏の和睦が成立したようになっていきますが、天文五年（一五三六）の時点では、米多比・薦野両地区は和睦によつて大友領になつたと考えられます。おそらく筑前国の旧大友領を返還する約束が結ばれたと考えられ、院内は大友領に返還されたと考えられます。そのため大友義鑑は天文五年七月に薦野村の五町を返還しています。米多比の土地二十五町も米多比次郎左衛門尉に返還されています。この

事は米多比・薦野両氏に、今後、大友氏の与力になることを約束させたものと考えられます。

### 「米多比氏が二派に分かれる」

大友氏の与力になることを嫌っていた米多比家兼・益兼親子は大内氏に味方しようとして米多比村から去っていき、以後、大内氏に従っています。その結果、米多比一族は大友氏に従おうとする米多比元実（次郎左衛門尉）と大内氏に従った米多比家兼・益兼親子の二系に分裂することになりました。米多比元実は大友氏の与力として立花城に仕え、孫にあたる米多比鎮久は戸次道雪の重臣として仕え、道雪が亡くなると娘婿の立花宗茂に仕え重臣として活躍していきます。

一方、米多比家兼・益兼親子は大内義隆に従っていました。米多比家兼は天文十八年（一五四九）に「鞍手郡野坂・赤馬両庄代官職」に補任されています。（米多比善治文書）また同年には大内義隆か

ら大府宣（だいふせん）で「糟屋郡米多比村二五町地」を宛がわれています。これは大内氏が米多比家兼に米多比村の領有を認められたもので、大友系米多比氏と大内系米多比氏が「米多比村」の正当性を争っていたことが解ります。しかし米多比家兼は「米多比村」を所有することはありませんでした。このように米多比家兼は重要な直轄領の代官として大内義隆に取り立てられ、信頼されるまでになっていました。



大内義隆の大府宣（米多比家兼宛）

### 史料編

#### 「大内義隆の大府宣」（米多比善治文書）

天文十八年（一五四九）七月十三日に大内義隆により米多比家兼に大府宣（大宰府の宣言）で「糟屋郡米多比村二十五町地」を宛がっている。これは義隆が米多比家兼に領有を認めている書状です。

大府宣 大宰府在廳官人等

可任早廳宣管筑前国糟屋郡米多比村

廿五町地事

右以丹治家兼所宛行也者在

廳官人等 宣承知依宣行之

以宣 天文十八年七月十三日

大式多々良朝臣（花押）

（読み下し）

大府宣す、大宰府在庁官人等、早く庁宣に任せるべき、管する筑前国糟屋郡米多比村廿五町地の事、右 丹治家兼を以て宛行う所也、てへれば在庁官人ら宜しく承知し、宣に依りこれを行え、以て宣す。

## 天降神社の釣り鐘

大願主は女傑

顧問 土師 武

### 「概要」

古賀市薦野の天降神社の神宝として知られた名鐘は、今から485年前、戦国乱世の天文六年（1537）ひとりの女性が大願主となり、米多比、薦野両戦国武将らの協力を得て、茶釜で名高い芦屋の名工に制作を依頼、神社に奉納した。



失われた名鐘

鐘の胴には365字の銘文が刻まれ、当時の数少ない貴重な歴史資料で武将の連携、経済力、文化レベル、女性の地位の高さなどがうかがえる。惜しいことに戦

後、所在不明となったが、江戸後期に書かれた太宰管内志と筑前国続風土記拾遺に銘文の写しが残る。漢文の原文を口語訳して紹介する。

### 「銘文の口語訳」

大日本国関西路、筑前国糟屋郡薦野村の天降天神宮に釣り鐘一口（いっこう）を奉納する。信心深い檀家の女は、もともと神社近くで生まれ、今は他郷に住むが、地元に住ると同じ誠の崇敬の礼をもって氏神と仰ぎ奉っている。聞くところによると、神社の祭祀器具は破損して長年鳴り響かず、このことが気がかりで耳を離れない。そこで長い間、石を口に含んで運び海を埋めたてるような、微塵で大山を積みあげるような気持ちで辛苦を重ね、ついに立派な梵鐘を作りあげた。諸行無常の響きは鳴りわたり、救済は廣大、衆生の迷いを悟らせる。小鳥のような信女の願いは満たされ成就した。そこで、ひなびた詩（偈）を刻みささげる。「大きな炉で鑄た鐘は丸く強く、たたく

に従い、音に従って大きく鳴り響く。音は天地にみち、十方に聞こえる。神々も関心し、魔軍は恐れ入る。遠近の人々は眠りからさめ、貴賤を問わず夢からめざめる。鐘を目にすれば真理を悟り、鐘の音を耳にすれば悟りの境地に至る。浄土の花は開き、悟りの知恵は大いに香る。天下に徳は広がり、君臣の道は合い、子孫は長久である」

大願主は神社の東方5里（約20キロ）鞍手郡植木庄新北（にいきた）郷（鞍手町）に住する丹治（たじ）氏の信女である。時は天文六年（1537）丁酉（ひのととり）南呂（八月）十九日卯の刻（午前六時）に鑄あがった。鑄匠の大工（だいこう、棟梁）は芦屋津本金屋（もとかなや）の大江宣秀。当時の領主・米多比家繩（次郎左衛門尉元実か）、薦野宗家（河内守続家か）ならびに社仕大官司は奮起し、縁を探し募って援助し、立ち上がって鐘を運び、同年菊月（九月）二日庚辰（かのえたつ）鐘楼につるしお

えた。 本金屋大工 大江宣房。

### 〔太宰管内志〕

○天降神社  
〔洪鐘銘文〕に奉、指畫梵鐘一口、大日本國關西路境前精羅野村天降天神宮夫、以就信心檀女者元寶、生於宮地、也今雖在異鄉、崇敬禮贊、如在之誠、以奉、仰、氏神、也于皇朝、斯宮中樂器廢而朝音衰、不扣鳴、敬、皇朝此事、在于耳、哉、係、斯、風、晨、月、夕、投、含、石、之、願、於、巨、海、千、回、萬、般、禮、微、塵、之、念、於、大、山、竟、軌、一、聲、之、華、鐘、以、表、諸、行、無、常、壽、明、利、生、廣、大、堂、普、欲、使、覺、知、群、生、迷、妨、微、衛、志、滿、願、海、既、成、就、萬、朝、銘、以、許、揚、云、鴻、鐘、陶、鑄、大、器、圓、剛、隨、扣、隨、聲、旋、々、聲、響、六、合、聞、應、十、方、神、明、鑿、洞、塵、軍、恐、惶、遠、近、眼、淚、賁、夢、亡、于、目、之、則、見、心、真、烈、于、耳、之、聞、則、聲、符、遠、直、場、九、臺、花、綻、四、智、威、香、普、天、奉、土、德、化、汗、洋、君、臣、遺、合、兒、孫、久、長、大、願、主、去、宮、庭、東、方、五、里、外、鞍、手、郡、植、木、庄、新、北、郷、居、住、丹、治、氏、之、信、女、矣、于、時、天、文、六、年、丁、酉、南、呂、九、日、卯、刻、鐘、成、攝、鑄、匠、大、工、華、尾、津、本、金、屋、大、江、宣、房、領、務、米、多、比、家、細、應、野、宗、家、并、社、司、大、宮、司、助、短、康、素、業、扶、助、鑄、鐘、遂、成、之、而、以、同、曆、每、月、上、旬、二、日、庚、辰、登、鐘、舉、本、金、屋、大、江、宣、房、と、あり、天、降、は、阿、毛、理、と、訓、べ、し、今、は、ア、マ、タ、リ、と、唱、ふ、る、な、り、天、降、天、神、社、今、も、柏、屋、郡、薦、野、村、に、あ、り、て、薦、野、米、多、比、兩、村、の、氏、神、な、り、社、は、南、向、に、し、て、神、殿、拜、殿、石、鳥、居、あ、り、近、村、の、大、社、な、り、祭、禮、は、九、月、又、此、社、〔神、寶、假、面、背、面、銘、文〕に、奉、神、祇、天、降、宮、天、正、五、八、月、吉、日、丹、治、平、朝、臣、米、多、比、鐘、久、と、あり、此、神、社、奉、い、さ、だ、委、く、も、考、へ、ず、神、官、は、二、家、と、も、に、福、岡、松、原、院、支配、な、り、神、宮、布、世、相、禮、と、號、す、社、借、あ、り、天、宮、宗、に、し、て、調、聲、を、取、行、ふ、清、瀧、と、云、支、村、に、居、住、せ、り、

### 「信女の正体」

大願主に女性がなることは大変珍しい。丹治氏の信女は嫁入り先から米多比、薦野ら戦国武将を動かして資金を集め、名工に鐘を発注するほど実力のある「女傑」だったといえる。戦国女性の力と地位をうかがわせ興味深い。信女の出自や嫁ぎ先は従来明らかでなかったが、鞍手町誌によると、婚家は鞍手の薦野家で、子孫は新北村の庄屋を務め一族の墓も残る。古賀の薦野から分家したらしく慶長

七年（1602）には薦野成家が新北薦野家ゆかりの熱田神社に太刀一振りを奉納したとの伝えもあり、両家の深い交流を物語る。信女が嫁入り先の薦野を名乗らず、薦野、米多比共通の祖先である丹治氏を刻名したのは、米多比から薦野の分家に嫁いだため、生家と婚家への配慮からだろう。大願主として両家の繁栄を願う気配りが感じられる。信女の実家を米多比氏とみる根拠のひとつは、当時の米多比氏は大友系と大内・宗像系に分かれており、大内支配下の芦屋釜にツテがあった。その人脈を通じ名工に頼んだと考えられる。信女の実家は大内系米多比氏かも知れない。

なお鞍手町誌には、昭和四十年四月、薦野の古老阿部惣三郎氏（当時八十歳）の話として「天降神社の鐘は昔から名鐘の名が高く縁起の良い物とされ、天草の乱の折りに陣太鼓として出陣した。どういかわけかその後、地中に埋められていたが、神官の布施野氏が神がかりの人か

らその話を聞いて掘り出し、太平洋戦争にも供出せず、戦後名刀二、三振りと共に神殿の奥深くご神体の側にしまっていたところ、いつの間にか盗難にあつて今はない」と興味深い話が書かれている。銘文に残る米多比家縄、薦野宗家の名前は現存の古文書や系図に見られないが、家縄は天文五年（1536）大友義鑑から二十五町歩を還付された米多比次郎左衛門尉元実、宗家は名将薦野増時の祖父・薦野河内守続家との説が有力。

### 「観音信仰」

ところで、信女は何故、神社に仏具である梵鐘を奉納したのでろうか。明治のある梵鐘を奉納したのでろうか。明治の神仏分離まで神社と寺院は一体で、神は仏が仮りに姿を変えて現れたという本地垂迹説により、仏の方が上位に置かれた。天降神社の本地仏は十一面観音だった。信女は本尊の十一面観音を信仰していたと思われる。困難を救うという観音信仰に乱世の救済を祈願したのでろうか。銘文にも仏教色が濃い。米多比氏ゆかりと

される上米多比と福間の舍利蔵に残る同形の五輪塔には十一面観音の梵字が刻まれている。米多比の五輪塔は寺院跡とされる敷地隣りの大木の下に。



米多比の五輪塔

舍利蔵の方は舍利山観音院勝宝寺（無住）境内に続く雑木林に、いずれも二基ずつ残る。



舍利蔵の五輪塔

共に正面から見ると五輪塔だが側面から見ると扁平で板碑に近く、両者とも他に例のない変形五輪塔で、同時代に同一人物が建てたと思われる。十一面観音の梵字は両方とも胴の丸い部分に刻まれており、勝宝寺の本尊も十一面観音、同寺に現存する釣り鐘にも十一面観音の文字が陽刻され、信女〓天降神社〓十一面観音〓五輪塔〓米多比〓舍利蔵と結びついてくる。寺と五輪塔のつながりにも深いものがある。

#### 「米多比武將の先祖供養か」

ではなぜ米多比と舍利蔵に同じ五輪塔がつくられたのだろうか。これは想像だが、天正十五年（一五八七）、立花宗茂の大名栄転に従って柳川に移住した米多比鎮久ら米多比一族の武將が祖先供養ためゆかりの地に同じ五輪塔を建てたのではないだろうか。

#### 「子孫長久の願い」

釣り鐘の池の間に刻まれた銘文は①奉納

のいきさつ②偈文③信女の名乗り・支持者・作者の三部構成だが、信女が最も苦労したのは資金集めだったと思われる。当時は軍備最優先の乱世で資金は武器、兵糧に当てられ、地方武士にとって釣り鐘づくりの余裕などなかったはずで、彼女が「微塵で山を築く」と例えた辛苦の程が察せられる。信女の願いは大内・大友系に分裂した米多比一族の統合か、同じ丹治一門の米多比・薦野の結束だったのか。数十年後、孫の世代に米多比鎮久・薦野増時という名將が現れて郷土を守り抜き、願いが叶えられたといえる。



天降神社

## 幕末の名家老 立花増熊

Ⅱ 余録 筑前人の立花嫌いⅡ

顧問 植田謙一

立花増熊(ますたけ)は、戦国時代の薦野増時、福岡藩初期の重臣重種や利休茶道の神髓「南方録」を著した実山からつらなり、終焉を迎える幕藩体制の中で名家老として福岡藩に尽くした。彼の「醒翁略譜」(増熊)日記(福岡県立図書館蔵)等から履歴を紹介する。

- ・文化4年(1807) 出生
  - ・天保5年(1834) 28歳、家督を継ぐ  
中老 四千石
  - ・嘉永元年(1848) 42歳、御用人(右筆詰)
  - ・嘉永5年(1852) 46歳職分(家老)
  - ・嘉永7年(1854) 48歳財用方本
  - ・安政6年(1859) 53歳、五百石加増、財政改革の功を賞せられる
  - ・文久3年(1863) 57歳黒田姓拝領
  - ・慶応元年(1865) 59歳 隠居
- 黒田姓召上げ (乙丑の獄)

(新訂黒田家譜七巻は元治元年、1864、とする)

- ・慶応4年(1868) 62歳 家老復職  
黒田姓拝領 (保守派家老切腹)
- ・明治元年(1868) 62歳五百石加増  
勤王の働き、財政改革を賞せられる
- ・明治2年(1869) 63歳退職、年来勤王の志厚く、一世米百俵、大参事上席
- ・明治22年(1889) 83歳 死去
- ・大正13年(1924) 皇太子御成婚贈位  
正五位

増熊は遅咲きである。御用人として藩政の一端に列するのは42歳。その時の仕事を評価した藩主長湊(11代)は家老に登用する。増熊在任中、福岡藩は尊王攘夷派、公武合体派に分断され、藩主と家老との対立、家老間の対立、藩主自ら長州周旋にのめり込み、佐幕・勤王に揺れ動き、藩内は家士を含め騒然たる状態である。彼は江戸や京都にあって一橋家や二条家との根回しに奔走する。これが勤王家から「立花山城(増熊)、風評一向不宜、実姦物二相違

無之候」との非難を招くが、批判とは裏腹に一橋家からも二条家からも好意的に評価されている。増熊の本心は尊王攘夷、公武合体よりも藩内の融和であつたらう。彼の沈着冷静で誠実な人柄が窺える。

増熊は48歳で財用方本々に任用される。その時の日記にこうある。「早速御財用繰取しらへ見候処、承居候方も必至之御間(つかえ)、大坂而已之御借財高も百万兩ニ及び、其外所々より之御借財を合せ候へハ莫大之高ニ有之」

福岡藩は前代藩主斉清時代の財政の負の資産(\*)を引き継ぎ、藩の財政は危機的状态である。

\*藩主斉清の時期、既に藩の財政は危機的状态にあつた。財政を切り詰め財政改革をはかろうとする「同気合体」派の家老、と財政改革に消極的な「穩健派」家老とが対立。斉清は「同気合体」派を罷免。斉清は緊縮財政を忌避、藩札を大量にばらまき、博多中州に大阪から歌舞伎役者などを招

き一大繁華街として景気をおおる。一方、鴻池など大坂の蔵元に対する借金の返済を一方的に凍結、彼らとの関係を断ち切った。しかし、天保改革は失敗に終わる。藩の財政は大坂の借金なしではなりたない。改めて鴻池に借金を申し入れるが拒絶される。次の藩主斎漣は江戸参勤の途中、大坂で鴻池らに謝罪し、改めて蔵元に就任するように要請する羽目となる。



立花増熊

— 閑話休題 —

増熊は自ら大坂に向き大坂商人鴻池などと折衝をすることになるが、財用方本々就任直後の増熊は気が重かったであろう。増熊は交渉を無事終えて大坂から帰福後に参殿して藩主に報告する。「大奥へ罷

出、大坂の都合御咄申上候処、殊外御驚被成、誠ニよき都合にて取斗候と御大慶被遊」(増熊日記 嘉永7年11月4日) 御酒を頂戴し、「太き御器にて頂戴いたし大ニ酔候」、この日の日記からは藩主、増熊双方の喜びや安堵感がひしひしと伝わってくる。

その後、増熊は精力的に財政改革を進め、安政年間には藩財政が危機的状況を脱した。その時、増熊は出資し協力してくれた郡町浦の民間の者を箱崎の茶屋に招き、みんなの協力で大坂での借財整理交渉が成功した旨を報告し謝辞を述べている。しかし、これはほんのひと休止にしか過ぎなかった。もう時勢が許さないところまできていた。幕藩体制は崩壊の道をひたすすみ、福岡藩財政は人知では抜け出すことが不可能なブラックホール状態であった。明治期の福岡藩の贖札事件へは一本道、とどのつまり必然の終着点であった。増熊のこの時期、豊後庄内藩等で財政改革を成功させた日田商人広瀬久兵衛が福岡藩の財政改革にかかわっているが、彼の才知をもって

してもこの流れに抗うことができずブラックホールに飲み込まれる。

近代の歴史家春山育次郎は増熊の実績が評価されないのを嘆く。「謂ふ処の筑前藩勤王党の巨頭、黒田一葦・矢野梅庵・大音青山の諸老、嘗て後先相次で国事勤勞の旧功を録せられ、特に叙位・贈位の光栄を賜ふ。彼の人物英偉行実豊富、就中、朝命承順の功勞、最も没すべからざる立花醒翁(増熊)、独り此恩典より逸せるは、抑々何の故を以て然るか。醒翁身死して棺蓋ふ將に四十年ならむとす。世の人の之を見る紛々区々、公論猶ほ定らざるの状なり。抑々また何の故を以て然るか」(立花醒翁「筑紫史談33、34集」)

《立花氏、執政停止の珍伝説》

立花家は実山事件以来不遇の一途をたどる。平左衛門家では重昌が隠居を命ぜられ、家督を継いだ増敬は四千斤のみの家督を許され、中老入りとなるが黒田姓を剥奪されて立花姓に戻る。増昆(ますひで)の

時、一時家老職に就くが、増名、増良は執政から遠ざかる。総じて不遇の時期である。満を持して登壇したのが増熊である。立花家が永らく執政(家老)から遠ざけられたのには理由があると、春山育次郎が紹介する古老の語る「執行停止の珍伝説」である。

醒翁ドンより四代前の先世は若年の頃に江戸の屋敷の勤番であった。その頃の奥には、早世した世子重政君の後室で容貌秀麗な真含院がいた。醒翁の先世は怪しからぬ心得違いをして恋々の情を発し日夜思慕するが能わず、天魔に魅入られたか、乱心して、ある時、夫人の座に進み、恋に上下の隔ては候はじと、ヒシト抱きついてきたので夫人は大いに驚き、怒りで薙刀を取れと言われ、大騒動になったが、もし外に漏れ聞こえれば物見高い江戸市中の評判となつては御家の不面目と、醒翁ドンの先世を帰国させた。真含院夫人は怒りが収まると、段々事情を聴き、自分の身を思慕して乱心した心情にほだされ寛大な処分を望まれた。結局退職謹慎の処分を科された

が、内々、以後三代の間は執政を仰せ付けることはないと言われた。醒翁ドンは、三代過ぎ四代目となり執政停止の期間が満了したので長溥公より家老職を命じられた」と。春山はこの珍伝説に対し、立花氏を誹謗する筑前人の伝統的感情の間より生じた荒唐無稽の言説と断定する。

#### 《弾正繩 異聞》

増熊と言えば弾正繩で知られる。これも珍説の類であろう。「筑前人物遺聞(海妻甘蔵)」に言う。

「文久の前、福岡藩の大坂登せ米は壹俵宛三斗三升入りの定めであったが、それに満たないものが多く筑前米の評判が悪かった。藩政府から家中の者に意見書を出すよう命があった。石火役柴田直次は日頃からこれは製俵の問題があると思っていたので早速作俵の改良案を上申した。直次は家老立花弾正の宅に数度呼ばれ改良案を説明、この案が採用され、弾正繩と呼ばれ、一俵二付銀五匁の価値が増えた。しかし、直次には一言の賞詞もなく弾正は黒田の

苗字を賜い、又禄五百石を加増された。」  
弾正繩考案者にはこのほか、永蔵勤めの中村仁平(中村順子著、「福岡地方史研究46」)など複数あがっている。考案者は評価されるべきではあるが、それが誰であれ、米俵製俵の改良案を採用し実行させたのが増熊であったであろう。「大阪城は秀吉がつくった、弾正繩は増熊がつくった」

#### 《筑前人の立花嫌い》

重種が藩政の中枢にあり立花一族が繁栄を極めた頃にも立花家への誹謗があった。「筑紫秘談」「五龍日記」などの読み物は妬(ねた)み、嫉(そね)み、中傷記事として片づけられるが、家老吉田式部治年が隠居後に六代藩主継高の間に答えた記録(福岡藩吉田家伝録「此君居秘録」)がある。「有職の人の子弟挙げ進められ候は、其父兄の不幸に候。光之君の御代に黒田平左衛門重種の弟立花勘左衛門増弘御納戸頭命じられ、その後家老職に進められ、平左衛門の次男立花五郎左衛門御納戸頭命じられ(中略)候を世人善(よし)とせず。」

平左衛門(中略)固辞せざるを誹謗(そし)り笑えり。」(南方録と立花実山、松岡博和)  
福岡藩では播磨時代以来の家臣を大譜代、中津入封後の家臣を古譜代、筑前入封後の家臣を新参と呼んでいる。立花氏は新参者である。その新参者の異常な出世に対する大譜代・古譜代の家臣の怨嗟であろうが、これが幕末まで続いているのは何とも異常というほかない。

### 《おわりに》

増熊の著作の一節を紹介する。彼は文化人として、幸せて平穏な晩年を送ったのである。めでたし、めでたし、である。

「南方流由緒書 明治十七年三月

黒田増熊含翠堂

(福岡県立図書館蔵)

『つひに老衰して、世塵に交る事物うく、糟屋の郡奈多浦の別荘にのがれて、庭上の清水に黒唇をそそぎ、ただ独り薄茶など喫して老を養うのみになむ、(中略)いと壮(さかん)にして朝暮猶点茶の道に遊び、門人弥数輩に及べり、扱其師弟相

かたらひ昔にならひ(中略)献茶を始めしに、去年より弥広まり、自他一統他流の人々をも招請して、益盛大になりゆき、云々

なき魂も天かけりきて うすく濃き  
手向の木の芽 めでてのむらむ』

END

### || 余話 ||

薦野の養徳山に立花増厚らが安永3年(1774)に建立した丹治式部少輔峰延850年忌の墓碑があるが、立花増熊が925回忌に墓参している。彼の日記から紹介しよう。

増熊日記 嘉永二年五月

『一、当年八瀆源明神九百廿五回二付、蔣野村ニ而神祭法事致候条、五月廿三日より廿四日迄一宿掛御隙相願、蔣野へ罷越し、(略)同夕蔣野ニ而当村料理出シ廿四日清瀧寺参る、養徳山社参、(略)六歌仙自筆ニ認、額奉納(略)』

なお、養徳山には彼が文久元年(1861)に建立した立花成家の妻の250年忌碑がある。

### コラム

#### 薦野 清瀧寺の「頼恩之碑」

清瀧寺本堂前に立花増熊の頭彰碑「頼恩之碑」がある。明治三十四年、大字薦野中の建立である。増熊の弾正繩の断行で百姓の怨嗟の音が巷に満ち、明治六年、竹槍一揆勢を前に増熊が演説した時には「弾正繩で縛ってしまえ」との怒号を浴びたという(古賀町誌)。

この碑文は磨滅し判読困難な文字が多いが、「明治三年捐己土地」「以救貧民其他薦野人」「恤救済不可誉」「此村人之口慕不措又宜也」「爰穿沼地」などから、薦野村への幾許かの義捐行動が読み取れる。彼の善政に対する村人の敬愛の情が「頼恩」の言葉に込められている。



清瀧寺の頼恩之碑

## 村山一族の先祖と米多比氏の関係

### 村山 美婦子

上米多比地区には村山家が多く存在するが、その村山一族には、先祖祭りと呼ばれる先祖供養の営みを、江戸時代末期から百五十年以上現在も続ける家が少なくとも二派十五軒以上ある。その中心的役割を務める村山家には先祖代々伝えられている系図や文書類が存在し、それらが中世期以降米多比の地で小領主として生きた米多比氏の内、戦国時代末期から江戸時代初期にかけて戸次道雪、立花宗茂に仕えた武将として知られる米多比鎮久の家臣であった人の末裔の家であることを伝えている。これらの文書類を拝見する機会を得た私は、我が家も先祖祭りを行う派のうちの一派でもあるので、ここでその詳細を紹介させていただきます。

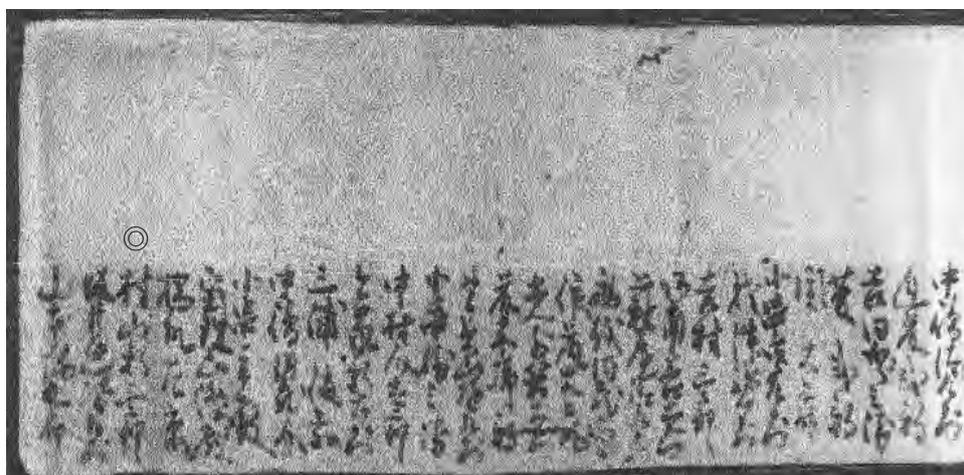
村山家には「村山氏先祖之記」（以下「先祖記」と略記）と「村山家先祖祭供養帳」（以下「供養帳」と略記）なる書付が伝わる。

「先祖記」では村山氏の先祖である新三郎鎮種なる人物が米多比鎮久に仕え、秀吉の朝鮮出兵の際に鎮久の家臣として同道して活躍したこと、立花宗茂が柳川藩主となつて以降も同行した鎮久の配下として仕えたが、宗茂が関ヶ原の敗戦で改易した際致仕して、黒田長政の家臣として筑前に戻った薦野増時に同道して米多比に戻り、その後は悠々自適に暮らして家督を喜右衛門鎮門に譲り、慶長九年（一六〇四）生涯を閉じたとある。

村山新三郎は『米多比文書』に収められる史料、「文禄元壬申年朝鮮御陣御備書附」の立花三左衛門の与力五十二名の中に名を連ねる実在の人物であり、朝鮮の役での活躍は疑いない。



「立花三左衛門（米多比鎮久）の与力の家臣団五十二名列記部分の抜粋」  
村山新三郎の名が見える。



しかし一方で、「先祖記」は新三郎を米多比大学（鎮久の父）の三男（鎮久は長男であるからその弟になる）とし、米多比大学は薦野鎮房の二男（長男は薦野増時）と記している。

「先祖記」は、元和四（一六一八）年の村山喜右衛門鎮門の死から二百三十二年後の嘉永三（一八五〇）年、村山一族による先祖供養を確立させた経緯がわかる「供養帳」と同じ時に書き記されている。米多比・薦野両氏族は同じ丹墀一族の出であることは明確であることから、意識の上で混同が生じ、かなりの年月の経過後による誤記も考えられなくはないかとも思う。しかし「供養帳」にいう、喜右衛門が亡くなった時には大木を墓標とし、その木が枯死した時に改めてその地に石塔を建立せよとの遺言が嘉永三年に実施され、その墓が現在も確認されること、以後毎年命日に一族が相集い先祖供養をすべしとの言を確認し、末尾に名を連ねた当時の村山一族八軒を先祖とする村山氏は、現在もその子孫が米多比内に居住し、先祖祭りが百七十年の長

きにわたり続いており、村山一族の血脈は確かに維持されてきたのは事実なのである。

### 村山氏先祖之記（読み下し文）

村山氏、人皇二十八代宣化天皇皇子上殖葉皇子十市王田治比古王丹治比直人島より出で、陽成天皇朝丹墀式部少輔峰延、大和國洪田庄より筑前糟屋郡薦野へ郡司として下向。白嶽養徳に城址を構へ資源開拓國土を經營。峰延公十数代の裔美濃守鎮房二男米多比大学の三男村山新三郎鎮種にて米多比五郎次郎鎮久に仕へ、文禄二年豊臣秀吉の朝鮮征伐には柳河城主立花宗茂公の麾下に属し碧蹄館大戦に奮闘戦功あり。黒田長政筑前守となるや三河守増時公は長政の切望にて仕官す。依つて二男増利及米多比鎮久を宗茂公に仕させ、長男成家三男正時四男増重を伴ひ旧采邑薦野へ帰還す。村山新三郎鎮種は増時公に随行し米多比へ還へり、悠々自適閑居し喜右衛門鎮門に譲り慶長庚申九年歿

嘉永三年戊十一月十六日

### 村山氏先祖祭供養帳（表紙と読み下し文）



嘉永三年

別家同苗中

戊十一月十六日

村山氏先祖喜右衛門という墓所に大木の木老木あり。此仁の遺言に木老木して枯候ハバ、石塔建て申すべしとの事、代々申し傳へ有。時に今年枯倒れ候に付き、別家同苗中打ち寄り評議の上、石塔建て方いたし、それより先祖祭として、毎年十一月十六日打ち寄り申すべき事。但し、年により凶年ありとも堅く怠らず相勤め申すべき事。すなわち左に別家の次第書き記すもの之。此の外村山苗字有て尋ねども続柄は是より別になし。

（■判読不明）

元和四戊午年 俗名喜右衛門  
 浄岳道清居士 根本 喜兵衛  
 十一月十六日

嘉市 忠次郎 甚五郎  
 利右衛門 忠助 九平  
 茂八 以上八軒



中央の山の頂上部分が  
米多比城の居館跡

薦野氏、米多比氏は郷土古賀の歴史における特別な存在であり、この『古賀郷土史研究会二十周年記念誌』でも特集を組んで紹介している。したがって米多比鎮久の人生についての詳細はそれら他を別途参照願いたくここでは割愛するが、彼がこの米多比の地で生きていた時代の証は、現在の地域内にしつかり残されていることを強調しておきたい。一つは米多比城址であり、さらには、通称「よろい墓」と呼ばれている板碑型五輪塔の存在もしかりである。

米多比城址は上米多比竜海寺の背後の山の頂上部に広がる米多比城と、須賀神社一帯に初めに造られたとされる米多比里城をつなぐ尾根を合わせて指す。

山裾の一帯には、ナギノ・先城倉(古くは千丈倉とも)・薬院等の小字が残る。居館址の周囲には外敵の侵入を防ぐための土塁や堀切(尾根を横切るように掘られた大溝)、畝状堅堀(斜面に対して上下方向に長く掘られた溝を複数並べて掘ったもの)などの痕跡が残っており、城の構造からみて当時の高い軍事技術を有していたと評価されている。

(参考文献)

中西義昌編『歴史資料としての戦国期城郭』

地域資料叢書5 二〇〇一年

古賀市教育委員会編『古賀風土記』で「よろい墓」と称される板碑型五輪塔は、米多比城址と向かい合う小高い山裾の雑木林の中、お椀型地形の端に二基据えられているが、これは、福津市舍利蔵の米多比氏の古墓とされる五輪塔と同様のつくりの供

養塔だと思われ、両五輪塔については、古賀郷土史研究会土師武顧問の調査報告がある。(本会通信第十二号 令和三年十一月十五日発行)

氏は両五輪塔の構造的特徴から両者は同型のものであると判断され、舍利蔵は米多比村の一部であった時代もあつて大内系米多比氏にゆかりの地であること、薦野・米多比両氏(丹墾一族)の氏神である天降神社の梵鐘との関係から、米多比氏ゆかりの五輪塔としての伝承の正しさを述べられている。さらに、大友系大内系と二派に分かれていた米多比氏が立花山城督戸次道雪の下にともに従い、米多比鎮久が天正十五(一五八七)年立花宗茂に従って柳川移住した際に、両家の先祖供養のために建てたとも想像されると結ばれている。

思えば、この「先祖記」「供養帳」を保管される村山家現当主のご母堂様が、生前「米多比の殿様夫妻のお墓と伝えられ、嫁いで以来ずっと欠かさずお守りしてきた」と話されたことも私の脳裏で重なり合う。



米多比鎮久年表

道雪・宗茂等関連人物の動向も一部併記

元号	西暦	年齢	事項
天文二〇	一五五一	一	米多比鎮久誕生(幼名米王丸)略系稿※一五六五(永禄八)説も
弘治三	一五五七	七	鎮久の祖父米多比元美戦死
永禄七	一五六四	一四	薦野増時の父鎮房・鎮久の父大宇謀殺される 鎮久が父の死で家督相続し 宗麟より御一字拝領鎮久(諱)と称す
永禄一〇	一五六七	一七	立花鑑載の命で宗像と戦う
永禄一一	一五六八	一八	鑑載謀叛 戸次鑑連、立花城攻略し鑑載敗死
永禄一二	一五六九	一九	毛利立花城包囲 閏千代誕生
元亀二	一五七一	二二	鑑連 立花西城督に就任し家督を継承する
天正二	一五七四	二四	鑑連 入道し道雪と号す
天正三	一五七五	二五	閏千代 立花城督就任
天正六	一五七八	二九	耳川合戦
天正八	一五八〇	三〇	鎮久 新藏人に任ぜられる
天正九	一五八一	三一	高橋統虎、道雪と養子縁組し閏千代と結婚 戸次統虎となる 鎮久 潤野原・小金原合戦等で武勲を立て道雪の養女吉子と結婚
天正二三	一五八五	三五	道雪筑後北野の陣中で病没 統虎立花城督就任
天正二四	一五八六	三六	岩屋城落城
天正二五	一五八七	三七	宗茂(以降統虎を宗茂に表記)が筑後四郡十三万石余を与えられ柳川転封 鎮久 同道して鷹尾城番家老に就任

元号	西暦	年齢	事項
文禄元	一五九二	四二	文禄の役で朝鮮出兵 戦功有て文禄三年冬帰朝
文禄五	一五九六	四六	立花賜姓三五〇〇石を知行 三左衛門鎮久と名乗る
慶長二	一五九七	四七	慶長の役で再度朝鮮出兵、虎退治(大虎・小虎の鉄砲) 翌三年冬、総軍とともに帰朝
慶長三	一五九八	四八	豊臣秀吉没
慶長五	一六〇〇	五〇	関ヶ原合戦 宗茂は恩顧にたえ豊臣勢で参戦し敗戦・改易されて浪人となる 鎮久 鷹尾城在にて敗戦 熊本に赴き加藤清正から三〇〇〇石の扶助を受ける
慶長七	一六〇二	五二	閏千代姫病没 鎮久は岳母である道雪未亡人(仁志姫)に孝養を尽す
慶長八	一六〇三	五三	宗茂 江戸に下向し翌年江戸城に召し出される
慶長一一	一六〇六	五六	宗茂 奥州棚倉一万石大名になる 鎮久は鎮信・茂成を棚倉へ赴任奉仕させる
慶長一六	一六一一	六一	加藤清正没
元和二	一六一六	六六	仁志姫没
元和四	一六一八	六八	肥後加藤家の牛方馬方騒動で正次派が敗訴 鎮久親子は棚倉立花家へお預けとなる
元和七	一六二二	七一	宗茂 柳川再入城し旧領復帰 鎮久父子は立花家へ帰参する
寛永元	一六二四	七四	鎮久隠居 隠居料三〇〇石 鎮信家督相続三〇〇〇石、大組頭となる
寛永一〇	一六三三	八三	鎮久没(九月十一日八十三歳) 翌年夫人吉子没(墓所柳川良清寺)

## 牛方馬方騒動と

### 米多比鎮久の御預け

#### 飯島勇一郎

#### 「牛方馬方騒動」

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原合戦後に柳川藩が改易されると、立花宗茂と家臣たちは浪牢の身となりました。しかし彼らを物心両面から支援したのは肥後の加藤清正で、領内に宗茂の家臣たち二百人以上の家臣を迎え入れ、また立花宗茂の身上回復が出来るように徳川家康に働きかけていました。翌慶長六年、宗茂は立花家を再興するため僅かな供を連れて京都へ旅立っていきました。肥後藩には旧柳川家臣達のまとめ役として旧重臣の小野鎮幸、米多比鎮久を残していきました。

関ヶ原合戦から十一年後の慶長十六年（一六一一）三月、加藤清正は徳川家康と豊臣秀頼の二条城の会見に立ち合い、その帰りの船で倒れ、六月に熊本城で死去しました。死因は脳溢血という。跡継ぎの加藤虎藤（後の忠広）はまだ十歳の

若さということ、徳川幕府は虎藤の家督相続に対し後見人として藤堂高虎を指名し、家老による合議制を求め、さらに幕府は藩政まで介入し、家老の加藤正方を内牧城代から麦島城代（後の八代城）に取りたて、筆頭家老であった加藤正次を三千石に格下げにしました。この事から藩内では加藤正方派と加藤正次派の二派による派閥争いが始まりました。旧柳川藩の家臣達は柳川藩の改易以来、加藤正次の世話を受けていた関係で加藤正次派に属していたと思われれます。

加藤清正の死去より七年後の元和四年（一六一八）に加藤正方派の下津棒庵（清正の家臣）により「加藤正次派の者たちが好き勝手に振舞っている」と藩主忠広に報告したことから、加藤正次も負けずに「加藤正方派の者が横暴をしている」と藩主へ訴えたことから、両派の派閥争いは主導権争いとなってきました。この騒動では加藤正方の官名である「右馬允」から「馬方」と呼び、加藤正次を

「牛方」と呼んで二人を「あだ名」したこと、ことから「牛方馬方騒動」と呼ばれるようになった。ところが、この肥後藩内騒動を藩主の加藤忠広は解決することが出来ず、肥後藩の内紛が江戸幕府に露見する事になったのです。

江戸幕府は肥後藩の内紛を裁判するた、藩主加藤忠広と両派の關係者を江戸に召集し、將軍秀忠自らが裁定するといふ異例の裁判になりました。この裁判中に加藤正次派（牛方派）が「大阪の陣で豊臣方に内通し、秘かに豊臣方への兵糧の扶助を行った」という疑惑が明るみに出たことで、將軍秀忠の勘氣にふれ、加藤正次派は敗訴してしまいました。その結果、正次派の關係者は処分される事になり、切腹が七人、他藩への「御預け」が二十六人と加藤家の重臣たちの半数が処分を受けた大きな事件になりました。

この「牛方馬方騒動」には米多比鎮久とその子達も加藤正次派の關係者の一人

として江戸に召集されていきました。すでに小野鎮幸は慶長十四年に死去（六二歳）しており、当時の旧柳川家臣のまとめ役は米多比鎮久と思われ、加藤正次派の關係者の一人として責任が問われたと考えられます。裁判の結果、加藤正次派が敗訴したことで米多比鎮久親子への処分が決まり、奥州棚倉の立花家へ「御預け」と決定したのです。通常このような騒動が起きれば「加藤家はお家断絶」という処分になるのですが、藩主加藤忠広の責任は不問とされました。それは加藤忠広がこの騒動に関わっていないとされていますが、忠広の正室が將軍秀忠の養女であったことが配慮されたのではないかと云われています。

### 「米多比鎮久、奥州棚倉藩へ御預け」

元和四年、「牛方馬方騒動」で加藤正次派が敗訴すると米多比鎮久親子は奥州棚倉の立花家へ「御預け」となり、米多比親子は肥後に帰ることなくすぐに江戸から奥州棚倉へと行くことになりました。

奥州棚倉には慶長六年に立花家再興のため京都に旅立った立花宗茂が三万石の名になっていました。宗茂は、慶長十一年（一六〇六）に將軍秀忠から奥州棚倉に一万石の領地を与えられ、その後三万石に増えられました。



米多比鎮久（米多比家所蔵）

江戸後期に成立した「向山誠齋丙午雜記」があります。この「雜記」は江戸幕府に保存されていた触書や行政史料などを収録したもので、その中に「元和四年八月八日公事落着の時、方々御預けの覚」という項目があり、「牛方馬方騒動」事件の事が書かれています。そこには米多比鎮久親子が「御預け」になった状況が書

かれています。記録には「筑後柳川立花飛驒守様へ、同立花三左衛門（鎮久）、同子主馬」とあり、「江戸へ証人に参り居り候ゆえ、江戸より直に御預け」と米多比親子の状況を伝えています。後年の編纂史料のためか、元和四年当時の立花宗茂を「筑後柳川立花飛驒守様」と間違っ

て記しているようです。  
元和四年八月十九日付の立花宗茂宛に出された「米多比親子の処分について」老中の連署奉書があります。書状には「急度申し入れ候、よって加藤肥後守殿内立花三左衛門尉ならびに子ども式人、貴殿へ御預け候間、御請け取り候て、召し置かるべく候、恐々謹言」とあり安藤対馬守重信、土井大炊頭利勝、本多上野介正純、酒井雅楽助忠世と四人の老中が米多比鎮久親子の「公示落着」を連絡しています。この「公示落着」については、立花宗茂と米多比鎮久の旧縁が配慮されたことで、立花家への「御預け」が決定したと考えられています。

立花宗茂は2年前の元和二年（一六一六）の頃に、將軍秀忠の「御咄衆」となり、將軍秀忠に近仕していました。そのため幕府内での存在は重きをなしていたようで、情報にも早かったようです。江戸に居た立花宗茂は肥後藩での家中騒動や米多比鎮久についての情報を早く知っていたようです。そのため、立花宗茂は八月八日の幕府の「公示落着」以前に情報を知っていたようで、公示前の八月五日付の書状で肥後の由布惟貞に書状を送っています。「同名三左衛門尉・主馬・安

太夫妻子の儀、残らずあい渡され候旨、この方においても公儀あい済み候」と書き送っています。さらに追って書きには「采女事、まず忍び候て迎えとしてまかり下り候、采女も子どもこれある由候、三左衛門内儀同前にまかり越候様に候」と書き送っています。そのため立花宗茂は米多比鎮久の三男采女（茂成）に、肥後にいる米多比鎮久親子の妻子を迎えるため肥後に下向させています。文中の主馬・安太夫は米多比鎮久の嫡男鎮信と次

男小田部家を継ぐ鎮教で采女は三男の茂成になります。しかし実際に奥州棚倉に「御預け」になったのは米多比鎮久と嫡男鎮信の二人だけだったようです。

米多比親子が「御預け」となって、三年後の元和七年（一六二二）二月に、立花宗茂は徳川幕府から柳川に十一万石の領地が与えられ、奇跡の柳川復帰が実現しました。そのため米多比鎮久親子も再び柳川に帰ることが出来ました。米多比鎮久の奥州棚倉への「御預け」は米多比家にとって極秘にされていたようで、系図には立花宗茂が再封後に呼ばれて柳川に帰ったように書かれています。もし立花宗茂が柳川に復帰することがなかったら、米多比鎮久親子は宗茂と共に奥州棚倉で一生を終えたかもしれませぬ。

#### 参考文献

- 「八代市史」第三卷 八代市教育委員会
- 「近世大名立花家」中野等
- 「九州戦国史と立花宗茂」三池淳正

## コラム

### 肥後藩での米多比鎮久の邸宅

柳川藩が改易となり、柳川家臣達二百人が肥後の地で居住していました。宗茂の夫人閨千代が病死すると、腹赤村（熊本県長洲町）に居た義母の宝樹院（仁志姫）を鎮久の邸宅に引き取ったとある。鎮久は仁志姫の連れ子の吉子の婿であった。

「角川日本地名大辞典」に柳川小路の事が書かれ、江戸期も明治十二年の町名とある。武家地の一つで「柳川丁」と称したとある。「肥後国誌」に元和六年に立花宗茂が復帰すると柳川衆は加藤家を辞して柳川に帰ったという。以後も侍屋敷跡地として柳川小路の名は継承され、明治十二年に京町本庁と京町一・二丁の一部になっていている。現在市営バス停留場に「京町柳川」の名を残しています。



## 戦国古賀の名将

### 軍師薦野増時の生涯

#### 顧問 土師 武

#### 「三つの転機」

戦国時代の古賀を代表する名将薦野増時の生涯は、四十五歳までの立花山城時代、その後五十九歳までの柳川時代、さらに六十歳から八十一歳の長寿で死ぬまでの黒田藩時代の三つに大別される。立花山時代は大友宗麟の重臣で立花山城主となる戸次道雪との出会い、抜擢により武将として頭角を現し毛利、宗像、秋月、原田などとの合戦で軍功を重ねる。道雪没後は後継の立花宗茂を助け、島津の大軍が包囲する立花城の危機を救う。その頃、黒田如水と出会い、如水との運命的な出会いは増時に人生最大の転機をもたらす。

#### 「軍師とは」

柳川時代は政治家として朝鮮出兵の七年間は柳川城を守り、関ヶ原合戦では豊臣方の不利を諫言するも容れられず、西

軍敗北後の柳川籠城戦では如水の計らいにより加藤清正と単独交渉にあたり、大軍包囲の柳川城を開城に導く。戦後、かねての縁で黒田家臣となり、孫の代には一万石の大老となり黒田姓を授かる。増時の人生は、非常時の軍師として先を読み、義を重んじ、道雪には親に対する子の如く仕え、宗茂には子に対する父の如く支えた。以外な一面として戦乱で焼けた博多復興の都市計画づくりに参画する傍ら、花を愛し鈴虫の音色を楽しむなど多彩な武将であり、風流人でもあった。以下、軍師としての活躍を具体的に述べる。軍師とはどんな役割の武将なのか。広辞苑には「軍機をつかさどり謀略をめぐらすひと」とあるが、増時は敵をだまし討ちするような謀略が得意な武将ではなく、味方の犠牲を少なく、戦わずに勝てることをめざすという知略、交渉力に勝れた軍師といえる。こうした軍師像は天下人豊臣秀吉の軍師だった黒田官兵衛孝高（如水）の感化かも知れない。道雪や宗茂から軍師に任命されたわけではな

く、本人も軍師を名乗ったことはないが、立花山城と柳川城の危機を二度も救うことに貢献した働きには軍師の面目躍如たるものがある。

#### 「黒田如水との出会い」

道雪が筑後の戦場で病死したあと、十九歳で立花山城主になった宗茂は迫り来る島津の大軍を前に豊臣秀吉への救援要請をめぐすが自分は動けず、使者の適任者もおらず、悩んだ末に増時を名代に指名し大役を一任する。宗茂の自筆書状によると、この時の任務は秀吉の検使役として先発する黒田官兵衛（如水）と宮木入道（長盛）の二人を途中まで出迎えることだったが、二人ともまだ出発しておらず、増時は自分の判断で大阪まで行き、初めて如水に出会う。お互い通じ合うものがあり、如水の指南は懇切丁寧で、秀吉へのみやげを聞かれ、持参の黒木綿二十反と告げると「宗茂の献上品には軽すぎる」とアドバイスがあり急拠、絹織物を購入した。黒木綿の方は途中で出会う





必ず時分を以て御志を顕わし申すべく候。  
恐々謹言

十一月二十四日（天正九年） 統虎（花押）

道雪（花押）

薦野三河守（増時）殿

### 戦国余話

#### 岩屋城の高橋紹運戦死について

##### 薦野増時の証言

元和七年（一六二一）二十年ぶり柳川に復帰した立花宗茂の側近、浅川伝右衛門安和が宗茂や古老の話を記録した「浅川聞書」に薦野玄賀（増時）が登場する。当時、柳川藩では、天正十四年（一五八六）七月二十七日、宗茂の父高橋紹運の岩屋城がなぜわずか一日で落城したのかと疑問視する向きがあり、復活祝いの挨拶に、転職先の黒田藩から柳川を訪れた薦野増時は伝右衛門の質問に次のように答えた。「岩屋の守りは堅固で二、三日では落城しないが、紹運様は殿様（宗茂）

の身を案じて死に急いだ。その訳は、籠城が長引けば宗茂は必ず後詰めに出陣し島津に夜討を仕掛ける。そのスキに立花山城は秋月種実に攻められ、宗茂も島津に討たれると、すべては徒事になる。城兵には討ち死にを下知し、紹運様も一日の戦いで死を急いだ」（意識）増時は当時、八十歳近い古老で、「聞書」に五、六箇所に登場、昔話を語る。増時の話では紹運の死は宗茂を助けるため覚悟の犠牲だったことになる。（土師 武）

#### 薦野増時、自筆の署名と花押



### コラム

#### 薦野増時像について



薦野増時像（妙典寺所蔵）

薦野増時没後、三百年遠忌の際に先々の住職が博多人形作家、白水六三郎さんに依頼して作成したものです。薦野増時はこの妙典寺の土地を寄進しており、この寺で永代供養を行っています。このように語ってくれたのは、像が安置されている妙典寺の第四十三世住職、本田栄秀さん。妙典寺（福岡市博多区）では増時のことを「弾正様」と呼んで、親しんでいるそうです。

薦野増時 年表

元号	西暦	年齢	事項
天文十二	一五四三	一	十一月十一日誕生、幼名平六兵衛、元服し弥十郎(戸次道雪に仕え左近大夫、天正七年頃から三河守、道雪死後出家し賢賀を名乗る)
永禄三	一五六〇	一八	臼杵安房守(鑑続)に同陣、軍忠に励み大友義鎮(宗麟)より弥十郎へ感状
永禄四	一五六一	一九	宗像・許斐の里城を攻め落とし義鎮より弥十郎へ感状、この頃立花山城を守り籠城
永禄十	一五六七	二五	宗像軍が薦野の宅所まで攻め入り敵数輩討ち取り弥十郎へ宗麟感状。立花宗茂誕生
永禄一一	一五六八	二六	立花鑑載再び謀反、増時父河内守鎮房らを謀殺、鑑載戦死
永禄一二	一五六九	二七	大友・毛利の大軍立花山会戦、増時は立花山を守り、のち下城、毛利軍撤退
元龜二	一五七一	二九	戸次道雪が立花山城主、増時を養子に望むも辞退
天正三	一五七五	三三	道雪はひとり娘閨千代七歳に城主を譲る

元号	西暦	年齢	事項
天正十三	一五八五	四三	増時は正月の年賀に鯉二尾を道雪に贈る。道雪留守の立花山で桜井中務・治部兄弟が秋月に通じ謀反発覚、増時家臣の安部弥太兵衛、東郷三九郎が討ち果たす。増時から届いた徳利(酒)と肴の札を述べた七月二十九日付書状が道雪の絶筆となり、九月十一日、七十三歳で道雪陣没。大友義統より三河守増時へ見舞いの書状から三河守、道雪死後出家し賢賀を名乗る)
天正十四	一五八六	四四	三河入道(増時)は統虎名代として上阪、黒田官兵衛(如水)の知遇を得て豊臣秀吉に謁見、救援要請。七月、岩屋城落城、統虎の実父高橋紹運玉碎、三十九歳。島津の大軍が立花山を包囲、八月、救援軍出動で島津撤退。立花軍追撃、高鳥居城の星野兄弟を討ち増時らに統虎感状。宗像氏貞死、四十二歳
天正十五	一五八七	四五	五月、島津降伏、大友宗麟死、五十八歳。統虎は三河入道賢賀(増時)の労苦に報い立花姓を与え同族扱い。六月、統虎の柳川十三万石采転に伴い、増時は城島城代、所領百三十町の筆頭家老朝鮮出兵の七年間、増時は柳川城を守る(文禄慶長の役)
慶長三	一五九八	五六	八月、豊臣秀吉死、六十三歳、日本軍朝鮮より撤退
慶長五	一六〇〇	五八	九月、関ヶ原の戦い。賢賀(増時)は東軍優位とみて出兵見合わせを諫言。統虎は西軍につき敗北、柳川に籠城、鍋島軍と激戦。黒田如水は重傷の成家見舞いに古酒を送り、増時一人を加藤清正陣所に呼び交渉、柳川開城に導く。統虎改易

天正六	一五七八	三六	大友軍が日向の耳川で島津に大敗、筑前国人一斉蜂起、立花山は敵に囲まれ七年間苦戦
天正七	一五七九	三七	鳥飼で原田軍と戦い増時家臣東郷三九郎が分捕りの手柄、道雪より左近大夫増時へ感状。その九日後、大宰府観世音寺口で秋月軍と戦い増時・成家父子に道雪感状。生ノ松原で原田軍と戦い成家と増時の弟勘解由丞(丹半左衛門親次)へ大友義統より感状。糸島の柑子岳落城
天正八	一五八〇	三八	道雪と高橋紹運の連合軍が徳波郡石坂(八木山峠麓)で秋月と合戦。統虎(宗茂)は父紹運に従い十四歳で初陣、敵將堀江備前を討ち取る。早良の安楽平落城
天正九	一五八一	三九	道雪は岩屋城主高橋紹運の長男統虎(宗茂)を養子に迎え閩千代と結婚。十一月六日、潤野原(飯塚)で秋月と戦い東郷三九郎が敵將を討ち統虎・道雪連署で三九郎と三河守増時に感状。その七日後の十一月十三日、宗像・秋月・麻生連合軍と清水原(小金原、宮若)で激戦、増時は敵將深川九郎を討ち取り統虎・道雪連署の感状
天正十	一五八二	四〇	三月、宗像・吉原で宗像氏貞軍と戦い増時家来二人重傷、統虎・道雪連署の感状。四月、岩門庄久辺野(那珂川)で原田軍と戦う。本能寺の変
天正十一	一五八三	四一	この頃、那珂川の鷲岳も落城。大友系五城のうち立花山と岩屋城孤立
天正十二	一五八四	四二	三月、龍造寺隆信戦死、五十六歳。八月、道雪と高橋紹運は筑後に越年遠征。増時は統虎後見で立花山城番。筑後には成家、勘解由丞ほか増時名代で安部六弥太が出陣、戦死。成家と勘解由丞は耳納山の戦いで負傷、大友義統感状

慶長六	一六〇一	五九	賢賀・成家父子は黒田如水・長政の誘いで黒田家臣。賢賀に薦野村六百石と秋月代官料千五百石、成家に四千石
慶長七	一六〇二	六〇	十月、統虎正室閩千代肥後で死、三十四歳
慶長九	一六〇四	六二	三月、黒田如水死、五十九歳
慶長十五	一六一〇	六八	統虎は改名を重ね四十四歳で宗茂を名乗る
慶長二十一	一六一五	七三	五月、大坂夏の陣、豊臣滅亡
元和二	一六一六	七四	四月、徳川家康死、七十五歳。五月、道雪後室(宝樹院)肥後で死
元和六	一六二〇	七八	六月、成家は大坂城工事で病死、五十四歳、息子雅楽介も帰途病死。宗茂は五十四歳で二十年ぶり柳川再封、十一万石
元和九	一六二三	八一	二月十日、賢賀病死、養徳山の薦野墓地と梅岳寺の道雪墓横に分骨、博多妙典寺を菩提寺に。八月黒田長政死、五十六歳
寛永十九	一六四二		十一月、立花宗茂死、七十六歳

(注)薦野家譜に引用の古文書などを参考に作成、令和四年、土師武

## 花押で読み解く

左近大夫（増時）文書を検証する

Ⅱ余話 薦野・米多比の宅所襲われるⅡ

顧問 植田謙一

戦国時代の文書は無年号（作成年次がなく月日のみ記載）のものが多く年次を判定するのが難しい。最近では戦国武将の花押形の研究が進んでおり、その研究成果を踏まえて無年号文書の年次の推定をし、またその結果、合戦の年月日を特定する有力な手掛かりとなり通説を覆すこともあるので面白い。

薦野増時は、天文12年（1543）11月11日生、初名平六兵衛、又弥十郎、又左近太夫、後、参河守と名を変える。（丹治姓薦野氏系）

薦野家の文書は、「黒田（立花・薦野・丹治）家文書（福岡県立図書館）（以下、黒田文書と略す）」と薦野家譜に登載されている文書群（以下、家譜文書と略す）がある。家譜文書は当時は存在したのであろうが、現在は失われた文書が多い。又、写しであ

るため花押は存在しない。

黒田文書には約30の戦国時代の増時らの文書があるがほとんどが無年号である。この中に増時の一時期の名乗りである「左近大夫」宛の文書が三通ある。もちろん、これらも無年号である。発給者は二通が戸次道雪、一通が大友義統である。次の二つの花押研究論文をもとに検証してみたい。

・「戸次道雪の花押について」

山田邦明（以下、山田と略す）

・戦国期大友氏の花押・印章編年考

福川一徳（以下、福川と略す）

一、左近大夫宛、戸次道雪発給文書

①昨日廿七宰府於観世音寺口、増時僕從神五兵衛、碎手被疵之由候、感悦無極候、必可達 上聞候、為愚老茂、以時分何様賀之可申候、恐々謹言

七月廿八日 道雪（花押）

薦野左近大夫殿

②去十八於鳥飼村、御被官東郷三九郎、碎手分捕之由候、感悦無極候、彼方之儀、毎々励粉骨之由候、心懸之次第難紙面候、

連々増時無御油断故候、必可達 上聞候、

為愚老茂、以時分何様賀之可申候、

恐々謹言

七月廿八日 道雪（花押）

薦野左近大夫殿

二、戸次道雪の花押

長年にわたり活躍を続けた道雪の關係文書はきわめて多く、花押のよくわかる発給文書だけで百五十点に及ぶ。これらの文書のうち年号の明記されているものはごくわずかであり、ほとんどが無年号文書である、と山田はいう。山田はこれらを丁寧・緻密に分析し、大きく11種類、C3形はさらに7種類に小分類している。鑑連時代の花押はA形、B1とB5形、道雪時代の花押はC1とC5形である。

三、①文書

イ この文書から気づくこと。

・7月27日に観世音寺で合戦があった。  
・増時の僕從神五兵衛（神五・吉徳と読む

説もある)がこの合戦で負傷した。

・増時が実名(諱、いみな)であり、左近大夫が通称(仮名、けみょう)である。

・「必可達上聞候」、「為愚老茂」から、道雪は同陣主(\*)であり左近大夫は大友家の与力であることがわかる。同陣主は同陣者左近大夫の戦功を大友家に上申し、大友家から恩賞などが行われるよう努める責任がある。

\*同陣については「永禄末期大友氏の軍事組織 木村忠夫」

・道雪の単独署名。宗茂・道雪の連署ではない。

#### ロ)山田花押について(P66の注1参照)

・道雪時代はC形花押で7種類ある。

署名の下の菱形部分とその左下の逆N字形との接点、逆N字形の形状、菱形の中の二本の平行線の間隔の三点で区別する。しかし、判別するのは容易でない。

#### ハ)①文書の花押について(注2参照)

山田は、C3形は逆N字形が他の形に比べ極めて直線的であるとして、①文書をC3形としている。



注2【C3形】

・山田はC3形の使用時期について言う。C2形からC3形への移行時期は、天正8年2月から4月初め、C3形からC4形の移行時期は天正8年7月末から9月の間、したがってC3形の使用時期は天正8年の内の数か月だけという極めて短い期間のみ使用されたと推定できる。

・山田は道雪の単独署名にも注目する。道雪は天正九年に高橋紹運の子統虎を養子とし、同年十一月六日の潤野原合戦(\*)の時は道雪と統虎が連名で感状を発給しており、これ以後家臣への感状は両者の連名である。

\*潤野合戦は大友義統軍忠一見状「立花文書33(有年号文書)」で年号が特

定できる。

・さらに、山田はいう。有年号の天正八年十月二十四日の五条鎮定宛の起請文が「C4形」に移行し、潤野原合戦も「C4形」である。

・よって①文書の発給年は天正八年七月二十八日、観世音寺口の戦いは同年七月二十七日と推定できる。

#### 二)諸説

観世音口の戦いの年月日は諸説ある。

・薦野家譜二巻では、天正7年7月27日

・福岡市史(資料編中世1)では、発給月

日横に(天正9年カ)と注記

・柳川の歴史4(年表)は、天正8年7月

27日

・筑前戦国史(吉永正春)は、本文は天正7年7月27日、年表では天正9年7月とする。両者は別の戦いか。

#### 四、P62の②文書

イ)この文書から気づくこと。

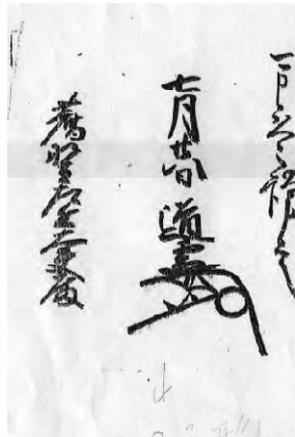
・鳥飼での戦いは7月18日である。

・被官東郷三九郎が負傷

・薦野、米多比各軍団は、いずれも親類・郎従・僕従の編成である。

\*天正9年11月6日、穂波表合戦の大友義統軍忠一見状には、薦野勘解由允と郎従7人、米多比の郎従4人、同年11月13日、山東宗像表合戦の軍忠一見状には薦野三河守・薦野弥介と郎従6人、米多比新蔵人と郎従5人、僕従1人が登載されている。

・他は①文書と同じであるが、②文書の方が丁重である。左近大夫本人の功績も併せて賞している。



注3 【C3形】

ロ) ②文書の花押について(注3参照)

花押は①文書と同じくC3形である。C

3は山田によれば天正8年のみの使用

に限定されている。従って②文書は天正8年7月28日に発給、鳥飼村での戦いは同年7月18日のことである。

#### ハ) 米多比文書

鳥飼村の戦いに関し、米多比五良次郎(鎮久)宛、八月二日付けの道雪発給文書がある。花押はC3形である。書式は①文書とほぼ同形式である。

#### 二) 諸説

・薦野家譜二巻では鳥飼村での戦いは天正7年

・福岡市史(資料編中世1)では、発給月日横に(天正9年力)と注記

・柳川の歴史4の年表では、天正8年7月18日 龍造寺勢と早良郡鳥飼で合戦

#### 五、左近大夫宛、大友義統発給文書

③今度忠意之覚悟乍案中感悦候、弥可被励貞心事肝要候、委細猶寿庵可申候、恐々謹言

三月十三日 義統 (花押)

薦野左近大夫殿

#### 六、③文書

イ) この文書から気づくこと。

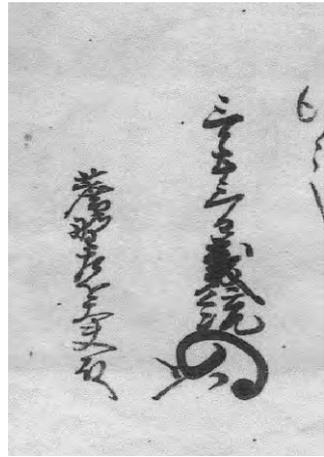
・寿庵(寿房と読む説もある)は使僧か。使僧を介していることは丁重な連絡法であり、敬意のあらわれである。寿庵は管見の限り見いだせない。  
宗麟の田尻氏宛の感状に「寿元法印(真光寺)」がいる。参考のためにあげておく。

#### ロ) 義統の花押について(P66の注4参照)

大友氏の花押については多くの研究がなされているが、今回は福川をもとに考えたい。家督相続した元龜4年から天正15年までの15年間に用いた署名は「義統」ただ一つであったが、花押・印章の方は七種十三型を使用している。義鎮から受け継いだ4型を除くと、ほとんど毎年のように花押・印章を改変しているという。

#### ハ) ③文書の花押(注5参照)

③文書の花押は「4型」である。福川によればこの型は天正3年5月から天正7年4月まで使用されている。



注5【4型】

## 二) 米多比文書

米多比五郎次郎宛、三月十三日付、義統発給文書があり、同一文言であり、花押は同じく4型である。

## ホ) 諸説

- ・薦野家譜二巻、耳川の戦い(天正6年11月)の後の天正7年の記事の直後にこの③文書が記載されている。
- ・福岡市史では月日の横に(天正七年カ)と傍注されている。

## へ) 結論

合戦名などの具体的事実等は記されておらず、使僧と思われる寿庵についても判断の材料は持たない。文意から耳川の戦いの後にふさわしい、と判断し「天正七年カ」としたい。

## 七、増時の名乗りについて

米多比鎮久は大友家から次の通り偏諱を拝領しているが増時ほどの人物にその史実、資料が見いだせない。増時七不思議のひとつである。

### ・「鎮久」

「祖父已來兩代戦死之段、(略) 仍一字之事、鎮久進之候(略)」(米多比五郎次郎宛、宗麟発給、十一月廿五日付文書)

### ・「新蔵人」

「至立花暎遂在城(略) 仍任新蔵人候、(略)」(米多比五郎次郎宛、義統発給、二月二日付文書)

## 《弥十郎宛の文書》

次は薦野家譜に記載されている文書である。なお、花押不明であり、発給年次は「福岡市史資料編中世1」を援用させてもらう。

・薦野河内守宛、義鎮発給、九月廿九日(永禄四年カ)

「(略) 此節息弥十郎、従最前令籠城、忠

### 義之趣(略)」

・弥十郎宛、義鎮発給、閏三月朔日(永禄四年)

・弥十郎宛、義鎮発給、五月三日

・弥十郎宛、義鎮発給、七月廿九日、(永禄四年カ)

・弥十郎宛、宗麟発給、九月七日(永禄十年カ) (\*余話参照)

・弥十郎宛、宗麟発給、九月廿三日(元龜元年)

右史料よれば、永禄4年(1561)から元龜元年(1570)、増時19歳から28歳の間は弥十郎を名乗り、前述の通り天正7、8年、増時37、38歳の間は左近大夫を名乗ったといえるが、それら名乗りの始期・終期は本稿では詳らかにできない。

## 《余話》 薦野・米多比の宅所襲われる

右、弥十郎宛、宗麟発給、九月七日の文書と同文のものが米多比五郎次郎(鎮久)に発給されている。

(米多比鎮人文書)

『至今度宗像表動之刻、立花鑑載・怒留湯融泉被申談、別而被励軍忠之由候、殊其方至宅所、敵取懸候砌茂、被遂防戦、教輩被討果之段、其間候、従前々之忠義連続感悦無極候、必取静一廉可賀之趣、猶吉弘左近大夫可申候、恐々謹言』

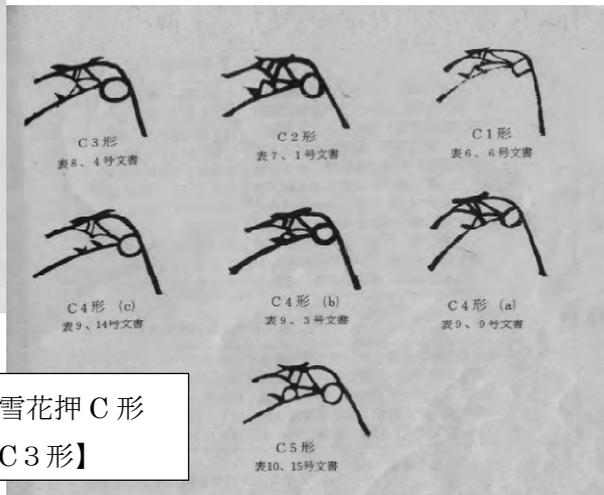
九月七日 宗麟（花押7の2\*）  
米多比五郎次郎殿

この米多比文書は花押が確認でき、文意から永禄10年のものと想定される。「其方宅所敵取懸候砌」とあり、宗像勢に薦野・米多比の本拠地まで攻め込まれていることがわかる。薦野・米多比両氏は宗像との境目に接する宅所に拠りながら、立花城への勤番も務め、秋月・原田・龍造寺にも対さなければならぬ。薦野、米多比の地は臨戦の日常であったであろう。また、薦野・米多比両氏は鑑載・融泉に同陣して戦っている。「木村忠夫」は言う。筑前北部において軍事権と所領打渡権を持っている鑑載・融泉に同陣し

た者へ吉弘左近大夫（鑑理）が申し次ぎをしているのは大友政権内における鑑載・融泉の力の弱さを年寄りの鑑理がカバーしていることを同陣者に知らせるためと考えられる、と。道雪と鑑載らとの違いが見える。

\*宗麟の花押も「福川」に詳しいが、ここでは省略する。

番号	花押	義統	（側田又吉）
3の1		義統 (天正3年正月22日)	(天正3年)正月22日 (朝足文書) →(天正3年)3月6日 (関文書)
3の2		義統 (天正3年3月15日)	(天正3年)3月15日 (長野文書) →(天正3年)3月24日 (問注所文書)
4		義統 (天正3年5月10日)	(天正3年)5月10日 (立花文書) →(天正7年)4月22日 (鹿子木文書)
5の1		義統 (天正7年5月28日)	天正7年5月28日 (問注所文書) →(天正7年)12月16日 (渡辺文書)
5の2		義統 (天正8年正月11日)	(天正8年)正月11日 (渡辺文書) →(天正9年)7月5日 (問注所文書)
5の3		義統 (天正9年8月13日)	天正9年8月13日 (問注所文書) →(天正10年)11月3日 (蒲池文書)
5の4		義統 (天正11年正月28日)	(天正11年)正月28日 (佐田文書) →(天正12年)11月20日 (中村文書)
6*		義統 (天正13年卯月26日)	(天正13年)卯月26日 (大津留文書) →(天正13年)9月25日 (五条家文書)
7の1		義統 (天正13年10月6日)	(天正13年)10月6日 (蒲池文書) →



注4 義統花押（部分）  
【4型】

注1 道雪花押C形  
【C3形】

## 鉄砲戦の先駆け

### 大友・毛利の立花山合戦

#### 顧問 土師 武

筑前戦国の永禄年間（一五五八〜一五七〇）は大友宗麟と毛利元就が覇権を争い、將軍足利義輝の仲介でいったん和睦するが、毛利が山陰の尼子氏を亡ぼすと再び九州に進出する。元就は筑前国人を調略で味方に引き入れ、永禄九年（一五六六）宝満の高橋鑑種をはじめ同十年には甘木の秋月種実、同十一年には立花山の立花鑑載らが相次いで大友に背き、いずれも戸次鑑連（道雪）ら大友軍に制圧されると、毛利の本隊が乗り出し立花山決戦となる。立花山は博多防衛に欠かせない重要拠点で、この山城の支配は筑前支配につながる。毛利軍は永禄十一年秋、七十三歳の元就と輝元の本陣は下関の長府におき、吉川元春、小早川隆景兄弟が率いる四万の大軍が関門を渡り豊前を平定、翌永禄十二年（一五六九）四月には現地勢を合わせ五〜六万の大軍が立花山

を包囲する。城を守る田北鑑益、臼杵進士兵衛、鶴原掃部介の三将はよく耐えたが閏五月三日落城する。圧勝の毛利は城兵を助け大友に引き渡すという余裕をみせる。毛利軍が渡海の頃、大友の主力は佐賀で竜造寺隆信と戦っており、急拠和睦して引き返すが出遅れ、五月から総攻撃を繰り返すも、そのつど撃退されて包囲網を破れず城を救えなかった。大友軍は四〜五万の兵、四十歳の宗麟の本陣は久留米の高良山。戸次道雪の一代記といえる立花記には「敵味方十万、九州分け目の戦い」と記され、さらに道雪のひとり娘闇千代への譲り状には「敵味方三十ヶ国」「分国残らず出陣」とある。全国から一旗組の浪人が出稼ぎに集まったことや宗麟が豊筑肥の六国から総動員したことを裏付ける。両軍合わせ十万もの大軍は九州の戦国史上、空前絶後で、合戦は五月から十月まで半年間に及ぶ。兵糧、武器の補給も前例のない大規模戦だった。中でも激戦となった五月十八日、道雪軍が毛利方の「長尾」という山城を攻めた



（鬼道雪と呼ばれた戸次道雪）

時の着到状（軍忠状）が立花文書に残る。長尾の地名は残らないが立花山主峰から多々良川方向へ続く長い尾根の峰と思われる。着到状は宗麟が「披見しおわんぬ」と確認の袖判（花押）を自筆で書き入れた書状で、敵の首を取った分捕十二、味方の戦死十五、負傷五十一人の名が並び、負傷者の名前の下にはどんな武器による傷か個別に記録されており、戦いの様子が再現できる。負傷を武器ごとに分けると、手火矢と呼ばれた火縄銃（鉄砲）十六、弓矢十五、石打（投石）十二、刀五、

槍三。鉄砲傷が最も多く全体の三割、銃・矢・石の飛び道具が84%を占め、この戦いが刀・槍による接近戦ではなく、一定の距離をおいた飛び道具戦で、主兵器に鉄砲が登場したことがわかる。

### 「主兵器に鉄砲が登場」

鉄砲が戦争の主役になるのは天正三年（一五七五）織田信長が武田勝頼の騎馬軍団を打ち破った長篠の戦いが始まりとされているが、永禄十二年の立花山合戦はその六年前のことで鉄砲が全国に先駆け、大規模戦の主兵器に登場したことは注目に値する。銃の数は軍事機密で確実にはわからないが慶長十二年（一六〇七）に書かれた九州軍記によると大友軍の銃は八百丁。当時の一次史料を捜すと、宗麟は長期戦半ばの八月十九日、一万田、田北、吉弘の重臣三人を担当奉行に「火薬を補充する。各部隊ごとに銃の筒数に応じて公平に配分せよ」（吉弘文書）と命じており、相当な銃の存在を裏付けける。毛利軍は大将輝元が四月二十九日、十二

人の銃手に「立花山では鉄砲の使い方が特に大事」と鉄砲の重要性を強調、五月十八日の激戦では、吉川元春軍だけで大友兵五十四人を射殺（吉川文書）している。さらに鉄砲隊同士の銃撃戦が行われたことが、宗麟の田原親宏あて感状に

「八月七日、遠矢原で打ち回しの時、戦死、負傷の着到状を披見、袖判を加えた」と軍功を賞し、毛利の史料にも同日、同じ場所で、大友兵多数を銃で射殺したと記録が残る。遠矢原について大分県先哲叢書の大友宗麟資料集第四巻では「遠天原」と誤読、場所もわからなかったが、筑前国続風土記拾遺の浜男村の項に「下原村と当村の堺、往還に在」とあり、浜男から下原にかけての平地と判明した。遠矢原の銃撃戦は新発見だった。近代戦の始まりといえる革命的な合戦にもかかわらず戦国史に登場しないのは、ローカルのいくさで中央政権に直結しなかったからだろう。天文十二年（一五四三）鉄砲伝来から二十六年、南蛮貿易で栄えた大友は新兵器の先進地で、国崩しと呼ば

れた大砲もいち早く入手したほど。毛利は石見銀山の資金力で堺などから買入れていた。銃は西から東へ西高東低の普及だった。

### 「宗麟の遠交近攻策」

鉄砲戦では近づくとも撃たれるので、にらみ合いの長期戦、消耗戦となる。優勢な毛利軍は立花山を落とせば大友軍が撤退すると見ていたが宗麟は引かず、長期戦に持ち込み時間をかせぎながら遠交近攻の調略を進める。まず毛利領の背後で尼子再興を企てる山中鹿之助や毛利に従わない備前の武将を支援、瀬戸内海の村上水軍の将村上武吉を毛利から離反させた上、大友に亡命していた大内義隆のいとこ大内輝弘に軍船を授け山口に攻め込ませた。輝弘は大内旧臣を集め山口を占領する。背後の本拠地を襲われ驚いた元就は吉川・小早川両将に総退却を命じ、厳寒の十月十五日夜、陣地を焼き払って一斉に軍を引き払い三日間かけて全軍関門を渡り輝弘軍討伐に向かう。追撃の大

友軍は三千四百九十一の首をあげたと立花記には書かれているが、毛利側史料には「若干の凍死」のみで真相は不明。立花山に残留した乃美宗勝、桂元重、坂元裕の三将は十一月、大友の将田北鑑益らに助けられ無事に引き返した。立花山落城のさい、毛利方に助けられた恩返しで、乱世とはいえ、こうした美談も伝えられる。結局、立花山決戦の勝敗は、前半は立花山城を攻め落とした毛利軍の勝利、後半は毛利を撤退に追い込んだ大友軍の勝利といえる。

### 「厳しい戦後処分」

戦後、毛利の後ろ楯を失った高橋鑑種、秋月種実、宗像氏貞らは降伏、助命され高橋は小倉に配転、秋月は本領安堵されるが、宗像への処分は厳しく西郷党主河津隆家の首に加え西郷党の三百町を取り上げ、氏貞の妹色姫は人質に。彼女はのち道雪側室となる。毛利元就は二年後の元亀二年（一五七一）七十五歳で死亡、その後の毛利は東から迫る織田信長軍と

の戦いに追われて九州に再進出の余力はなく、無敵の大友宗麟は以後約十年間、全盛時代を謳歌する。



道雪公まつりの時の鉄砲撃ち

### 戦国余話

#### 戸次道雪の以外な趣味

#### 館の庭で花を楽しむ

戦国乱世に生涯負け知らずの猛将とされる道雪の趣味はほとんど知られないが、立花山の館には花壇があり、花づくりを

楽しんでいたことを示す自筆書状が立花文書にあるので意識して紹介する。

「先ほど家臣の原尻左馬介をそちらに遣わした時、伝言を忘れたので飛脚便を出す。人の話では、今は花壇の時期だから去年と同じ場所に種を植え花を眺めたい。御秘蔵の種をこしは五箇所に植えたかったので戴きたい。去年は種が多過ぎ（失敗した）今年はよろしく頼む。二月二十八日、白軒雪、時まいる」

「白軒雪」は隣白軒道雪の略、「時」は薦野増時の略称。年号はないが道雪は天正二年（一五七四）六十二歳で出家している。晩年の書状。増時が大事にしている御秘蔵の種をもらいたいと頼んでいるわけで、花づくりは増時が先輩、道雪は後輩に当たり、立花山城主と家臣の主従関係が趣味の世界では逆転しており、親密な関係がうかがえて面白い。花の種類はわからないが、戦国武将に愛された朝顔ではないだろうか。（土師 武）

戸次道雪 関連年表

元号	西暦	年齢	事項
永正一〇	一五二一	一	豊後大野郡鎧ヶ岳城で五月一六日誕生、幼名八幡丸
大永六	一五二六	一四	豊前馬ヶ岳で大内勢と戦う。初陣、戸次の家督相続、鑑連
享祿三	一五三〇	一八	大友宗麟誕生
天文四	一五三五	二三	肥後に出陣
天文一九	一五五〇	三八	大友二階崩れの変、大友義鑑横死、入田親実の娘波津姫と離別、その後一八年間再婚せず
天文二〇	一五五一	三九	陶晴賢が大内義隆を殺害
天文二三	一五五四	四二	豊前門司城で中国勢と戦う
弘治三	一五五七	四五	戸次鑑連、吉弘鑑理、臼杵鑑速の三将筑前に出陣、古処山の秋月文種自殺、勝尾城の筑紫惟門逃亡、高祖城の原田隆種降伏。筑前を平定
永祿二	一五五九	四七	大友宗麟が筑前守護、九州探題
永祿三	一五六〇	四八	桶狭間の戦い
永祿四	一五六一	四九	大友加判衆に就任、一〇年間に在任、川中島の戦い

元号	西暦	年齢	事項
天正六	一五七八	六六	十一月、日向高城、耳川の戦い、大友大敗、龍造寺隆信が筑後侵入
天正七	一五七九	六七	秋月種実、原田隆種、筑紫広門、宗像氏貞ら一斉蜂起、立花山など攻撃、糸島の柑子岳落城。龍造寺軍筑前侵入
天正八	一五八〇	六八	二月、豊後の諸將に檄文を送り、結束と奮起を促す
天正九	一五八一	六九	九月、高橋統虎を閩千代の婿養子に。十一月六日、潤野原合戦、統虎初陣、十一月十三日、小金原合戦
天正一〇	一五八二	七〇	宗像の許斐城を攻め落とす。六月、本能寺の変、織田信長死四九歳。十一月、統虎立花姓を継ぐ
天正一二	一五八四	七二	三月、龍造寺隆信敗死五四歳。色姫死三八歳、八月、高橋紹運と筑後に出陣
天正一三	一五八五	七三	筑後をほぼ平定、九月十一日、北野の陣中で病死、七三歳
天正一四	一五八六		七月、岩屋落城、紹運玉碎三九歳。宗像氏貞死四二歳
天正一五	一五八七		五月、島津降伏。宗麟死五八歳、六月、立花統虎、柳川で十三万石の独立大名
慶長三	一五九八		八月、豊臣秀吉死六三歳
慶長五	一六〇〇		関ヶ原の戦い、立花改易
慶長七	一六〇二		十月、閩千代肥後で死三四歳

永禄五	一五六二	五〇	宗麟出家、鑑連ら宇佐八幡に戦勝祈願
永禄六	一五六三	五一	將軍義輝、鑑連に大友・毛利和睦のため宗麟に意見を促す御内書を遣わす
永禄七	一五六四	五二	大友・毛利和睦、毛利軍豊前から撤退
永禄九	一五六六	五四	宝満城の高橋鑑種謀反、毛利元就が尼子の富田城を降す。大友・毛利の和睦破綻、毛利軍豊前侵入
永禄一〇	一五六七	五五	九月、甘木休松で秋月種実と激戦、戸次一族、重臣、筑後衆の多くを失い大苦戦。宗麟無念の感状（甘木合戦）
永禄一一	一五六八	五六	立花山城主・立花鑑載謀反、敗北死、問注所鑑豊の娘で未亡人の仁志姫と再婚
永禄一二	一五六九	五七	宗麟が高良山に出陣、立花山、博多周辺で五月から半年間大友と毛利総力戦、立花山落城。大内輝弘が山口に攻め入り毛利軍撤退（立花山合戦）高橋鑑種、宗像氏貞、秋月種実ら降伏、閻千代誕生
元亀元	一五七〇	五八	西郷党領袖河津隆家を殺害
元亀二	一五七一	五九	大友加判衆を退き立花山城督、以後一五年間城主。六月、毛利元就死七五歳。宗像氏貞の妹色姫二五歳を側室
天正二	一五七四	六二	出家し麟白軒道雪と号す
天正三	一五七五	六三	五月、ひとり娘閻千代七歳を立花山城督に、少女城主誕生

慶長九	一六〇四	三月、黒田如水死五九歳
慶長一四	一六〇九	五月、小野鎮幸肥後で死六四歳
慶長一五	一六一〇	奥州で三万石に加増を機に立花宗茂を名乗る
慶長一六	一六一一	六月、加藤清正死五〇歳
慶長一七	一六一二	六月、由布雪下が奥州で死去
慶長二〇	一六一五	五月、大阪夏の陣、豊臣滅亡、七月、元和改元
元和二	一六一六	四月、徳川家康死七五歳、五月、道雪後妻仁志姫（宝樹院）死
元和六	一六二〇	十一月、立花宗茂柳川十一万石に再封
元和九	一六二三	二月、薦野増時死八一歳、八月黒田長政死五六歳
寛永一〇	一六三三	九月、米多比鎮久死八三歳
寛永一五	一六三八	島原の乱に宗茂七二歳で出陣
寛永一九	一六四二	十一月、宗茂江戸で死七六歳

（注）薦野家譜に引用の古文書などを参考に作成、令和四年、土師武

## 二天一流の兵法家、立花峯均

飯島勇一郎

宮本武蔵は江戸時代前期の剣客で、二刀流、二天一流といわれる剣の流儀を極めた開祖です。生涯に六十余の勝負をして、一度も負けたことがないという剣客ですが、不明な点が多く、謎の多い人物とも云われています。誕生年や出身地についても複数の説があり、また関ヶ原の合戦に出陣したのか、大阪の陣では徳川方か豊臣方か、沢庵和尚と交流があったのか、お通という女性は実在したのか等、疑問が多い人物と云われています。



宮本武蔵画

(島田美術館蔵)

江戸時代から既に講談や読物の主人公になっていった為、虚実が入り混じっていた

ようですが、そうした中、戦後の吉川英治の小説「宮本武蔵」は空前の作品となり、武蔵像として出来上がったようです。

武蔵の伝記として有名なものに安永五年（一七七六）に出された「二天記」がありますが、この「二天記」が武蔵像を作り上げ、人々に浸透させたと云われています。しかし宝暦五年（一七五五）にすでに弟子筋によって武蔵伝記「武公傳」が編まれていました。「二天記」は、これを下敷きとして広く世間に読まれる事を企画して作られたと云われています。そのため添削増補し創作しているのです。史料としての価値は各段に落ちるとされ、武蔵の事績を研究するなら「武公傳」の方が良いとされています。

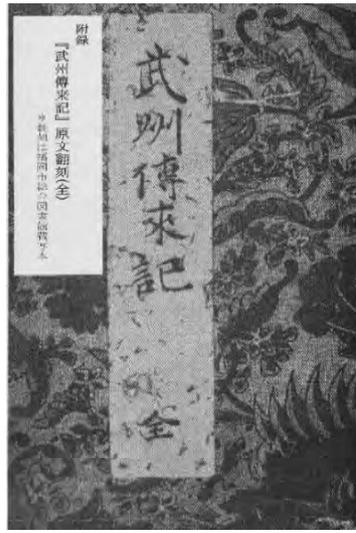
この「武公傳」よりも古いとされているのが「丹治峯均筆記」（たんじほうきんひつき）というのがあります。武蔵研究者の間では「宮本武蔵伝記」としては最古のものとしていますが、部分的には信

頼できるものの、誤りも多いとの評価もあります。著者は黒田藩士で、薦野増時の曾孫にあたる立花専太夫峯均（みねひら）です。父は黒田藩三代光之の家老立花重種で、実兄に立花実山（重根）がいます。立花峯均は兄実山から直接に南坊流茶道を受け、南坊録の書写を許されたほどの高弟の一人ですが、その一方で宮本武蔵の流れを汲む筑前二天流の五代目の兵法家としても知られています。

### 「丹治峯均筆記」について

「兵法大祖武州玄信公伝来」と伝わる書を一般に「丹治峯均筆記」と称していますが、後に正式名が「武州傳來記」であることが判明しています。立花峯均は晩年に宮本武蔵の伝記として「兵法大祖武州玄信公伝来」を書き、その奥書に享保十二年（一七二七）五月十九日の日付で「兵法五代之門人、丹治峯均入道廓庵翁」と記していることから、当時、丹治峯均（たんじほうきん）と名乗っていたようです。立花峯均は黒田藩家臣でしたが、

執筆当時は、志摩郡青木村（現福岡市西区）に隠遁していて、「兵法大祖武州玄信公伝来」を編纂していたようで「武州玄信伝来」と呼ばれていたそうです。しかし、いつしか丹治峯均が記した文書という意味で「丹治峯均筆記」と呼ばれるようになったそうです。



### 「武州伝来記」 (福岡市総合図書館蔵)

丹治峯均については、明治四十二年（一九〇九）の熊本の「宮本武蔵遺蹟顕彰会」による学術研究書「顕彰会本」で「丹治峯均筆記」として初めて紹介されています。内容について明治期末に刊行され、武蔵伝記として活字化され全国的に知られるようになりました。内容は宮

本武蔵の生まれに始まり肥後国で死ぬまでのさまざまな逸話集が書かれています。

### 「立花峯均の生涯」

立花峯均は十九歳の時に五百石で四代藩主黒田綱政に仕え、二十一歳の春に宮本武蔵の流れをくむ筑前二天流四代師範吉田実連（さねつら）の門下生になります。立花峯均の稽古は凄まじく、一日も欠かさず師弟の稽古を重ね、藩主の意向よりも兵法稽古を優先したという人で、藩主の江戸参勤や長崎警備に随行しても、着いた翌日から出発の前日まで毎日太刀を振り続け、十三年間修業を積んだそうです。その後、師匠の吉田実連は病気となり気力も衰え、剣術の伝授もままならない状態になったので、元禄十六年（一七〇三）、立花峯均が三十三歳の時に吉田実連の師匠である二天流三代目柴任美矩（よしのり）から審査を受けることになりました。柴任美矩は父立花重種と友人関係で、立花峯均は以前、柴任のいる播州明石（兵庫県）まで訪ねた事が

あったようで、立花峯均は播州明石に行き三代柴任美矩から二天一流の審査を受け、二人の師範による特異な形態で五代目二天一流の相伝がされています。ちなみに柴任・吉田の両兵法者を引き立て黒田藩に二天一流を普及させたのが立花峯均の父、立花重種で、黒田藩では江戸初期から明治初年まで二天一流が伝えられ、藩の正式武術として「分限帳」にも出ています。武蔵の継承の流れは二流あり、「肥後二天一流」と「筑前二天一流」の二つの流れがあります。

宝永四年（一七〇七）黒田光之が死去すると、藩主綱政は光之側近の立花実山たちに隠居を命じます。兄の立花実山が逮捕粛清されると、当時三十八歳の立花峯均も連座する形で小呂島へ流罪となつてしまいました。しかし立花峯均は黒田光之に仕えた経験がないのに流罪になっているのは不思議な気がします。立花峯均は四十五歳の時に赦免になっていますが、全面的に許されたわけではなく、次兄

の立花増武の監視の下に置かれ、志摩郡青木村で過ごすこととなります。この藩主黒田綱政の粛清で幽閉されたのは、立花一族の中で立花実山と嫡男の立花道暁（みちあきら）、それに立花峯均の三人だけが処分を受けています。

### 立花実山（重根）

実山は茶人として著名で、千利休の秘伝「南方録」の編者として知られています。若年の頃から貝原益軒、木下順庵に学び、藩の文治面のリーダー的存在でした。実山は宝永四年（一七〇七）先代藩主光之の死後、仏門に入ったが、翌年、四代藩主綱政に罪を着せられ、家禄召上げの上、非業の死を遂げています。罪状は不明ですが、黒田四代目家督相続騒動の原因による恨みともいわれています。

「筑前二天一流」の直系師範の流れは、宮本武蔵―寺尾信正―柴任美矩―吉田実連―立花峯均と続いていきます。享保七年（一七二二）、立花峯均、五十二歳の時、

二天一流の五代目師範として、峯均の実弟の立花重躬（しげみ）の長男勇勝（たけかつ）、次男種章（たねあきら）、桐山丹瑛の三人に二天一流の兵法を伝授しています。これは二天一流を絶やさないために、一子相伝でなく三人相伝という形をとって、一同に「五輪書」を渡し二天一流を伝授したそうです。立花勇勝・立花種章（増寿）の二人は幼い頃から伯父立花峯均に従って二天一流を学び、奥義を極めたといえます。立花峯均は、晩年は志摩郡青木村に隠遁し「半間庵」と名付け禅茶に親しみ、「丹治峯均」と号して、当時は多くの黒田藩の若侍たちが福岡から峯均の下に兵法稽古を学びに多くが訪れていたそうです。

立花峯均は五十七歳の時、四代吉田実連と三代柴任美矩から聞いた宮本武蔵の話を武蔵伝記として「兵法大祖武州玄信公伝来」として書上げ、「追加」するかたちで、二天一流の二代寺尾信正、三代柴任美矩、四代吉田実連の略伝を書き、「自

記」として自伝を書いています。これらの文書を総称として「丹治峯均筆記」と呼ばれています。

三代柴任美矩は肥後細川藩時代に実際に武蔵に会っていたことがわかり、門下生として晩年の武蔵を五年間見ていたようです。武蔵の死後は一番弟子の寺尾正信に随行し仕えていたようで、「丹治峯均筆記」の信憑性は高いと考えられています。立花峯均は延享二年（一七四五）に死去し、立花実山が創建した博多の東林寺に葬られています。享年七十五歳でした。立花峯均は宮本武蔵を慕い、生涯妻帯しなかつたので家は断絶しています。



立花実山の墓

東林寺には立花実山と開山の卍山道白和尚の墓が並んでいます。立花峯均の墓は戦後の区画整理で昭和三十年代に撤去されたそうです。

### 「宮本武蔵の実像」

「丹治峯均筆記」をもとに武蔵の実像を紹介すると、武蔵を名前と書いている人は多いと思いますが、宮本武蔵は表題にもあるように「武州」としています。武蔵は名前だけでなく「武蔵守」の略で次官を意味しています。また武蔵の生誕地は書かれていないが、「五輪書」と同じく「播州の産」としている。しかし「父に勘当された後、播州に至り母方の叔父の僧に養育され九歳から十三歳まで過ごした」とあり、父新免無二に養育されていた九歳までは美作国にいたと思わせる表記になっています。

関が原合戦の時、武蔵は豊後国中津城の黒田如水のもとにいて、武蔵の父新免無二も少し前から黒田家に仕えていた。

如水は兵を集めて豊後国富来城を攻めています。武蔵はこれに参加して、堀越に敵の槍を奪い取った。その際に負った股の傷口に馬糞をこすりつけて痛がる様子を見せなかったという。武蔵が関が原合戦時に具体的な行動した記録はなく、宇喜多家に属し、西軍として戦ったというのは創作上の話とされています。

有名な巖流島の決闘は「二天記」に慶長十七年とあり、定説のように扱われています。が、「丹治峯均筆記」では「弁之助十九歳」とあり、慶長七年に当たります。また武蔵に宛てた手紙は偽物の可能性が高く、本物の手紙は発見されていません。内容も違って、はじめ佐々木小次郎は父新免無二に対し再三決闘を申し込んだが、閉口する父に代わって対戦を買って出たのが武蔵としています。決闘の内容も佐々木小次郎が鞘を海に捨てるのは同じだが武蔵が先に到着している。武蔵の武器の櫛も弟子の青木条右衛門に作らせ、二寸釘を隙間なく打ち込んだものと

いう。突き合に始まった対決は小次郎の刀が、武蔵の左の手首を打ち、武蔵の木刀は小次郎の頭を砕いた。次いで小次郎の二打は武蔵の袴を切り裂き、武蔵の木刀は小次郎の同じ場所を打ち砕いた。これで勝負は決し、武蔵は立ち去る。小次郎は両目を見開いて立ち上がり、「水をくれ」と叫んで倒れたという。「二天記」にある小次郎の刀が備前長光とあるが、これは大名が贈答品として使う特別な刀で小次郎が使用したとは考えにくいと専門家は指摘しています。

近年、「丹治峯均筆記」の原本写本と考えられるものが二本あります。一つは福岡総合図書館蔵の「武州伝来記」でも一つは熊本市の島田美術館蔵の「兵法太祖武州玄信公伝来」といわれています。写本の校合により正式な書名は「武州伝来記」だと判明しています。内容構成は同じで二天一流の開祖新免武蔵の伝記を中心に「兵法太祖武州玄信公伝来」としてまとめたものとされています。

参考資料

宮本武蔵研究「武州傳來記」 福田正秀  
 立花峰均（二天一流と南坊流） 松岡博和  
 歴史読本「丹治峰均筆記」 本山一城

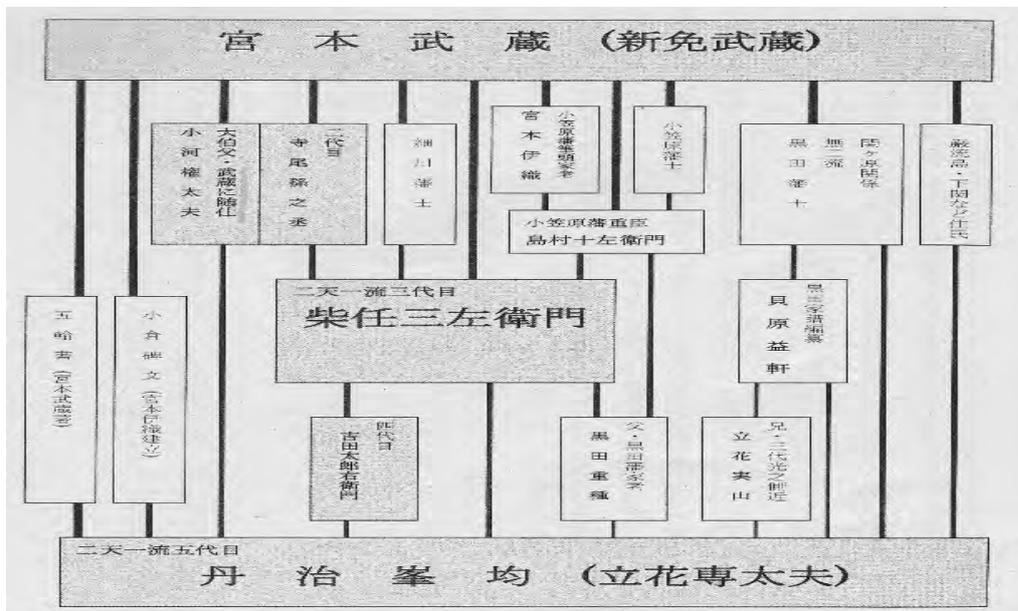
本書はどのように

認識されていたのだろうか。

「武州傳來記」の取材源図

多くの武蔵研究者から武州傳來記（丹治峯均筆記）について、武蔵没後、八十一年以上を経てから成立し、他にない詳しい逸話類も多くあるが、取材源がなく、信憑性があるか疑問であると評価され、ほとんどが創作と厳しい受け止めでした。しかし、「武州傳來記」の中に峯均の大伯父にあたる小河権大夫は壮年の時に武蔵に従っていて、武蔵が細川家に下る前に権大夫の家に滞在している。峯均は「柴任と吉田の話」として取材源を明らかにしている。ただ吉田は武蔵との接点がなく、柴任から聞いた話と思われ、これを取材源としているようです。

「武州傳來記」取材源図



コラム

泰勝寺の宮本武蔵の供養塔

熊本市に細川家菩提寺跡の泰勝寺があります。そこに細川藤孝夫妻、忠興夫妻の「四御廟」を祀っていますが、その先に宮本武蔵の供養塔（五輪塔）があります。泰勝寺二世春山和尚と親交があったことから供養塔が立てられたとされています。



武蔵は寛永十七年（1640）五十七歳の時、細川忠利に招かれ、六十五歳で亡くなるまで八年間を過ごしています。

この五輪塔は鎌倉・室町時代の五輪塔を寄せ集めて作られたのではないかという説があります。

## 戦国時代の古文書は楽しい

古文書は一見ただけで「解らない、読めない」とほとんどの人が敬遠してきます。しかし古文書は明治時代までは普通に読まれていました。それが今日では全く読めなくなってしまいました。確かに庄屋文書や触書などは長文で個性のある文字で読みにくく苦労します。しかし戦国時代の感状や書状には長文もありませんが、短い書状もあります。これらの書状は、当時の時代を写しだしています。内容から、当時の真実の実情を写し出し、時代背景が想像できます。

薦野増時の自筆の書状  
城納米の報告



(柳川古文書館所蔵)

翻刻文

致城納米之事

合五石定俵数三斗入十六

式斗入 壹也

右悉於爰元堅調差上候、俵数被成  
御請取、御披露奉頼候、恐々謹言

八月十五日 薦野三河守

増時 (花押)

御奉行衆中 参

読み下し

致(いたす)城納米(じょうのうまい)の事、合(あわせて)五石、定俵数(ていひようすう)三斗入り、十六、式斗入り、壹なり。右(みぎ)悉(ことごとく)爰元(ここもと)に於いて、堅調(かたくととのえ)差上げ候。俵数(ひようすう)御請取(おうけとり)被成(なされ)、御披露、頼(たのみ)奉(たてまつり)候。恐々謹言  
八月十五日 薦野三河守増時 (花押)  
御奉行衆中 参 (まいる)

城納米||城に納める米

爰元||自分の所。

堅調||しつかりそろえ、

3斗×16||48斗

2斗×1||2斗 計50斗||5石

時代背景 (解釈)

この書状は薦野増時の自筆の書状です。現存している唯一の書状で、外に増時自筆の書状は残っていないと柳川古文書館の話でした。そのため貴重な増時自身の書状になります。この書状は「柳川市史」の小野文書に同文の記載があります。この書状は天正七年(1579)〜天正十年(1582)の頃のものと考えられ、

「城納米五十斗(五石)を差上げ候」とあることから、天正七年に生の松原合戦があった頃の書状ではないかと考えられます。

「豊前覚書」によると天正七年八月になると、志摩郡柑子岳城の木付鑑実より兵糧不足の救援要請を受けたため、立花勢は食糧を輸送し、その帰途の途中、生の松原で原田勢が襲撃したので激戦となったとあります。この時の柑子岳城の兵糧要請に対し、立花城も困窮している中、薦野増時は米五拾斗を調達し、柑子岳城に支援したことを立花城の御奉行衆に送った書状ではないかと考えられます。

この生の松原合戦では、緒戦では立花方が苦戦したが軍を立て直し、高祖城下まで追い上げ引き揚げたと記しています。しかし、柑子岳城の糧食はいよいよ困窮し、この年の冬、城督の木付鑑実は城を捨て立花城へ撤退しています。これより志摩一帯は高祖城の原田信種が奪取したことで、志摩郡は原田氏の領域となった。

米多比文書(大友義鑑所領安堵状)  
「米多比の地二十五町」を還附される



(米多比鎮人所蔵)

### 翻刻文

筑前国院内名字之地

貳拾五町分之事 令還附候

可有知行候、恐々謹言、

七月九日 義鑑(花押)

米多比次郎左衛門尉殿

### 読み下し

筑前国院内(いんない)名字(みょうじ)の地、二十五町分の事、還附(かんぷ)令(せしめ)候。知行有るべく候。恐々謹言(きょうきょうきんげん)

○院内||古賀市を中心に福津の一部地域

○名字之地||家屋敷を構えた本貫地

○米多比次郎左衛門尉||米多比元実

(次郎左衛門尉は「米多比系図」に記載がないが、記録にある米多比元実と考えられています)

○恐々謹言、||恐れながら謹んで申しあげるの意。手紙文の結びに記して、敬意を表わします。

### 時代背景(解説)

この書状は米多比氏が所蔵している中で、最古の文書とされ、発給は天文五年

(1536)と考えられています。戦国期に米多比地区に居住していた米多比氏に対し、大友義鑑(宗麟の父)が米多比次郎左衛門尉に宛て「米多比の土地二十五町を返還した」書状です。この米多比の地は米多比氏が家屋敷を構えた本貫地で、五年前の享祿四年(1531)に大友義鑑から「闕所処分」され、米多比の土地を取り上げられたものです。

米多比の土地が大友氏から取り上げられた理由として、当時、米多比氏は大友氏に属していたが、大内氏(山口県)の糟屋郡侵攻に対し、米多比氏が大内氏に従おうとしたことで大友氏の反感を買い闕所されたと考えられます。その後、大内氏は立花城を陥落させ、立花城一帯を領有したことで大友氏と激しい争いになりました。そんな中、米多比次郎左衛門尉は大友氏に従おうとしていました。天文三年に將軍足利義晴は大友義鑑と大内義隆に和睦を命じたため、大内氏は大友氏に旧大友領域を返還したことで、大友氏は味方となった米多比次郎左衛門尉に再び「米多比の地二十五町」を返還したと考えられます。

米多比善治文書「ねたミふく女」  
道雪が米多比弾介の娘福女に送った書状



(米多比善治氏所蔵)

翻刻文

まえの十日よし川ニ  
おみてしんふたん介

せんし候しゆん

きの事とハ申

ながらせひなく

そんし候、御てう

せつのおもむき

やがてひろういたす

べきの間、御かんよき

あるべからず候、たう雪と

してもかならず御

心さしをあらわし

申へく候、かしく、

九月廿一日 たう雪 (花押)

ねたミふく女

読み下し

前之十日吉川ニ於いて、親父弾介  
戦死候、順儀之事とハ申しながら、  
是非なく存知候、御忠節の趣、  
やがて披露致すべきの間、御感余儀  
あるべからず候、道雪としても必ず  
御志を顕し申すべく候、かしく

九月二十一日 道雪 (花押)

米多比福女

時代背景

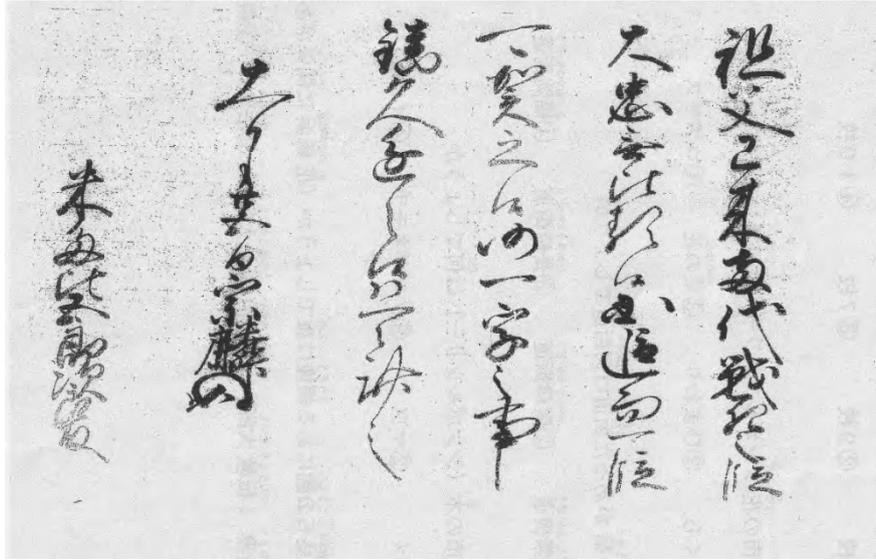
天正八年(1580)九月十日に起き  
たとされる吉川庄の戦いで米多比弾介が  
戦死したことに對し、九月二十一日付で  
戸次道雪は弾介の娘、福女に哀悼の意を  
述べた書状を送っています。弾介には娘  
福女と幼い男子繁兼の二人の子供がいま  
した。また、十二月八日付で大友義統も  
米多比福女宛に書状を送っています。

吉川庄の戦いは鞍手郡吉川(若宮)で立  
花勢と宗像勢が戦ったとされています。

米多比弾介の祖父米多比家兼は大内氏  
に従っていましたが、大内氏が滅亡する  
と父の益兼と共に宗像氏貞の家臣になっ  
ています。そのため大内系米多比氏と言  
われています。しかし米多比弾介は宗  
像氏に従わず、立花城督の戸次道雪に従  
い、米多比鎮久と一緒に行動を共にして  
いました。

この吉川庄の戦いは宗像勢との戦いで  
すが、米多比弾介の父である米多比益兼  
は宗像氏貞の家臣ですから、この戦いで  
は親子で宗像方と立花方とに分かれて戦  
い、戦死したことが考えられます。

米多比五郎次郎宛の大友宗麟書状  
米多比鎮久の祖父、父が戦死する



(米多比文書)

### 翻刻文

祖父已来兩代戦死之段

大忠無比類候、必追而一段

可賀之候、仍一字之事

鎮久進之候、恐々謹言

十一月二十五日 宗麟 (花押)

米多比五郎次郎殿

### 読み下し

祖父已来 (いらい)、兩代戦死の段、大忠無比類無く候。必ず追而 (おって) 一段、これを賀すべく候。仍 (よって) 一字の事、鎮久これを進め候。

恐々謹言 (きょうきょうきんげん)

十一月二十五日 宗麟 (花押)

米多比五郎次郎殿

### 解説・時代背景

年不詳の十一月二十五日、米多比五郎次郎宛の大友宗麟の書状で、米多比五郎次郎は米多比鎮久の幼年の名前です。

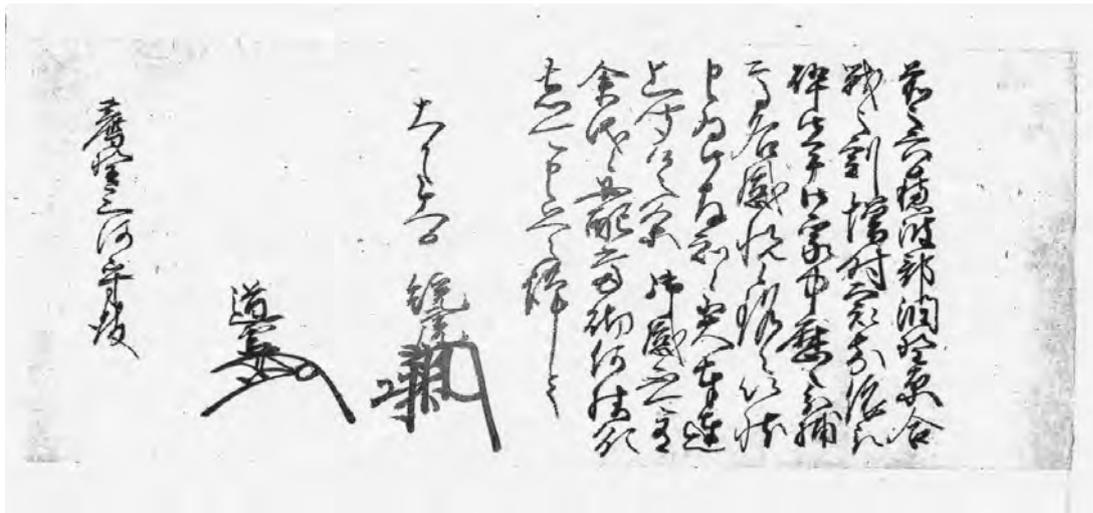
「祖父已来兩代戦死之段」とあり、鎮久の祖父と父の二人の戦死に対する感状で

す。祖父 (越中守) は弘治三年 (1557) 六月に秋月文種攻めに出陣し戦死しています。その後、五郎次郎の父弾正忠 (大学助直知) が戦死したことで、五郎次郎に「鎮久」の実名が与えられ、それと同時に鎮久は米多比家の家督も相続したと考えられます。

大友義鎮が宗麟と号したのは永禄五年 (1562) の事です。この書状は永禄五年以後の書状と考えられます。「米多比善治文書」に永禄元年 (1558) と考えられる米多比弾正忠 (五郎次郎の父) 宛の大友義鎮の書状があり、祖父 (越中守) が戦死した事を伝えています。この弾正忠は臼杵鑑速書状から「鎮家」が実名である事が確認されています。

五郎次郎 (鎮久) の父鎮家 (弾正忠) の戦死について、「米多比系図」では永禄七年 (1564) に米多比直知 (鎮久の父) が立花鑑載の謀叛で謀殺されたとしています。もし直知が鎮家に当ると考えられるなら、五郎次郎の父直知 (鎮家) は、永禄七年 (1564) に戦死したことになります。

薦野文書「潤野原合戦」  
増時宛ての道雪・統虎の連署状



翻刻文

前之六日穂波郡潤野原合戦之刻、増時最前依被  
碎御手、御家中歴々分捕  
高名感悦候、銘々以状  
申候、為御存知候、尖奉達  
上聞候之条、御感不可有  
余儀候、必配当砌何様頭  
志可申候、恐々謹言

十一月十一日 統虎(花押)

道雪(花押)

薦野三河守殿

読み下し

前の六日、穂波郡潤野原合戦の刻(こく)、増時、最前おん手を碎かれるに依り、御家中歴々分捕り高名感悦候。銘々状を以て申し候。御存知のため候。尖(さき)に上聞に達し奉(たてまつ)り候の条、御感、余義有るべからず候。必ず配当の砌(みぎり)、何様志(こころざし)を頭(あらわ)し申すべく候。恐々謹言(きょうきょうきんげん)

歴々(れきれき) 地位身分など高い人々

何様(なにさま) 〓 どのような  
尖(さき) 〓 まつさきに

時代背景(解説)

この書状は天正九年(1581)十一月六日の穂波郡潤野原合戦での薦野三河守の奮闘に対する感状です。「立花記」に天正九年八月十八日に高橋統虎は十五歳で立花養子として入城している記事があり、婿入りして十一月六日に初陣として穂波合戦に出陣しています。書状は立花統虎、道雪の最初の連署名の書状とされています。

潤野原合戦は秋月方の諸城を攻めようと立花・高橋軍が生葉(浮羽)郡に侵入し、秋月領の嘉麻・穂波へ立花道雪、高橋紹運の連合軍六千余人が攻め込んだ陽動作戦です。生葉で秋月種実は道雪・紹運が嘉麻郡に打って出た事を知ると、急ぎ兵の一部を割いてこれに当り、長野・城井・杉らの応援を得て総勢八千人をもってこれに当らせたので、穂波郡潤野原で激しい合戦となった。この戦いでは道雪・紹運軍は勝利し帰陣しようとしたところ、秋月勢が新手を以て追跡したので再び激しい戦いとなった。



古賀郷土史研究会

令和四年八月六日

会長

飯島 有吉

今任 芳昭

大須賀 理恵子

加来 正熙

崎山 英二

永留 邦臣

曲 邦 臣

松田 信一郎

村山 美婦子

森下 泰一

山 善行

吉住 長敏

植田 謙一

土師 武

顧問

(五十音順)

編集委員

飯島勇一郎  
永留 邦臣  
吉住 長敏  
村山美婦子

御協力

挿絵  
吉住 暁  
(東京在住)

一字の書「葉」

豊福 美代

古賀市役所

航空写真提供  
まちづくり推進課  
つながりひろば

編集後記

古賀周辺の郷土史に興味を抱く在野の人々が気持ちを一つに研究会を立ち上げて二十年。従前の会規は「事務局を古賀市歴史資料館に置く」とあるように市主導型だったが段々と自立していく。その足跡はこの二十年誌の編集姿勢と中身が物語っているように思う。古賀市のコミュニティ活動補助金で七団体中、実現性、効果性、将来性で高い評価を得て記念誌発行補助金の交付決定があった。先達の並々ならぬ持続した郷土愛を育む積み重ねと合わせ古賀市の文化行政の配慮に感謝したい。  
(吉住長敏)

古賀郷土史研究会創立二十周年記念誌

つなごう、我が郷土の歴史と文化

(古賀市コミュニティ活動補助金事業)

発行年月日 令和4年(2022)11月15日

編集・発行 古賀郷土史研究会 編集部

古賀市花見東2丁目21-25

印刷・製本 社会福祉法人 コロニー印刷

糟屋郡新宮町緑ヶ浜1丁目11-1



米多比山の風景

古賀郷土史研究会